

品川用水における水利施設(品川区内)遺構の 残存状況調査

2017年

渡部 一二
水縁空間デザイン研究所

共同研究者 須藤 訓平

調査研究の課題

品川用水における水利施設(品川区内)

遺構の残存状況調査

—「品川用水」とは—

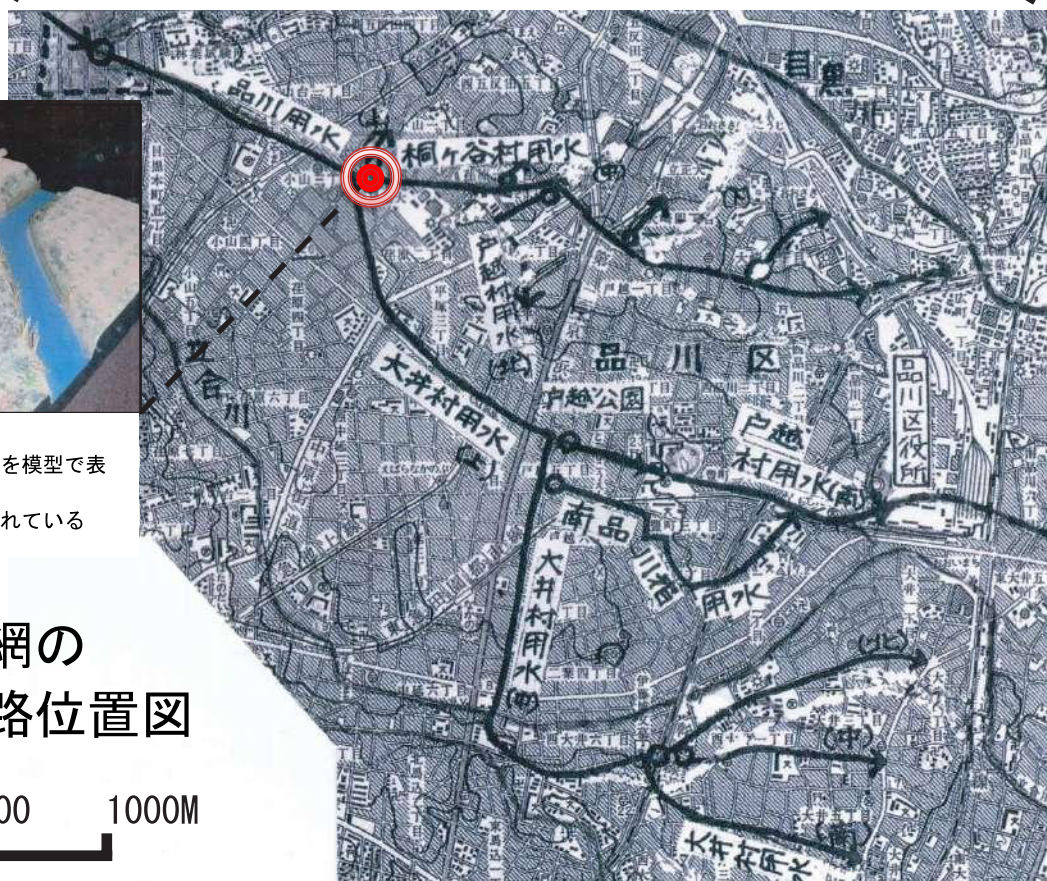
- 江戸時代の初期につくられた水路。
- 水源は「玉川上水」武蔵野市から「分水」されていた。
- 「分水」されていた水は三鷹・世田谷・目黒を流下し品川へ入った。
- その水は当初、品川戸越の細川藩庭園内の泉水池用でその後、農業用水として利用され続け 300 年以上各地に恵みをもたらしてきた。歴史的文化的遺産でもあった。
- 「玉川上水と分水路」が〔未来遺産〕の認定を受けた。



写真 朝日地蔵の辻
・江戸時代の品川用水分水口を模型で表している
・実物は品川歴史館に展示されている

品川用水路網の調査対象水路位置図

0 500 1000M



本調査は「とうきゅう環境財団」の助成をうける

水縁空間デザイン研究所 渡部 一二
須藤 訓平

品川区の「品川用水」における水利施設遺構の残存状況調査

— 「品川用水」の水利遺構地をとりまく環境調査 —

目 次

1章	調査の目的と方法	1
1.1	背景	
1.2	調査の目的	
1.3	現地調査の範囲	
1.4	調査内容と方法	
2章	品川用水の形状に関する背景	3
2.1	品川用水の概要	
2.1.1	時代変遷	
2.1.2	取水口に関する古文書、出版書面等の記録	
2.1.3	品川用水の歴史に関する文書	
2.2	「品川用水絵図」から水路形状を読み取る	7
2.2.1	伏越樋の事	
2.2.2	「御高札の図」が伝えるもの	
2.2.3	「品川用水取込樋」を渡る水	
2.3	水路位置のあらまし	
2.4	品川用水位置図について	11
2.4.1	品川用水の流路のあらまし	
2.4.2	品川用水の区内における特長	
2.4.3	品川用水の位置確認に用いた資料	
2.4.4	品川用水の最上流、最下流の位置	
2.4.5	柏谷村を流通する品川用水路の形状	
2.5	品川用水路周辺部の水環境の影響	
2.5.1	水環境への影響	
2.5.2	漏水、湧水環境を形成した要因について	
2.5.3	品川用水の漏水、盗水の対応	
2.5.4	「盗水事件」に関する記録	
2.6	標高から築堤の形状を探る	22
2.6.1	地形図の「標高ライン」から品川用水路を想像する	
2.6.2	取水口から世田谷区界までの流路と標高を探る	
2.6.3	世田谷区内の品川用水路の標高から築堤規模を探る	
2.6.4	品川用水路断面形状を探る	
2.7	品川用水路の流量、流速を探る	
2.7.1	都・水道局の報告書から	
2.7.2	流速に関する情報	
2.7.3	水路勾配	
3章	品川用水の創設から昭和中期	35
3.1	品川用水の創設	
3.2	品川区域の自然環境	36
3.2.1	地形	
3.2.2	大地と谷の地理	
3.2.3	地層	
3.2.4	地下水	

3節	品川用水の流路位置		
4節	品川用水の果たした役割		43
	1) 維持と管理		
	2) 品川用水にまつわる紛争		
5節	江戸時代の農業		
	1) 農業のあらまし		
	2) 九ヶ村における石高		
6節	明治維新後からの品川用水		46
	1) 明治維新时期		
	2) その後の品川用水		
	3) 品川用水の現状と遺構		
4章	品川用水と分水路の「遺構」を探る		48
	1節 水利遺構とその空間を見つける方法		
	2節 「絵図」から水利遺構にせまる		
	3節 等高線が入った「地形図」から分水路の位置を知る		
	4節 出版物に品川用水を表現した写真、絵図、作文を探し出す		
	5節 水路を形成した構造、規模、形状の情報を集める		
	6節 「品川用水絵図(二)」「図2-1参照」を解説		
5章	水利遺構を見い出す着眼点と作業		60
	1節 事前の現地調査で得た事項		
	2節 水利遺構地を「水利遺構空間」として見なす		
	3節 水路の規模(幅員、深さ、通水量)の推定		
	4節 現地調査する水利遺構地のリストアップ		
	1) 品川用水・桐ヶ谷水系		
	2) 戸越分水系		
	3) 大井分水系		
	5節 水利遺構地の現場確認事項票(シート)		
6章	水利遺構地の現地調査まとめ		64
	1節 水利遺構地の位置を示す		
	2節 水系ごとの解説		
	① 品川用水ー桐ヶ谷水系と面影ポイント案内図	 65	
	② 戸越分水系と面影ポイント案内図	 73	
	③ 大井分水系と面影ポイント案内図	 89	
※	調査後記		103
※	参考文献一覧		105

1章 調査の目的と方法

1. 背 景

本調査・研究の対象としている品川区内の「品川用水」は、玉川上水が流下する武蔵野市に設けられている分水口で受水し、武蔵野市から三鷹市、世田谷区、目黒区を通り品川区内に通水してきた水利施設である。

品川用水は、江戸時代初期、細川藩別邸の庭池確保のために創設され、1667年に農業用水として利用目的が変わり、昭和20年代まで通水されてきたが、農地の都市化が進み農業用水としての役目は終わる。

現在、品川用水と分水路網は、全区間で通水は止められており、主要な水利施設は取り払われたり埋設されるなどして、その多くは、道路用地等に転用されている。

しかし、品川用水に関する資料・情報を集め解読し、現地調査してゆくと水利施設の遺構とそれらの面影が見え隠れしてくる。

2. 調査の目的

本調査では、水利施設が道路化された場所であってもその地が過去数百年間、水路の水と共にあった風景構成物が残存していると考えている。(図1-1 参照)

品川用水は、上流部で分派水路となり水利用地にむけて通されており、農業用、生活用、水辺の生物環境になるなどと、共にうみだされた水文化の形跡に‘歴史的価値’があると見てきた。

この視点に立って品川区内にはりめぐらされていた分水路網に、どんな水利遺構地とそれを取りまく風景要素が存在しているか、明らかにするのが本調査の目的である。



図1-1 風景構成要素領域図

参考：「水路の親水空間計画」 渡部一二著・枝報堂出版

3. 現地調査の範囲

品川用水創設の主目的は、玉川上水の水を受水し用水路から品川区内の水田稲作地へ通水することにあった。

品川用水は、品川区内に入ると 3～4 方向へ分派水路によって水利用地へ通水される方式がとられていた。

この通水方式を考慮して現地調査地は、2 種類に分けて実施することにした。

- 1) 一次分水路として文献等に図示されているもの。(図 4-1 参照)
- 2) 入手した資料のなかで水利遺構地が、写真、絵図、説明文などがあるもの。

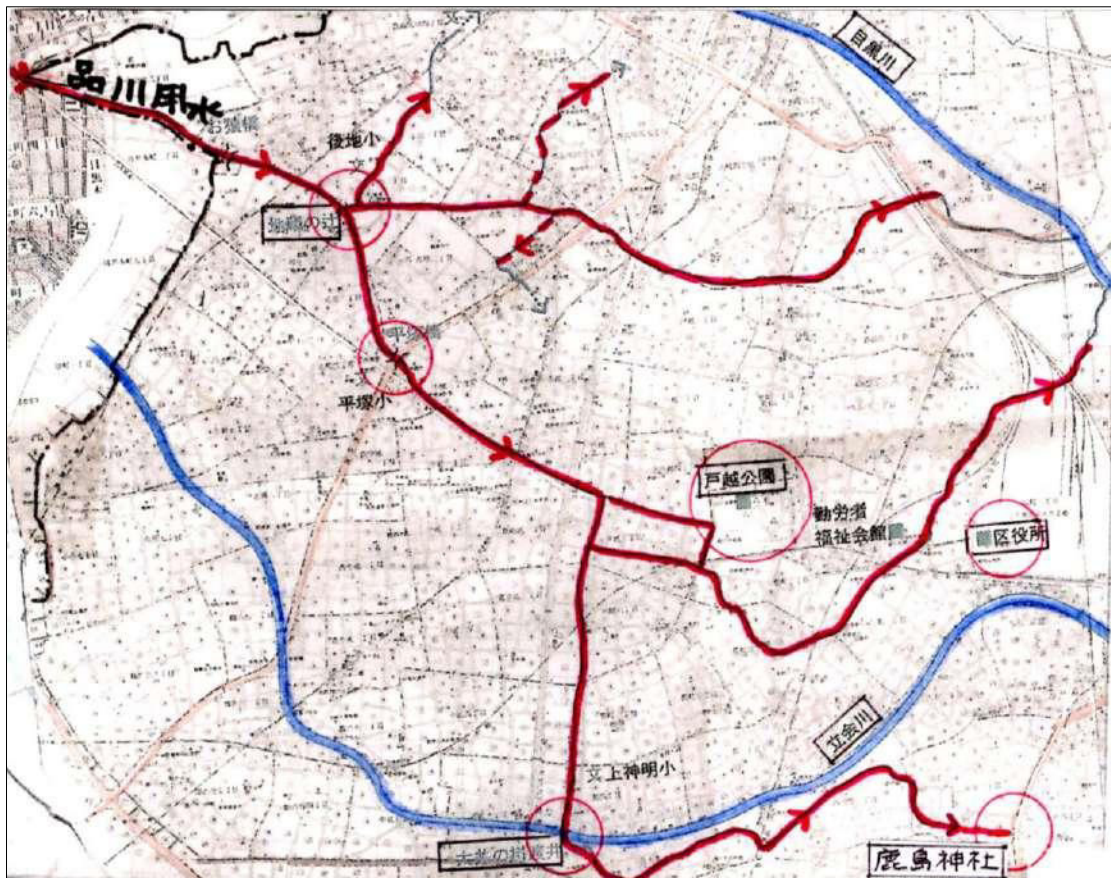


図 4-1

4. 調査の内容と方法

本調査・研究の主目的は、品川区内の水利遺構の残存状況を明らかにすることである。この目的を達成するため、品川用水と分水路に関する資料・情報の収集領域は、下記に示す。

- 1) 品川用水の歴史、施設の管理内容など。
- 2) 通水域の地形、地理、地下水など。
- 3) 用水利用の内容と形態(生産業、生活、親水行為、風習など)。
- 4) 水路網が道路などに転用される直前の様子(写真、図画など)。

以上の収集された資料は、解読し現地調査のため基礎資料として利用する考えである。

2 章 品川用水の形状に関する背景

1 節 品川用水の概要

1) 時代変遷

- 品川用水は、当初から灌漑用水として開削されたものではない。三鷹市史によると寛文 2 年 (1662) 細川越中守が、品川領戸越、蛇窪両村入会地に抱屋敷 45,000 坪を拝領した際、庭内泉池用水として引水したのが、当用水の前身である。
- 理由は詳でないが(多分、水路の維持に年々莫大な費用と人手を要したためと推定されるが)寛文 6 年に至り、細川家はこの戸越上水(品川用水)を廃止した。
- 寛文 7 年 7 月、品川領宿村の人々が、旱損御救いの為の用水として旧戸越上水の古堀と用水を賜りたいと幕府に出願したものが許可されて品川用水としての歴史が始まった。
- 品川用水は、旧北多摩郡境村水吐(現・武蔵野市境町 3 丁目)で玉川上水から分水され、上・下連雀を貫流し現三鷹市新川 3 丁目と 6 丁目の境で 2 筋に分派し、西南流する水路は入間川用水、東流するのが品川用水である(詳しい説明は「三鷹市史」P293~P297 参照)。
- 東流する品川用水は、世田谷の烏山に入り、粕谷、廻沢、船橋、桜、桜丘を西から東に流下し、国道 246 号と環状線 7 号道の交差点で南東に折れて野沢に入り、下馬 6 丁目を通り、目黒区碑文谷に入り、次いで品川の旧 11 ヶ村の水田灌漑を主目的に活用された。その全長はおよそ 7 里(28km・鹿島神社横)に及ぶ。
- しかし、戦後の市街地の拡大影響で、昭和 25 年から 27 年にかけて主に塵芥で埋め立てられ、寛文 3 年以降 300 年の水辺の歴史を閉じ、そのほとんどは道路・下水排水路となって、往時の面影をとどめる水路空間はほとんどその姿は見られなくなった。

○取水口の位置と規模

- 本用水と取水口は境 3 丁目 20 にあり玉川上水にかかっている桜橋より下流約 180m の右岸に位置し、鋼製ゲートが現在でも取り付けられてあった。(写真 1-1)

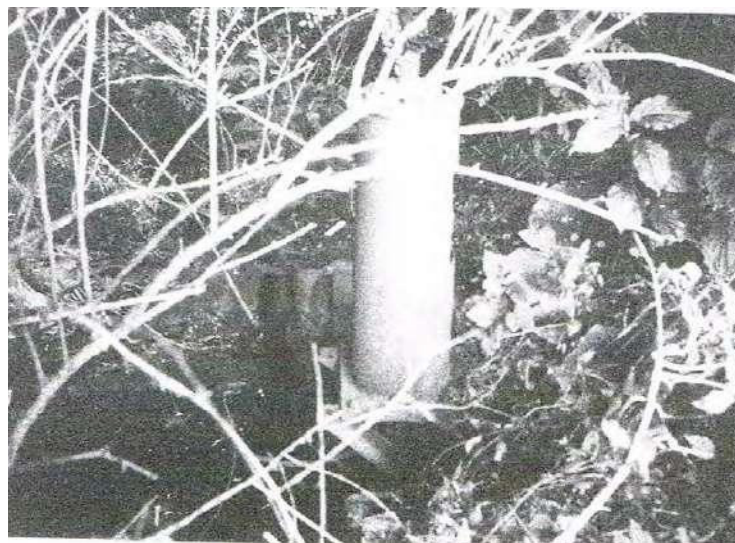


写真 1-1 玉川上水の品川用水取水口

取水門の状態。境浄水場南 1981 年頃撮影(渡部)

- 樋口の大きさは高さ 1.3×巾 2.0 m のものであるが、調査時には全閉であった。
(参考:「品川用水明詳細書」に水口 75cm 四方とある。その水路流長は約 29.5km と記されている)

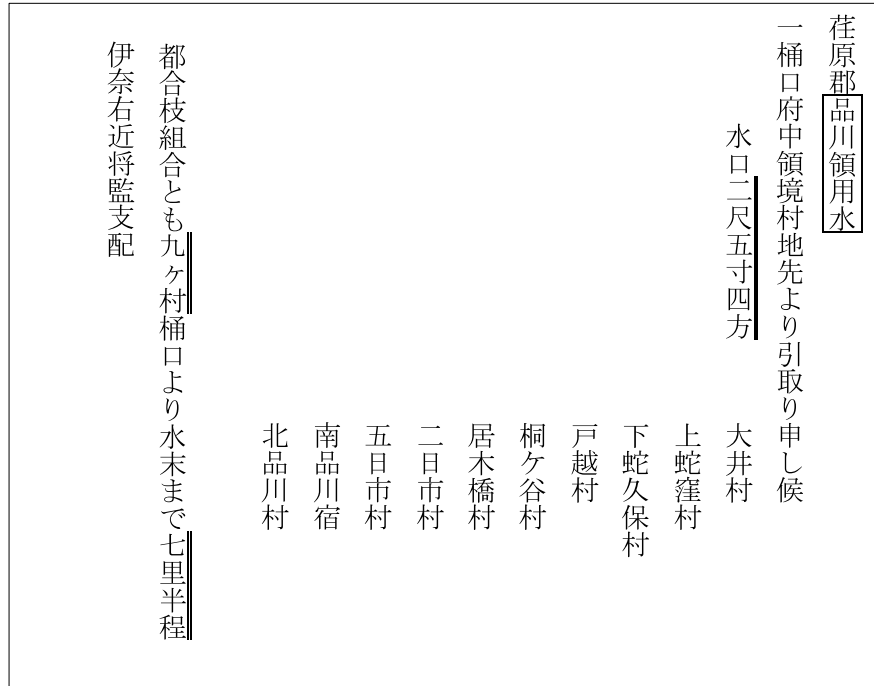


図 1-1 品川用水の規模

- 堰やそれにかかる橋はコンクリートで築かれていた。

○流量

- 昭和 38 年の東京都・水道局の調査記録によると「水衛所管理人の言では、最大流量は約 0.11 m^3/sec である」と記されている。

2) 取水口に関する古文書、出版書面等の記録

- 水路施設の外貌をイメージする上で欠かせない要素は、品川用水の取水口が設けられている玉川上水取水口の規模形状である。
- 品川用水の取水口の規模について記された資料を上げると、「上水記」・都水道局の中に「水口 2 尺 5 寸四方」(75cm 四方)とある。
- 元禄 4 年(1691)の第二回拡張記録により、境村(現在の武蔵野市境町)の取水口は内方 2 尺 5 寸(75cm 四方)、長さ(暗渠部) 5 間に拡張された。
「世田谷の河川と水路」・区教育委員会、63pp 参照
- 寛政 2 年の調査により「品川用水-625 坪(2 尺 5 寸四方)」とある。
 - ・参考文献「日本の上水」堀越正雄、新人物往来社 173pp
 - ・2 尺 5 寸四方は、75cm 平方となる。
 - ・取水口は図 1-2 の解説で触れられている。品川用水取水口の写真として古いものが、「品川用水沿革史」の中で見られたので、写真 1-2 として添付した。



写真 1-2

「品川用水沿革史」より
玉川上水を前面にした品川用水
取水口(水門)の外貌写真

(昭和 15 年頃の撮影)

- 「品川用水沿革史」の附図「品川用水絵図」(安政 5 年 4 月)に、品川用上取払樋内寸法 2 尺 5 寸四方一か所と記されている。
- 『「品川用水」ため池から用水へ』品川教育委員会・P32 には、「境村にある取水口は、はじめは「皆明け」つまり全開を許されたが、次第に半開や、3 分の 1 開けに制限された。この制限により、農業用水が不足した品川領の村々から「全開に戻してほしい」という嘆願書が代官所に出されている。
- 筆者等は、1981 年に品川用水路に取水されていない状況の取水口の調査を行った。取水口は土砂で埋められてはいたが、取水施設の形状の一部を記録することができた。その調査記録の主要図を添付した。(図 1-2、図 1-3)

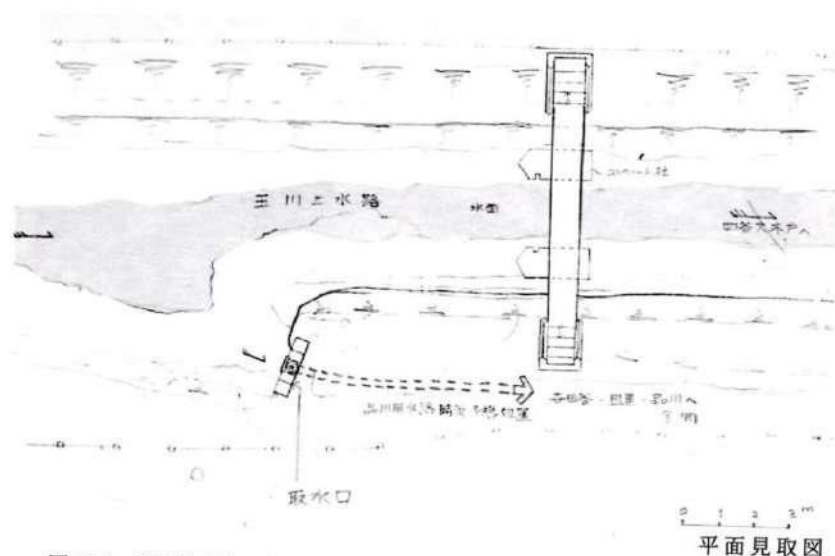


図 1-2 品川分水路取水口付近見取図(渡部記)

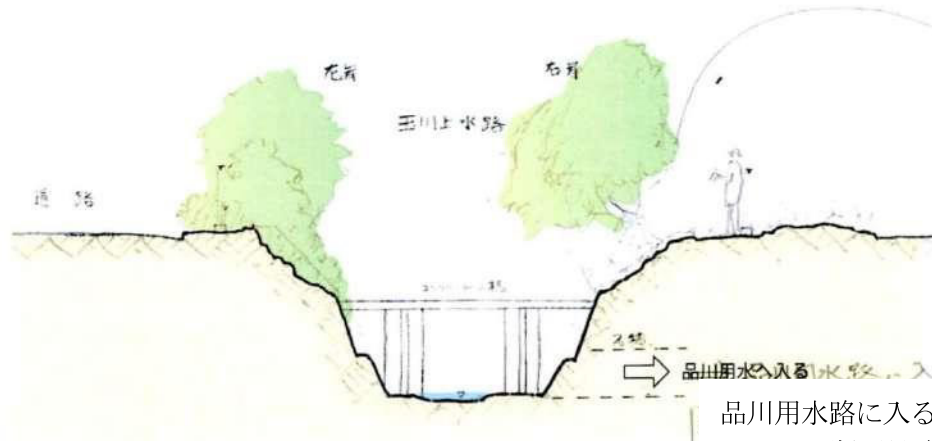


図 1-3 品川用水路断面見取図(上流から下流へ)

断面見取図 S=1:100(約)

3) 品川用水の歴史に関する文書

- 品川用水の概要について書面に記す前に、品川用水が流通していた三鷹市、世田谷区、目黒区、品川区がそれぞれ品川用水の歴史、時代的変遷、用水の果たした役割等について明記した文書がある。

1. 品川用水の歴史変遷を表現した文章

- 品川用水を流通させていた市、区が品川用水の歴史的変遷等について文章で表現している一部を取り出して次に記す。
 - a) 三鷹市 —— 「三鷹市史」 (三鷹市) 293pp ~ 297pp
 - b) 世田谷区 —— 「世田谷の河川と水路」 区、教育委員会 21pp、86, 87pp
 - c) 世田谷区 —— 「世田谷区史」
 - e) 品川区 —— 「品川用水」「溜池から用水へ」

2. 水路位置の確認に用いた資料(世田谷区)

- ②マップは昭和 53 年、国土地理院発行の「地形図」(s=1/25,000) 上に、各種の地図や資料を参考にし、判読して品川用水路の位置を表記した。
- 参考にした各種の地図は「資料編」に示した。
- 開削して 300 年を経由した品川用水は、周辺の土地利用の変化や大規模交通路の整備などの対応によって用水路位置の変更がなされている。
- これらの状況を考慮して、昭和 15 年版「帝都地形図：(s=1/3,000)世田谷編 10 葉)をよりどころとして表記したところもある
- なお、「帝都地形図」に表記されている位置の確認をしたところ、現況と相違しているところは、昭和 63 年版「世田谷区公共溝渠現況図」で図示されている位置を②マップに記入している。
- 品川区内の水路位置の確認については、4 章に記している。
- 本章の大半は、事前調査時に得た資料、情報を解読してまとめたものである。
- 品川用水の通水路は、世田谷区中央部の分水嶺をたどって流下しているため、特性を知る上で欠かせない資料であると考えた。

2節 「品川用水絵図」から水路形状を読み取る

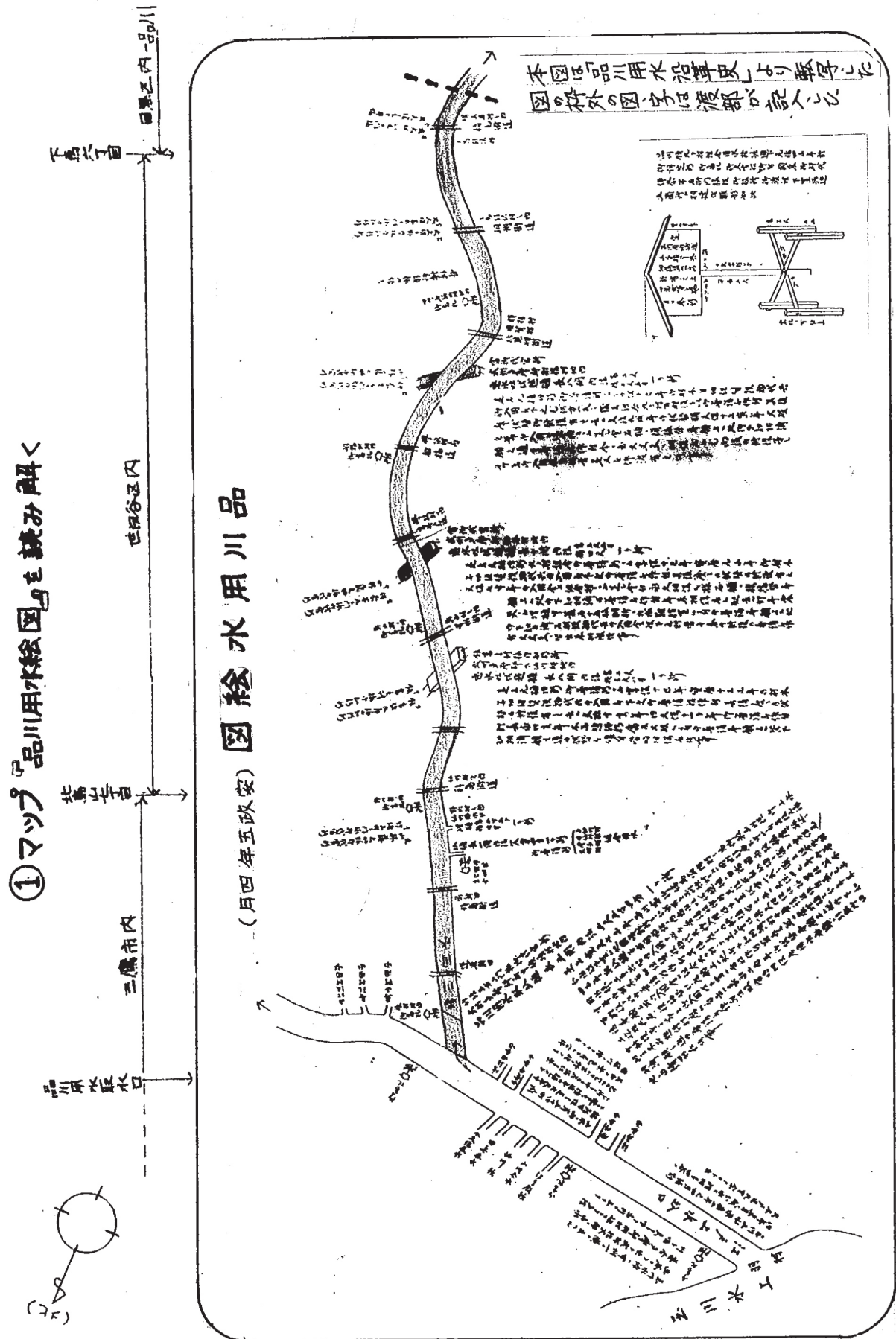


図 2-1 品川用水絵図(一)

- 品川用水はどんな歴史をたどって私たちの前に存在するのか、この問いかけに向き合うために、図 2-1 の「品川用水絵図」を読み解くことから始めたい。
- 図 2-1 は、安政 5 年 4 月(1854)に記されたものである。品川用水全流域を絵図として表現したものとしては最も古いものとされる。
- 品川用水は、玉川上水から引水があって成立している。この品川用水の位置(一部)を公図として表記されているものの中で古いものとして、「江戸の水道図」(正徳末頃 1715 ～ 1718)が存在する。(図 2-2)

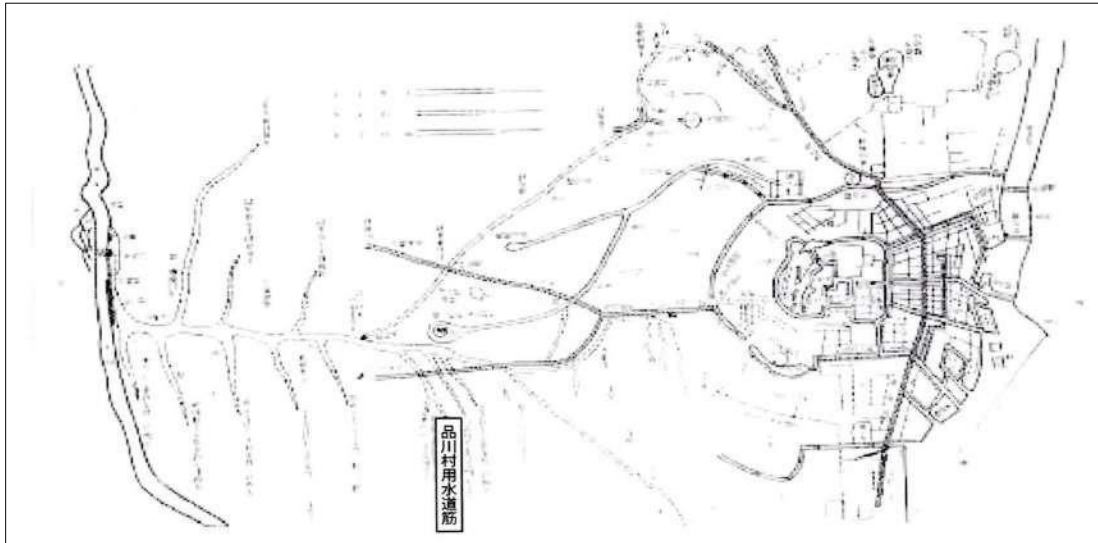


図 2-2 江戸時代の水道図 正徳末頃(1715-1718)の図

- この図の中に『品川村用水道筋』と表記されている。これは品川用水取水口が存在することを示しており、品川用水の歴史を知る上で不可欠な情報を発している文証といえよう。
- 図 2-1 は『品川用水沿革史』の付図として存在している。筆者はこれを入手し、玉川上水の取水口（武蔵野市）から世田谷区、目黒区、品川区内の全区間をコピーし、一部加筆した。（赤色と流水方向、御高札の点線を加筆）
- この「絵図」と図面周辺に記された説明書を読みこんでいくと往時の用水管理の様相が浮上してくる。その主な内容を次に記す。

1) 伏越樋の事

- まず注目しておきたいのは、品川用水路の下に 3 ヶ所・伏越樋が設けられ、その規模が記されていることである。 ※伏越樋とは土中で水を導くための管状施設
- この中で最も大きな伏越樋が設けられていたのは、現在の粕谷村地蔵尊あたりで、水無川(烏山川の支流)と立体交差する地点である。
- 品川用水路が水無川の上部を通る構造を計画したことで、水無川の流水を通すため伏越樋を採用したものと考えられる。
- この工事を行った時代は、コンクリートや鉄材がない時代で、使用する素材は、石材、木材、土材などの自然素材を加工した伏越樋を築造したと想像する。

- 区内の流下する品川用水路のなかで、水路の築堤、伏越樋の構法、洪水の対策、漏水などの水管理問題に 300 年もの間最も苦労したのは、粕谷村地藏尊の地点ではなかったかと想像する。
- 品川区内で注目したのは、品川用水の分水で「大井村用水」が立会川を越える箇所に「用水掛渡樋」がえがかれていることである。

2) 「御高札の図」が伝えるもの

- 板面に書かれている内容は「水路を壊したり、水を盗んだりする事を禁じる」とある。
- 世田谷区内には、3 ヶ所設けられていた時代があった。その位置で主要な街道筋が品川用水を渡る地点に立てられていた。

3) 「品川用水取込樋」を通る水

- 品川用水最上流部に位置し、玉川上水の水を引き込む水門と接合されており、導水管とも言われている。※水門とは、当時のものは人力で入水量を調節する装置である。絵図には、その規模は「長 5 間、内法 2 尺 5 寸 4 方、1 ヶ所」と記されている。品川用水の水は、この中をくぐって入水する。
- 玉川上水を通る水が渇水期になると減少してくる。すると品川用水の水門は徐々に閉められ入水量は減少されていく。
- 品川用水の水で農業や生活を営む人々にとっては苦難の日々が始まる。
- 玉川上水路から品川用水に取水する形状の予想図を図 2-3 に示した。上下する堰板は木製でつくられている。

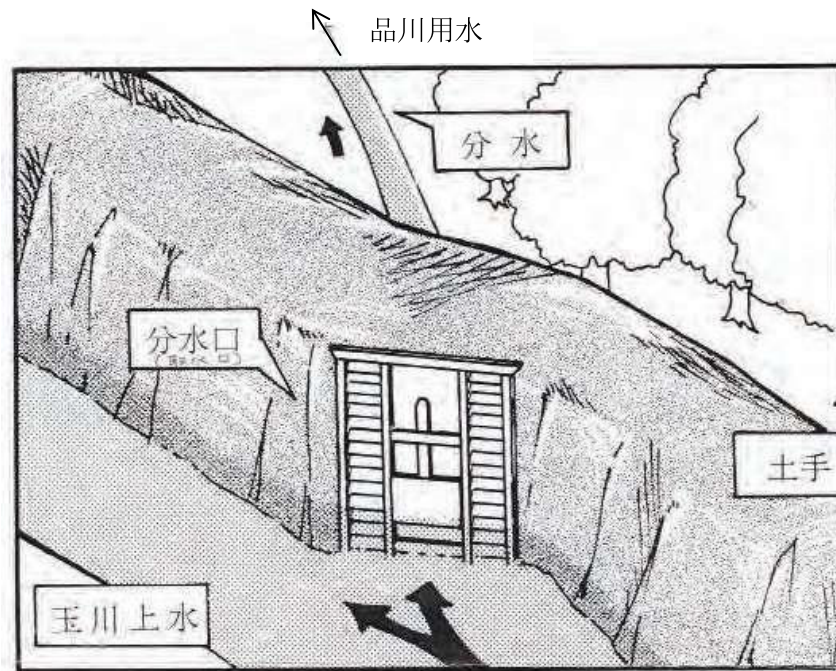


図 2-3 取水口の形状予想図

玉川上水から取水する「取水口」の様子を想像して描いたもの。取水口の構造からイメージして品川用水開削期に近いものとみてよいであろう。

3 節 水路位置のあらまし

- 品川用水は、旧多摩郡境村水吐(現武蔵野市境 3 丁目一境浄水場南西端近く)で玉川上水から分水され、上連雀・下連雀を貫流し、旧新川村新川宿(現三鷹市新川 3 丁目と 6 丁目の境)二筋に分かれ、西南流する水路は入間川養水、東流するのが品川用水である。
品川用水のできるまでは、この分岐点からやや東南直線距離おおよそ 700m のところにある勝淵神社前の丸池に水路が通じ、仙川用水となっていたのであるが、品川用水ができるとこの養水路は廃止された。
- 新川宿の分岐点から東流した品川用水は、旧北野村水無(現三鷹市北野の東北端)で世田谷領の旧烏山村に入り、(この辺で水無川に品川用水漏れ水が影響していたであろうと思われる)同村の北西から南東流し、旧粕谷村・旧廻沢村(現千歳台)・旧船橋村・旧世田ヶ谷村西部(現桜丘)・を流下し、旧用賀村と旧弦巻村の境界を通り、旧世田谷新町村(現桜新町と新町)を西から東に方向を変えて、旧上馬引沢村の南部(現駒沢 2・3 丁目及び上馬 4 丁目)を西から弓弧状に貫流し、国道 246 号と環状 7 号道の交差点で南東に折れて旧野沢村(現環状 7 号道路のほぼ中央線)に入り、旧下馬引沢村の南部(現下馬 6 丁目)で世田谷を貫流する。
- そして、現在の目黒区(旧碑文谷村)に入り、次いで品川区に入るもので、品川領の 11 ヶ村(北品川宿・二日五日市村・大井村・上蛇窪村・下蛇窪村・戸越村・桐ヶ谷村・居木橋村・下大崎村・新井宿村)の水田灌漑利用を主目的とするものであって、その全長はおおよそ 7 里(28km)の長さに及ぶものであった。(図 3-1 参照)



図 3-1 品川用水流路位置図

- 品川用水の全流路を一望してわかるのは、世田谷区、目黒区間から品川区に入るまで一路(一筋)、分水をしないで流下している。
品川用水の最下流部にあたるのは、「朝日地蔵の辻」と呼ばれているところである。
- ここから3方向に分水されて、当時の村落に通水される水路位置となっている。
本論では、品川用水路の位置としての特長は、世田谷区・目黒区内は、玉川上水から引入れた水を通水する機能が求められてきた。品川区に入った水は、可能なかぎり利水効果を高めた空間的構造を形成していることに注目したい。
- 時代が江戸、明治、大正、昭和へと変遷する中で、品川領内の水田形状も合理化した土地利用が求められると共に通水網の方式も変化して来たことがわかってきた。

4 節 品川用水位置図について

1) 品川用水の流路のあらまし

- 品川用水は、昭和 25 年から昭和 27 年にかけて主に塵芥で埋立てられ、寛文 3 年(1663)以降 289 年の歴史を閉じ、そのほとんどは道路となって、往時の流水空間をとどめるものは姿を消している。
- しかしながら世田谷を流れる仙川・水無川・烏山川・呑川・蛇崩川・谷戸川・谷沢川など水環境に大きな影響を与えていたものとして、これらの河川を語る上で欠くことのできない存在である。
- 品川用水は、旧多摩郡境村水吐(現武蔵野市境 3 丁目一境浄水場南西端近く)で玉川上水から分水され、上連雀・下連雀を貫流し、旧新川村新川宿(現三鷹市新川 3 丁目と 6 丁目の境)二筋に分かれ、西南流する水路は入間川養水、東流するのが品川用水である。品川用水のできるまでは、この分岐点からやや東南直線距離およそ 700m のところにある勝淵神社前の丸池に水路が通じ、仙川養水となっていたのであるが、品川用水ができると、この養水路は廃止された。
- 新川宿の分岐点から東流した品川用水は、旧北野村水無(現三鷹市北野の東北端)で世田谷領の旧烏山村に入り、(この辺で水無川に品川用水漏れ水が影響していたであろうと思われる)同村の北西から南東流し、旧粕谷村・旧廻沢村(現千歳台)・旧船橋村・旧世田ヶ谷村西部(現桜丘)・を流下し、旧用賀村と旧弦巻村の境界を通り、旧世田谷新町村(現桜新町と新町)を西から東に方向を変えて、旧上馬引沢村の南部(現駒沢 2・3 丁目及び上馬 4 丁目)を西から弓弧状に貫流し、国道 246 号と環状 7 号道の交差点で南東に折れて旧野沢村(現環状 7 号道路のほぼ中央線)に入り、旧下馬引沢村の南部(現下馬 6 丁目)で世田谷を貫流する。

- そして、現在の目黒区(旧碑文谷村)に入り、次いで品川区に入るもので、品川領の 11 ヶ村(北品川宿・二日五日市村・大井村・上蛇窪村・下蛇窪村・戸越村・桐ヶ谷村・居木橋村・下大崎村・新井宿村)の水田灌漑利用を主目的とするものであって、その全長はおよそ 7 里(28km)の長さに及ぶものであった。(図 4-1)

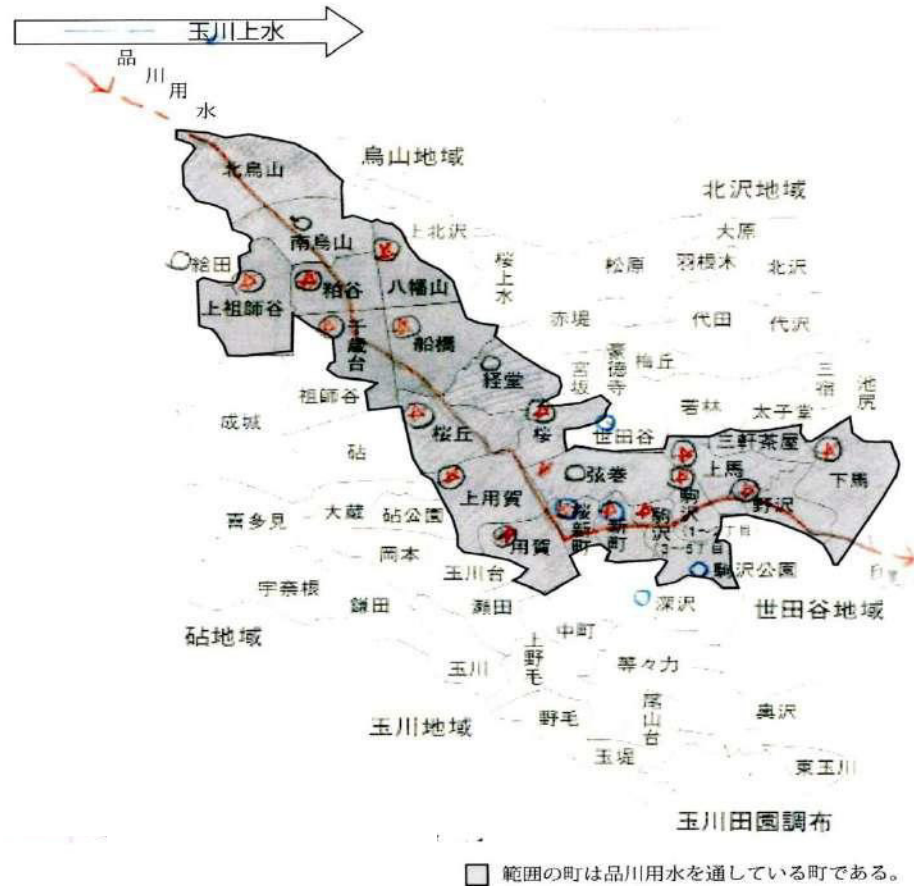


図 4-1 品川用水が通る町名一覧

2) 品川用水の区内における特長

- 品川用水の世田谷区における特徴は、多摩川および呑川水系と目黒川水系とを分ける分水嶺を選定し開削されたもので、両水系に属する中小河川の水源、分水、浸透水になるなど環境面で影響を長年にわたり与えていたことである。(図 4-2) (図 4-3)

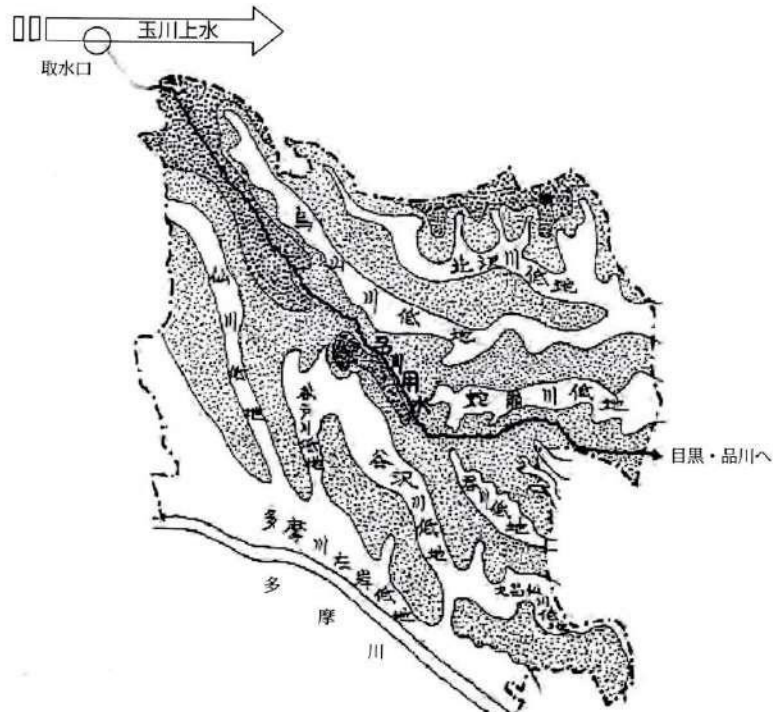


図 4-2 世田谷の分水嶺を通る品川用水の位置図

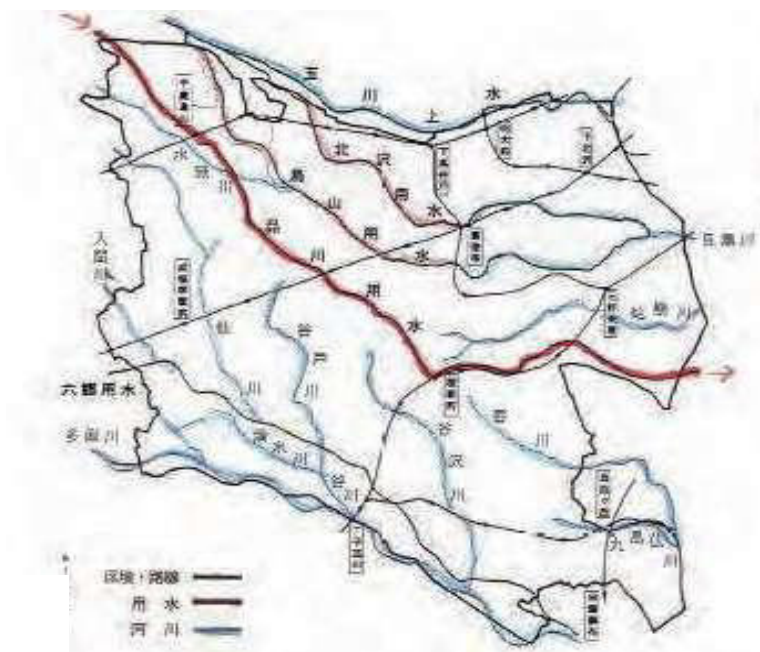


図 4-3 世田谷区の河川及び用水路の位置図

- 「品川用水」は世田谷区の分水嶺を流下しているため、水路沿いを歩いていくと、眺望が断続的に広がりを見せ、水路両サイドに交叉する街路の多くが低くなっているのを見ることができる。この眺望の特長は、品川用水ありし頃の「面影」を体感するための基本的な要素といえよう。

3) 品川用水の位置確認に用いた資料

- 図 4-4 は昭和 53 年、国土地理院発行の「地形図」(s=1/25,000)上に、各種の地図や資料を参考にし、判読して品川用水路の位置を表記した。

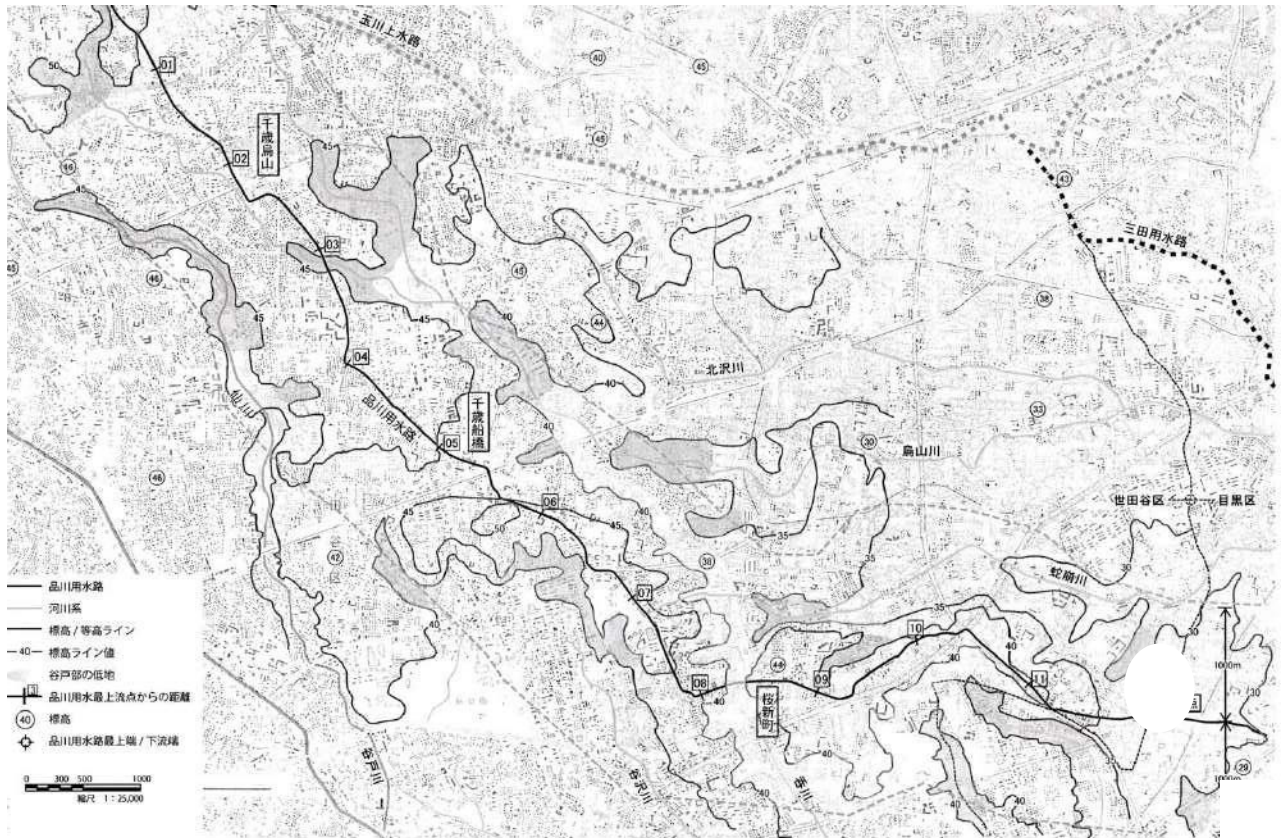


図 4-4 品川用水位置図(世田谷区内)

- 参考にした各種の地図は「資料編」に示した。
- 開削して 300 年を経由した品川用水は、周辺の土地利用の変化や大規模交通路の整備などの対応によって用水路位置の変更がなされている。
- これらの状況を考慮して、昭和 15 年版「帝都地形図：(s=1/3,000)、世田谷編 10 葉)」をよりどころとして表記したところもある
- なお、「帝都地形図」に表記されている位置の確認をしたところ、現況と相違しているところは、昭和 63 年版「世田谷区公共溝渠現況図」で図示されている位置を図 4-4 に記入している。

4) 品川用水の最上流、最下流の位置

● 最上流点

「世田谷の河川と水路」、区教育委員会、59, 60 頁の参考文献にある 29, 30 図と図 5-1, 5-2 を照合し図 4-4 にプロットし最上流点（北島山 7 丁目）と仮定した。

● 最下流点

下馬 6 丁目 26 の東面で、世田谷区と目黒区の間を通る境界線と品川用水が交叉するところを最下流点と仮定した。

5) 粕谷村を流通する品川用水路の形状

寛文 2 年（1662 年）に熊本藩主細川越中守綱利の弟若狭守利重が品川領戸越、蛇窪両村の入会地に抱屋敷 45000 坪を拝領すると、その翌年から二年掛かりで玉川上水の分水を使って、全長凡そ 7 里の戸越上水（後の品川用紙）開削を始めた。寛文 6 年には細川家はこの上水を不用として廃止したが、後にこの用水は田畑用水として認められ、元禄 4 年（1691 年）にはこの品川用水の拡張工事も行われて、この周辺農村にとって大事な灌漑の役割を果たすことになる。この水路は粕谷村の北から南東へ貫いていた。

● 「世田谷区の品川用水最上流部（現在の北島山）のとりきめ」についての資料を参考にする。

（図 4-5, 4-6）

(4) 島山・粕谷・廻り沢・船橋の 4 ヶ村の間では、

- 1 下仙川村畑之堀より粕谷村迄は島山村の人足で掘り、
- 2 島山村より船橋村迄幅 9 尺、間数 2,780 間、此反別 1 町 3 反 9 畝歩の所は、町人（請負人）と相対で、掘手間 2,000 人を以て掘り、
- 3 其上地代年貢はとらず、その代償として 4 ヶ村が水を必要とするときは、島山地内から引水することを認める。



図 4-5



図 4-6

- しかし品川用水が烏山川の分流の水無川と交差する周辺では、地面より高いところを立体交差していたので、人々は長い間大水が出るたびに水害に悩まされてきた。
昔から粕谷、船橋では何回も修復や補修が行われ、「品川用水御普請所 天保7年(1836年)」の石碑も見つかっています。(写真4-1 現在は世田谷区郷土資料館に付置されている。)



写真 4-1

現存する石碑、碑文に『品川用水御普請所 天保7年(1836年)』と刻まれている。
石碑は現在、世田谷郷土資料館の前庭に立っている

- また品川用水の東側には烏山川も流れていて、これらの周辺には田んぼが広がっていた。この烏山川は三鷹、牟礼方面の湧水が集まり、低地を流れて自然の川になったと考えられるが、万治2年(1659年)に烏山他8ヶ村の請願で玉川上水からの分水が許され、川幅の拡張や護岸工事が行われて水量豊かな烏山用水となった。
- 昭和2年には村の南を小田急電車が通るようになり、さらに、昭和11年10月には千歳村、砧村が東京市に編入されて世田谷区に属し、大字廻沢はここで廻沢町と変わった。品川用水は長い間その流域の農村地帯に水を供給してきたが、昭和7年には品川用水組合も解散してしまい、昭和25年～27年には埋立て千歳通りに変わる。

5 節 品川用水路周辺部の水環境の影響

1) 水環境への影響

1. 品川用水は、世田谷区内の多摩川水系と目黒川の分水嶺地形を選定し、通水されている関係から、品川用水に近接している河川環境に大きな影響を長年にわたり与え続けてきた。(図 5-1)
2. 図を見ると、その要因を地理的に外観することができる。
3. 図 5-2 の作成にあたり参考にしたのは、「世田谷の河川と水路」・世田谷教育委員会であり、その大半を転写している。等高線、谷戸平地、源頭文字源部は当研究会が記入した。
- 筆者等が図 5-2 に加筆したのは、凡例を明記したことと、切土、盛土の位置(筆者が主要なところについて推定した)を表示した。
- 品川用水路添いの切土、盛土の記号も図 6-1 で述べている方法で判断して記入した。
- 盛土の区間を見ていくと、漏水、盗水、分水の多くが近接していることに注目したからである。
4. 図 5-1 は玉川上水から取水した品川用水(赤線)の両岸に、河川とその侵食谷が近接している位置状況が読み取れる。

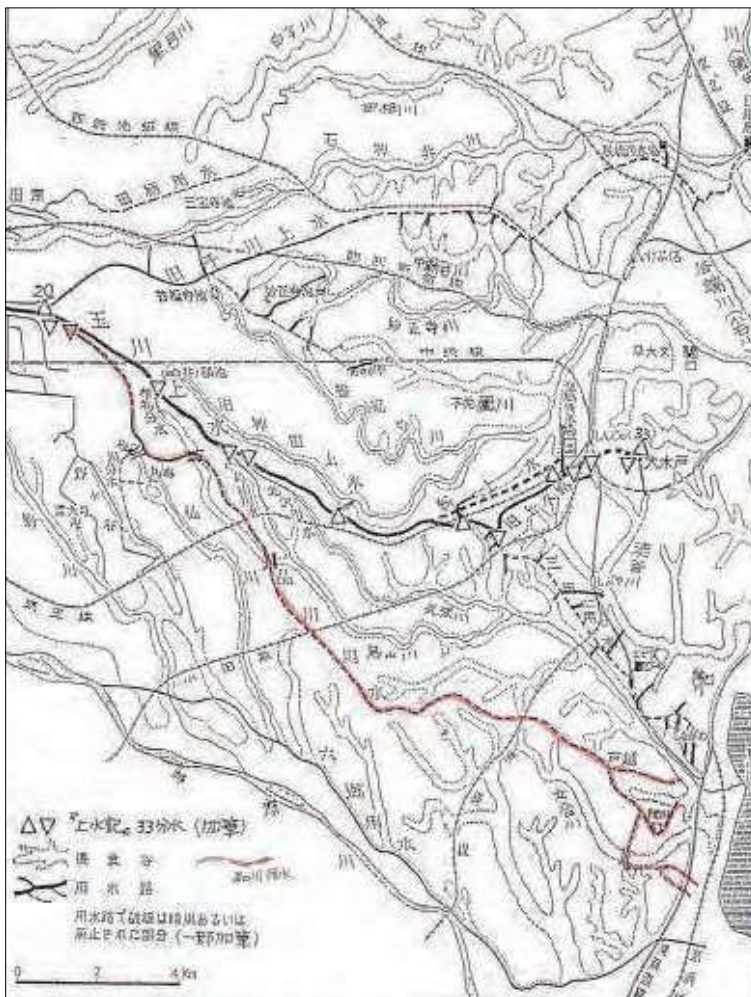


図 5-1 浸食谷と玉川上水の分水

原図出展：竹内常幸

「玉川上水と武蔵野台地」1962 年
(羽村町史史料集 8

「玉川上水論集工」1985 に再掲)

- 本図に示した盗水、湧水の位置の多くが、この河川源頭部の位置と一致しているところが多く見られる。
- これは、品川用水路を流下する水が、何らかの形で各河川上流部に流入し、湧水環境を長い年月の間に形成したところが、多くあると考えられる。

2) 漏水、湧水環境を形成した要因について

品川用水が作り出した水辺空間の面影を見出しやすくするには、この図に示している要因を認識しておく必要があるだろう。

注目される要因を次に示す。

1. 品川用水には、世田谷区内に源頭水源部を持つ河川の大半が極めて近接した位置に分布している。
(図 5-1)
2. 品川用水と図 5-2 に示されている河川源頭部はその多くが近距離で、自然流下方式によって河川最上部へ通水できる地形的条件が備わっているところが多く見られる。
3. 用水路底部の勾配が全流水区間でゆるやかである。これは、水路内の水が滞水する時間が長くなることを意味し、漏水する要因になっていた。
4. 築堤水路の構造(土質、路床及び護岸の素材、工法)の資料が入手できていないので、漏水問題の解明をしたいと思っている。

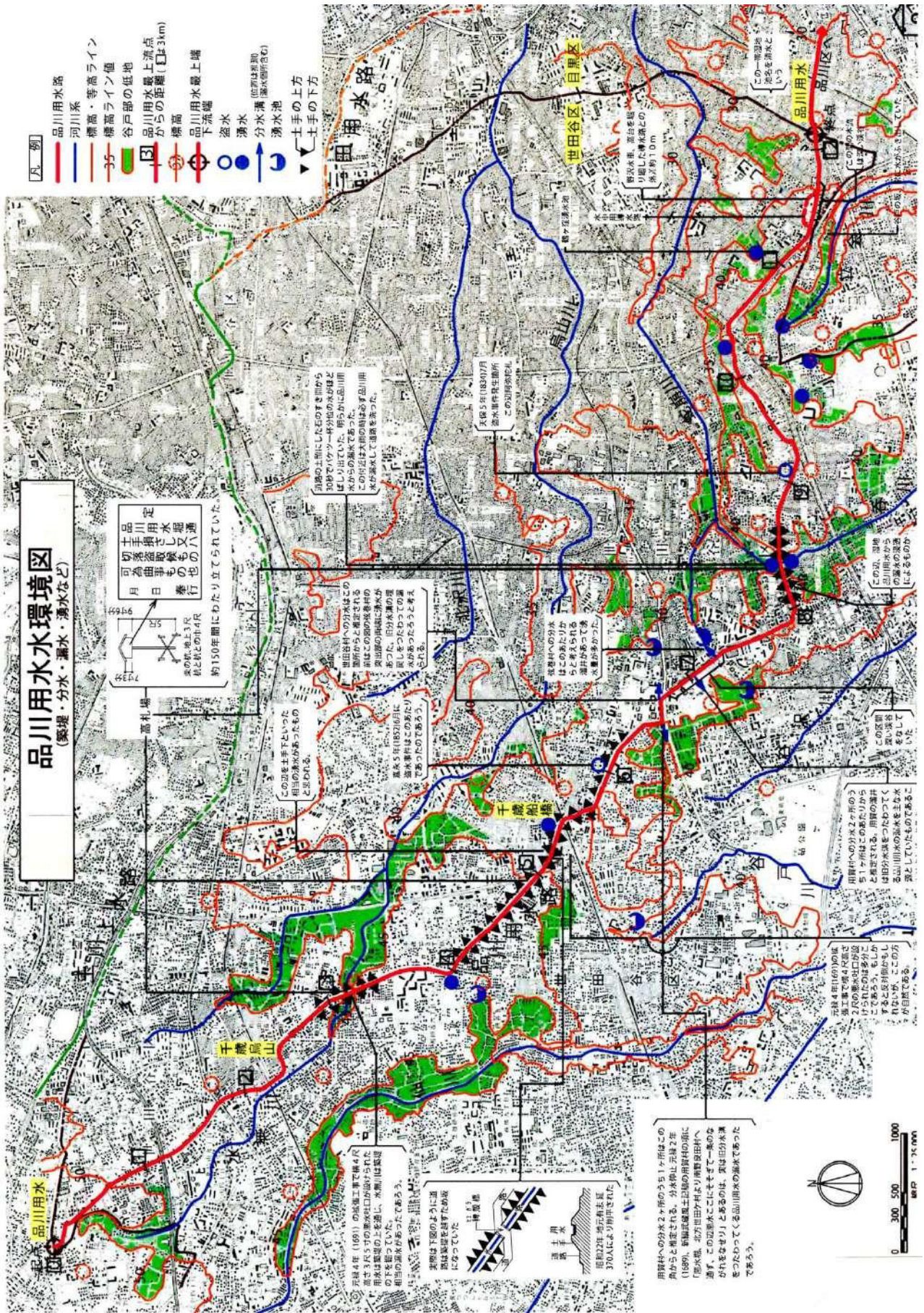


图 5-2 品川用水水環境図

3) 品川用水の漏水、盗水の対応

1. 盛土型の水路は図 5-2 に示しているように、当時の地面より盛土で築堤し、そこに水路断面を確保して通水しているため、漏水の対応には漏水防止のための材料、工法、維持管理などの面で苦心してきたと考えられる。
2. この盛土水路が世田谷区内で全区間合わせると約 3 割近くになると推測した。(図 5-2)
3. 盛土水路から、意図的に用水の水を引き込む行為を盗水(場所によっては漏水、分水として扱われていた ところもあった)と言われていた。図 5-2 の中には手書きの文字で、盗水、漏水、分水の状況が示されている。手書きの文を読み込んでいくと、当時の水事情や水にまつわる面影が見え隠れしれくると思われる。
4. 苦心して通された品川用水、その水を少しでも多く引き込み、農業用、生活用、親水用、水車用など多面的利用しようとする世田谷住民の気持ちが伝わってくる。
5. 品川用水は、品川への通水が主目的であったが、その水(玉川上水の水)を引き込むためには、世田谷を通さざるを得なかった。

品川用水創設後の水管理業務は厳しく対応したが、江戸後期、明治、大正時代に入り、流域の人口が増加するにつれて、農業用、生活用等の水需要が増える時流の中で世田谷区域では本図に示したような水環境を形成し、水の多大な恵みを受けてきたことを忘れてはならない。

4) 「盗水事件」に関する記録

図 5-2 には「盗水」というキーワード(凡例)を用い、過去にあった主だった盗水地点に印を表記した。盗水について触れた資料を見ると、事件としては取り上げられなかった箇所は他にも何か所かあったことが語られている。

「盗水事件」のことが表記されている文章に出会ったので、紙面にその一端を紹介する。(図 5-3)

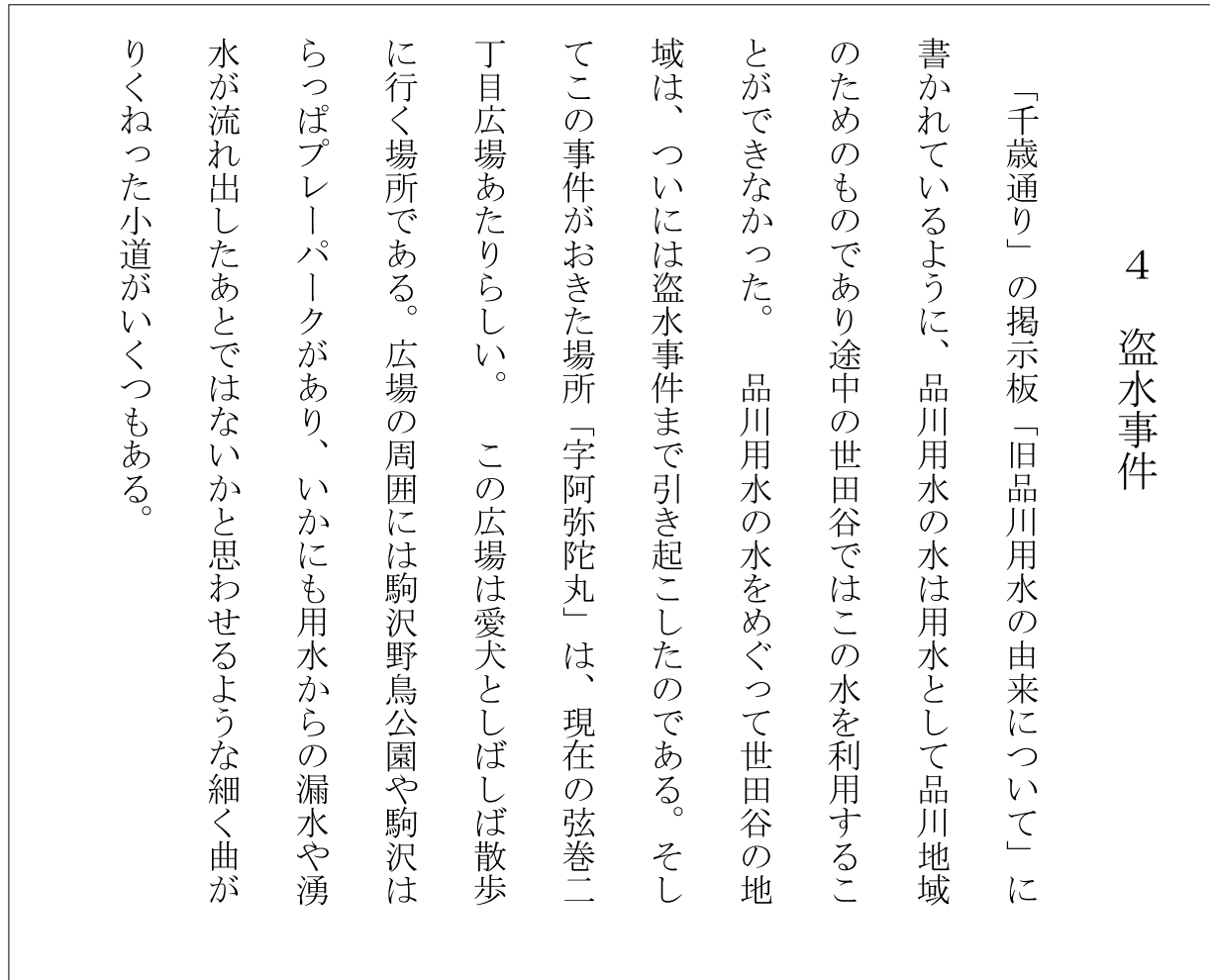


図 5-3 盗水事件

本図には「盗水」というキーワード(凡例)を用い、過去にあった主だった盗水地点に印を表記した。盗水について触れた資料を見ると、事件としては取り上げられなかった箇所は他にも何か所かあったことが語られている。

「盗水事件」のことが表記されている文章に出会ったので、紙面に紹介する。

6 節 標高から築堤の形状を探る

- 図 6-1 を媒介として、通水ありし日の品川用水の施設外観(標高変化、水路勾配、水路断面の流量など)をイメージしやすくするため、関係資料を収集し、それらの解読を試みた。その成果を図 6-1 を案内図としてとりまとめた。



図 6-1 品川用水・水路断面分類図(予想図) (大正時代と昭和初期の資料から)

- この図を見ていただきながら、水路跡地を辿り照合していくと、流水利用当時の品川用水空間の『面影』(造形的なもの)が見え隠れするものと思われる。

1) 地形図の「標高ライン」から品川用水路を想像する

1. 標高ラインの読み取り

- 図 6-1 には、河川(谷戸平地も含む)および標高ライン(茶色)を記入した。
- 標高ラインの記入方法は、昭和 53 年度版。S=1/25, 000「地形図」(東京南部)に記載されている標高値に基づき、コンターラインを推測して表現した。
- 「地形図」の標高値の記入が少ないため、周辺の地形図から推定したコンターラインもある。
- コンターラインの近くに「35」「40」「45」などと表現されているのは標高値である。
- 品川用水に近接している標高ライン値に着目すると、品川用水最上流点近く(北烏山)に 51.5 m の標高ライン値、千歳船橋駅付近では 40.5 メートル、下馬 6 丁目の最下流点付近では、30 メートルの標高ライン値が読み取れる。
- 標高ライン値の差が、これにより、最上流点と最下流点の標高差は約 20 メートルあることが推測できる。
- 水路全長が 12.1 キロメートルあることから水路勾配を概算すると約 1/620 となる。世田谷区内の品川用水の水路勾配が 620 分の 1 であることは、水路空間の面影をイメージする上で大切な情報と言えよう。

2. 谷戸空間の抽出について

- 本マップの「品川用水路」には「赤色ライン」をつけて表現している。
- その線上に数字-0, 1, 2, … 11, 12 とはいっているのは最上流点からの累計距離である。
- 地図上にコンターラインを記入する作業をしていくと品川用水に近接して谷戸空間が迫っているところが多く存在していることが明らかになった。
- そのため、その地形が谷戸空間とみなせるものには「緑色」を塗り、際立たせてみた。
- 谷戸空間にはかつては「湧水環境」が存在していた時代があったことを物語っている。その「面影」が今も残存している。

2) 取水口から世田谷区界までの流路と標高を探る

1. 品川用水の取水口(写真 6-1)から世田谷区界(北島山 7 丁目)までの流路位置について



写真 6-1 玉川上水から品川用水への取水口の現況
武蔵野市境 3 丁目(菅井康郎氏撮影)

品川用水は、現在、武蔵野市境 3 丁目で玉川上水から分水され、上下連雀を貫流し、三鷹市新川 3 丁目と 6 丁目の境で 2 筋に分派し、西南流する水路は入間川用水、東流し世田谷北島山 7 丁目先で世田谷区の分水嶺上に入るのが品川用水である。(図 6-2 参照)

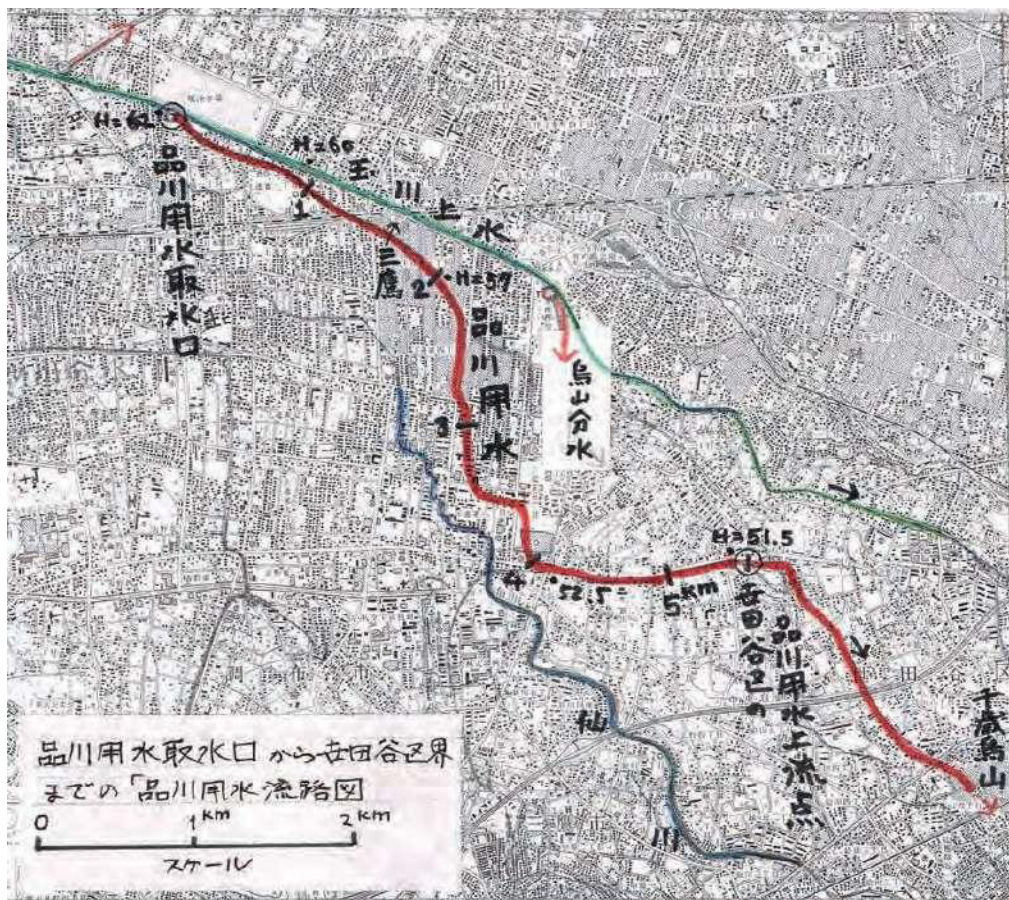


図 6-2 品川用水の取水口から世田谷最上流点までの流路位置図

2. 品川用水の流路位置は開削期から固定されてはいなかった、図 6-2 に示したものは昭和 40 年、東京都水道局が水量調査した報告書に記載されていた流路略図を参考にして図示したものである。
3. 図 6-3 は、「玉川上水流路断面図」の中に品川用水取水口の位置と標高がどのような関係にあるかを示したものである。

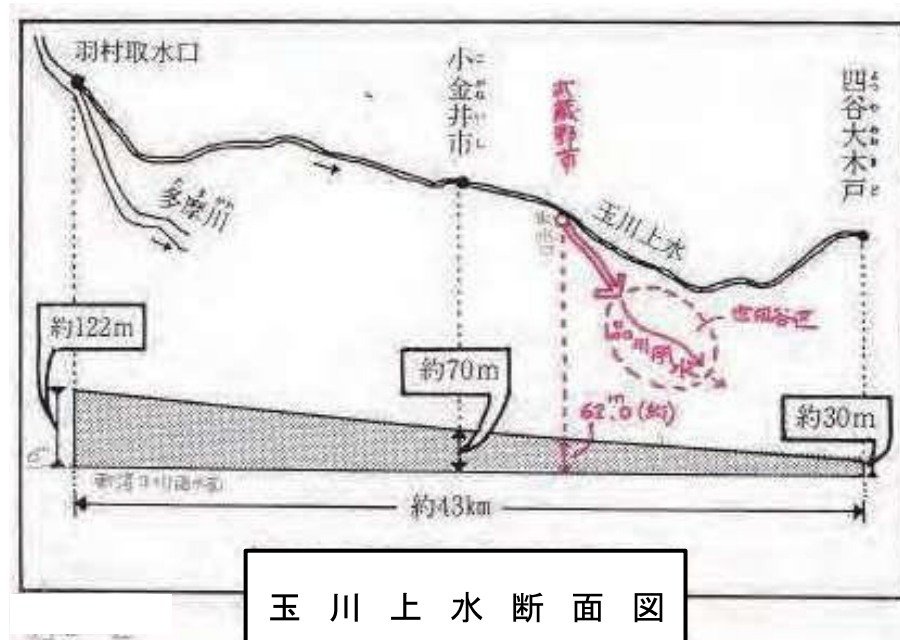


図 6-3 玉川上水と品川用水の位置及び標高の関係図 ※赤色は、筆者記入
(参考文献「玉川上水と分水」小坂克信著・新人物往来社 37pp)

4. 品川用水の取水口から世田谷区界までの標高(図 6-4)について
図 6-4 は、品川用水が流下している附近の標高を 1 km ごとに地形図等から憶測して縦断面図として記したものである。
5. 品川用水の取水口附近の標高は約 62.0m と読み取る
世田谷区界(北鳥山 7 丁目)の標高は 51.5m、流路長は約 5,500m、
推定値は図上で読みとる。標高差は 10.5m となる。
品川用水の取水口から世田谷区北鳥山 7 丁目の世田谷区内の品川用水最上流点までの水路勾配は、
約 524 分の 1 となる。
- 前述した世田谷区内における平均水路勾配は約 600 分の 1 と算出したので、北鳥山より上流の方が急流条件を備えていることが分かった。

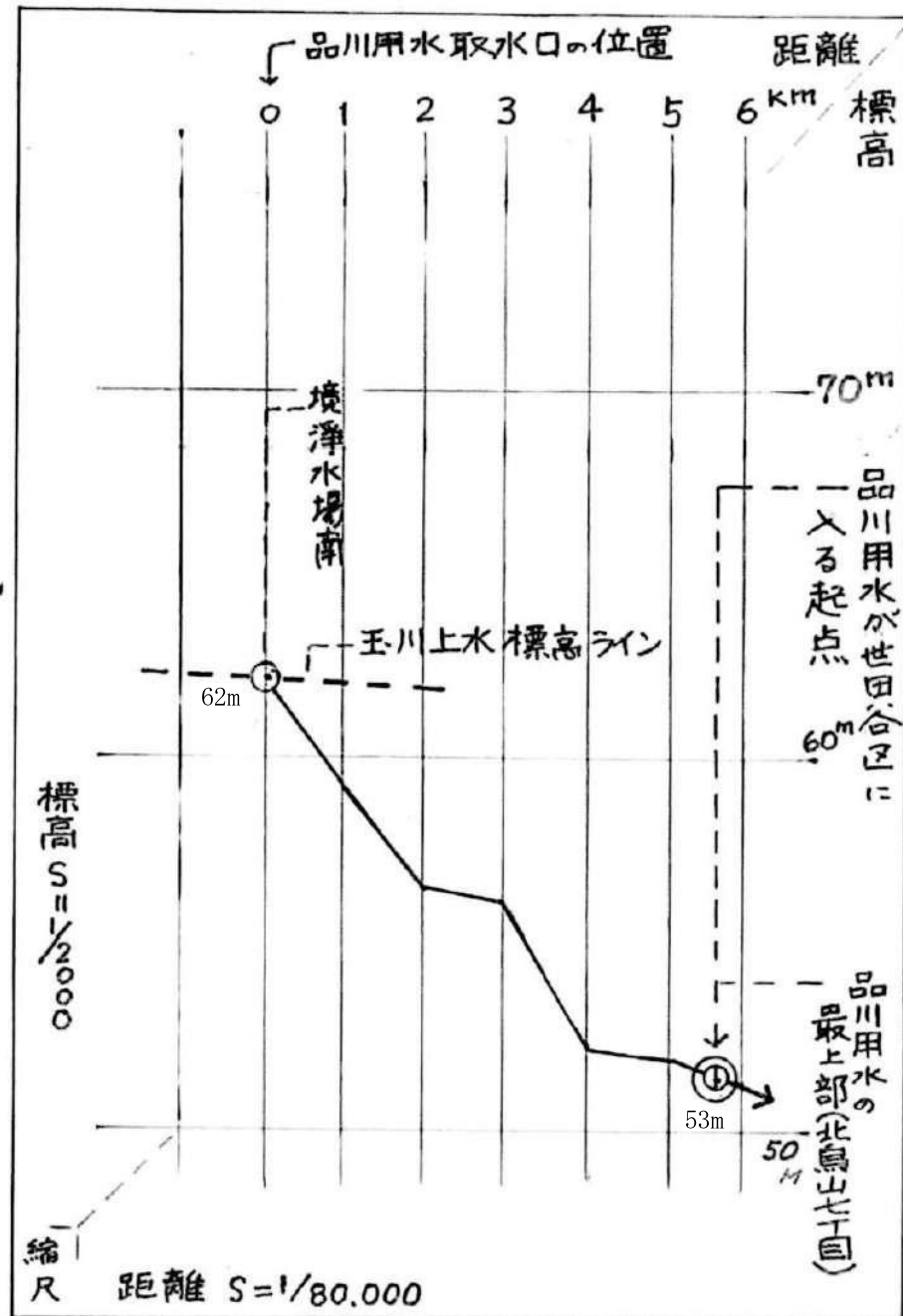


図 6-4 品川用水の玉川上水取水口から世田谷区最上流までの流路標高図

標高地のよりどころは、国土地理院発行の
($S=1/25,000$) 地図に表記してある品川用水周辺の
コンター、標示値を参考にして割り出した。

3) 世田谷区内の品川用水路の標高から築堤規を探る

1. 水路勾配に関して、筆者が求めている数値資料は、現在の所入手できていない。
そのため、古地図、および国土地理院発行の 25,000 分の 1 図等から推測した値に基づいて図 6-5 を作成した。

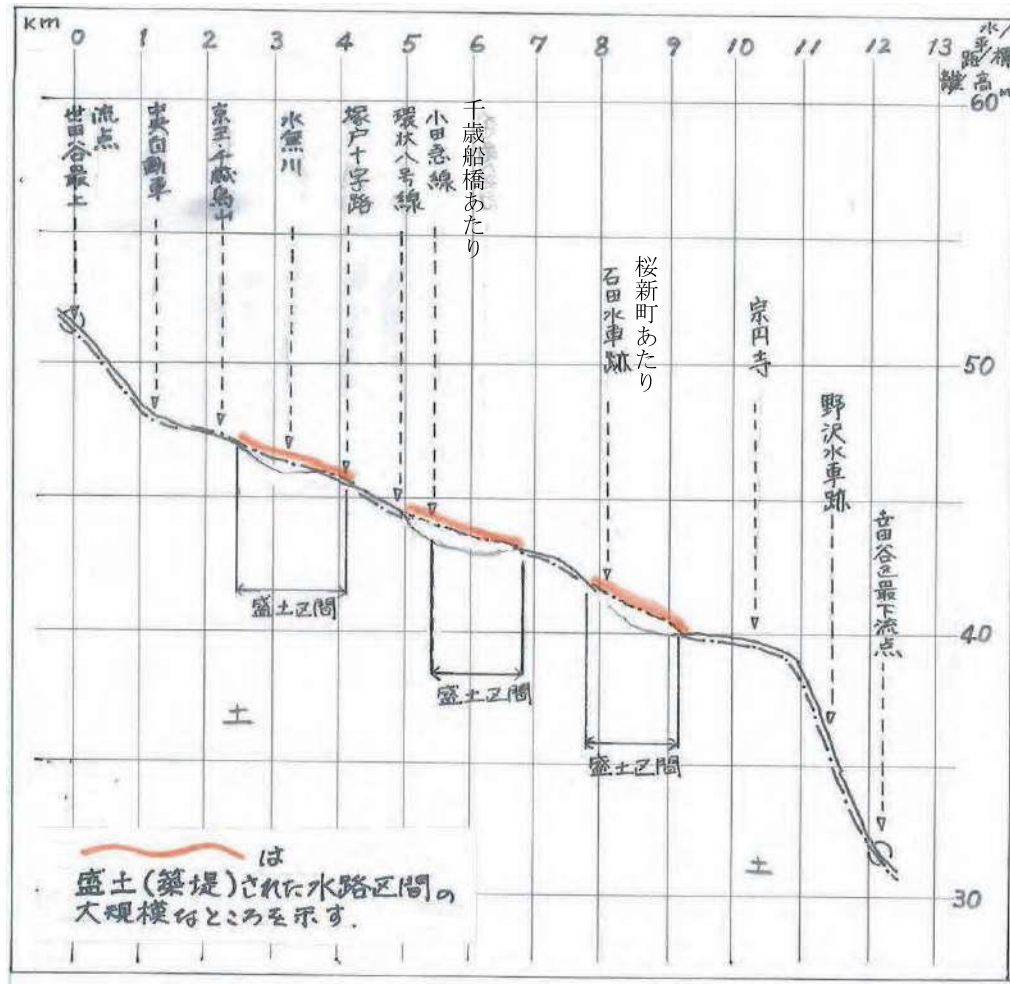


図 6-5 品川用水周辺の標高と水路底部標高の推測図

標高地のよりどころは、国土地理院発行の (S=1/25,000) 地図に表記してある品川用水周辺のコンター、標示値を参考にして割り出した。

2. 図 6-1 に品川用水路の位置を図示し、最上流部起点(北鳥山 7 丁目先)0 メートルと定め 1 km ごとに区分し、上流部から番号を付けた。この番号地点の標高値 (入手した地形図上から読み取った値) をプロットしそれらを結びつけると図 6-5 の黒の太線(これを標高ラインと呼ぶ)となる。
3. ---線は、下流に自然流下することを前提として推定した「用水路底部」である。この---線をいれることで、水路断面形状の予想や水路勾配、流速の状況、分水、漏水の環境などが浮彫にされてくると考えた。

4. 推定用水路底部ラインを表示したことで、切土水路、盛土(築堤)水路の数値を読み取った。これにより横断面形状を描くことが可能となった。
5. 「世田谷の河川と水路」教育員会 62 ページに「区内の品川用水路の凡その 3,200mの間は築堤の中に水路が掘られているもので…」とあることに注目した。(図 6-6)
その主な理由は、品川用水は分水嶺上を選定されて品川区へ向けて流下しているという立地特性を備えているにも関わらず、分水嶺上になお築堤(盛土形状)が、区内水路の 4 分の 1 を占めるのはどこに要因があるのか、確認するのを感じた。また、この状況を知ることによって品川用水の面影を発見する物理的環境の手がかりとなると考えたのである。

こうして拡張工事がなされたものの、用水路は延々 7 里 (28 km) も長く、世田谷区内では分水嶺のような高所を通していたものではあるが地形の高低によって粕谷村で水無川兩岸の低地・廻り沢村の堀通地区と野窪地区との境界から世田谷村の原地区と赤羽根地区の境界まで、世田谷新町村の西半分の 3ヶ所の通過区間合計凡そ 3,200m の間は築堤の中に水路が掘られているもので、(第32図) その間は特に漏水も多かったであろうし、

加えて数ヶ所の分水口が設けられていたので流末の品川領への引水量が減少するのは当然で、とくに旱魃となれば流末への影響は深刻なものがあつた。

図 6-6 築堤の中に掘られている「品川用水路」の断面図

6. 以上のような理由に基づき、横断面形状を推定した図 6-1 の凡例とした。凡例として 6 タイプと記号を図 6-7 に示した。今後、精度の高い標高値、水路底部標高値を使い、築堤位置、規模を規制することで品川用水の面影はより具体的な像となって我われに見せてくれるであろう。

古地図に記されている 「法」記号	水路断面形状タイプ
	A
	B
	C
	D
	E
	F

注：水路の規模により▼は変化している

図 6-7 水路断面形状のタイプリスト

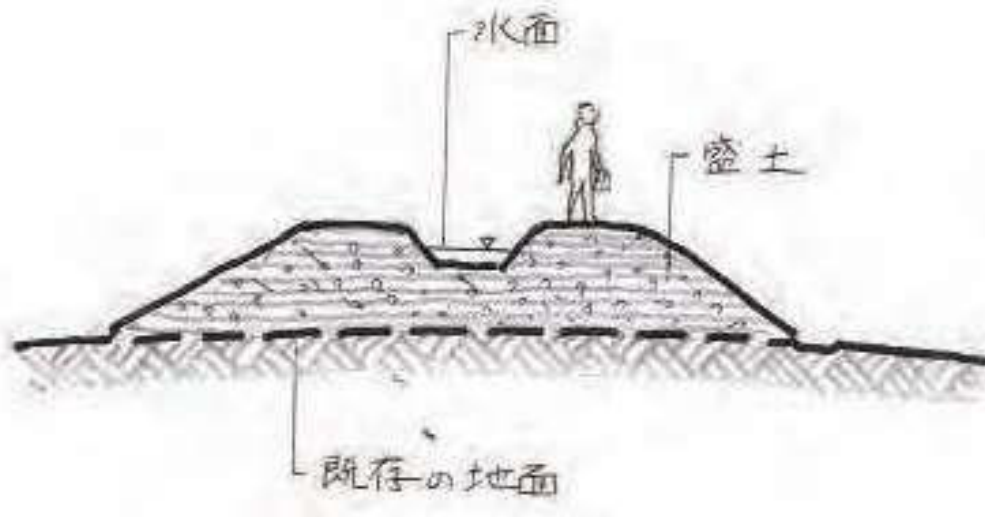


図 6-8 盛土築堤断面図(予想)

盛土の高さは、水勾配を得るため、地面から低いもの、高いものがあつた。

7. 図 6-7. 6-8 を参考にして、品川用水と水無川が交差している地点(粕谷地蔵尊前)の築堤され品川用水が流下する姿を想像図として描いてみた。
- ・基礎データとしたのは、図 6-1 を作図したときに参考にした資料に基づいている。
 - ・水無川上部を品川用水が流下する地点の双方の河床部の高低差は 2.0～2.5 メートルはあったと想像した。
 - ・築堤上の品川用水の断面形状は図 6-7、図 6-8 参考にして取り込み、全体的な風景は品川用水通水されていた中期ころを想像図して描いた。(図 6-9)

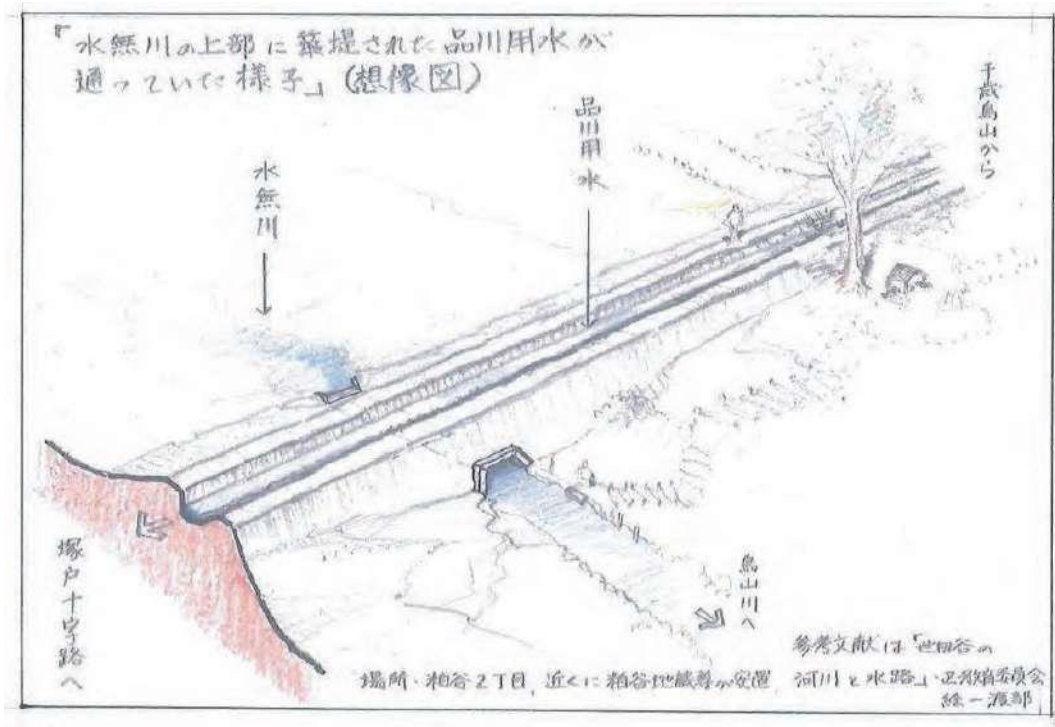


図 6-9 水無川の上に築堤された上を品川用水が通っていた様子を想像して描いた

参考文献：「世田谷の河川と水路」・区教育委員会

絵：渡部 一二

4) 品川用水路断面形状を探る

1. 作業の方法

- 品川用水が作り出した水路空間のありし日の「面影」をイメージとして浮影するには、水路の形状を把握することが不可欠である。
- そのため、水路形状に関する文書、写真、絵図などを収集する作業に数人で取り組んだ。この作業によって入手した資料は「参考資料」として添付した。
- これらの資料の紙面には具体的な寸法が表記されていないため、それぞれの紙面、写真面に筆者が周辺環境(水路近くの構造物、樹木など)から推測した寸法を読み取り記入し、それらの数値をもとにして形状を推定する情報とした。
- 入手した紙面の多くは、水路創設期の目的を果たしていた時代のものではなく、水路形状の手がかりとした資料は昭和中期ごろのものである。それ故、得られた資料から品川用水全区間の断面を推定するのは難点があると考えた。
- 次に行った作業は、古地図(昭和 14 年版)に表記(盛土水路、切土水路を▼印で示したもの)しているところを見出し、類型化を試みた。その主要な地区を図 6-1 に示した。
- この作業によって品川用水路の全区間において断面形状で盛土水路と切土水路の区分けができた。しかし、これでは断面規模(法面は浅いか、深いかなど)の寸法を推定するのはできないため次項の 2) の方法を取った。
- この作業によって明らかになったのは、世田谷区内の水路区間でおおよそトータルすると 3.0km～3.5km で盛土型の水路があり、2.0km 前後で切土型(約 1.5m 程度開削)の水路が採用されていたといえる。
- その他の水路は地表面を開削して深さ約 1.0m 程度断面をもつ水路が多く存在していたとみてよいと考えた。

2. 「水路標高図」から、水路断面形状と規模を推定する

- 古地図(昭和 15 年版)から水路周辺の標高を読み取り水路添いの断面図を作成した図をベースにして水路内の水が淀みなく流れる勾配を想定し、水路底部勾配ラインを記入したものが図 6-5 である。
- この図 6-5 をもとにして盛土、切土型の水路の深さ(D)を読み取った。
- 標高面より低い水面を保持すると予想される区間は切土水路、標高面より高い水面となっていてと予想される場所は、盛土水路として大別した。この作業によって得られた情報をもとにして類型化して図 6-7 を作成した。

3. 水路断面に関する資料とその解説から見てきたもの

- 図 6-7 の凡例で示したタイプを用水路に当てはめてみる。粕谷 4 丁目前後は盛土水路(D)に該当し、千歳船橋附近では盛土水路(D. E)に属し、盛土水路が大半を占めていることが推測される。
これらの区間は水路標高差(水路勾配)がゆるやかな区間である。盛土水路の中で流水を可能にするための工法を採用したため、苦心した築堤型の水路構造であったと予想される。
- 全水路区間で難工事であり、水管理上で苦勞してきたのは、ここにあげた築堤水路と桜ヶ丘 2.3 丁目の斜面盛土水路(F)桜新町の区域であったと思われる。
- 粕谷を流下する用水路は、水無川と立体交差せざるを得なかったため、水路創設期から昭和初期にかけて漏水、築堤の崩落、水無川氾濫による水路渠の被害などが続いてきたところで水路管理者、なかでも品川区の水路利用者の苦難が続いた。
品川区内の品川用水に水面がうつる写真を入手したので記載する。(写真 8-1)
- 資料が不足しているため、粕谷村周辺(水路渠の構造、工法、築堤の構造、漏水防止)の対応などについて現段階では解明できないが、今後この課題の解明が求められる。

7 節 品川用水路の流量、流速を探る

1) 都・水道局の報告書から

昭和40年1月、都水道局総務部の調査報告書の中に「取水口は鋼製ゲートを取り付け取水している。樋口（取水口）の大きさは高さ1.3m×巾2.0m」と記されている。

（写真6-1参照）

- この調査報告書に「水衡所管理人の言によると、最大流量は0.11 m³/sec との事である」と記されている。「この流量は農業用であるから4月～9月頃までの通水であり、他の期間は取水口は全閉される」との記述もあった。
- 昭和40年頃まで、およそ春から秋にかけて一日約9,500 m³の水が品川用水に流水されていたと考えられている。

※注目すべき点は、この流水が用水路のどの区間まで到達していたか確認していない。

2) 流速に関する情報

流速に関する数値情報は、わずかししか入手していないため、2章の6で品川用水の標高差から算出した数値を元にして玉川上水と比較する。（写真8-1、写真8-2参照）

次いで品川用水に流れがあった頃の写真から推測して面影イメージを論じることにした。

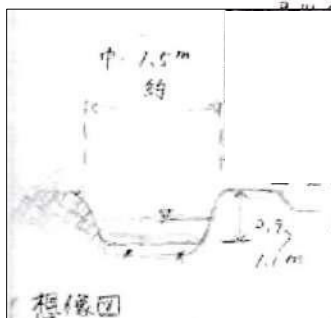


写真8-1 千歳台六丁目付近
（昭和9年ごろ撮影・久保池英雄氏）



写真 8-2 用賀三丁目付近 「品川用水沿革史」より

3) 水路勾配

- 世田谷区北部境界(北鳥山 7 丁目)ベンチマーク◎ゼロの標高は 51.5m、世田谷区東南部境界(下馬 6 丁目)ベンチマーク 12+100 の標高は 32.0m、標高差 19.5m、双方の水路長 12.1 km、水路勾配は $19.5\text{m}/12.1\text{km}$ で約 $1/620.5$ となる。
取水している玉川上水の水路勾配と比較してみる。
- 玉川上水取水口から四谷大木戸までの標高差約 93m、水路長 43.0 km、水路勾配 $93\text{m}/43.0\text{km}$ → 約 $1/467$ となる。
双方を比較すると、品川用水の方が全体として、玉川上水よりもゆるやかな水路勾配となっており、流速も緩やかな流れのところが多くあったものと予想される。

3章 品川用水の創設から昭和中期

1節 品川用水の創設

江戸時代の品川区域は、品川宿や漁師宿を除くと大半が農耕地帯であった。目黒川、立会川に囲まれた区域の多くは、武蔵野丘陵性の台地で畑地が多く天水(湧水)によって耕作していた。細々と耕作をおこなっていたため、しばしば干害に悩まされていた。このような土地柄であったから、耕地が急激に拡大した近世前半期において灌がい用水の創設が各地で切望される中で品川用水が引かれるに至った。

農民たちは、幕府への農業用水を引くための嘆願を長い間続けてきた。寛文七年(1667)になってその願い事がかない、幕府より玉川上水から用水を引く許可がおりた。工事の費用は幕府が負担し、江戸京橋の尾張屋金兵衛などが工事を請け負った。

用水の流路地には幕府の領地ばかりでなく、寺領や大名、旗本領もあって、水路用地によって潰れてしまう耕地の年貢をどうするか、大地に形成されている凸凹面の工法をいかに耐久性のあるものにするか、などの困難な交渉、検討が加えられ、寛文七年(1667)から工事が始められ寛文九年(1669)に完成した。

注目しておきたいのは、寛文二年に戸越、蛇窪村に細川越中守が屋敷を与えられ、庭園の池水として玉川上水からの分水が許され、寛文三年、四年に用水を引いたのが品川用水の起こりで、当初は戸越上水といった。

元号	西暦	品川用水関係	日本<世界>の動き	元号	西暦	品川用水関係	日本<世界>の動き
慶長6	1601		家康、東海道に宿駅制を敷く	宝暦11	1761	境の元桶の修復願い	
" 8	1603		"、江戸幕府を開く	安永1	1772	山路治郎兵衛が戸越村に薩摩の孟宗竹を栽培	田沼意次老中
慶安2	1649		慶安の御触書	" 5	1776		<米、独立宣言>
承応3	1654	玉川上水竣工		" 8	1779	この年の調査で品川用水を利用した田地は約140町(140ha)	
明暦3	1657		明暦の大火(振袖火事)	" 9	1780	下仙川村の悪水吐伏桶の伏替普請	
寛文2	1662	細川家から戸越屋敷の泉池のため野川村から細川分水を引く		天明7	1787		松平定信、寛政の改革
" 6	1666	旧中原街道際に石造庚申供養塔		寛政1	1789		<フランス革命>
" 7	1667	泉池造営工事完成し分水が不用品となり、その余水利用を品川領9村に許可(助郷・宿役負担に対する救済のため)		享和2	1802	取水口は3分開き	
" 9	1669	品川用水完成		文化1	1804		<ナポレオン皇帝>
延宝1	1673		アイヌのシャクシャインの乱	" 3	1806	取水口増設願	
" 2	1674	お猿橋庚申堂	分地制限令	" 14	1817	粕谷村の悪水吐伏桶の御普請	
天和2	1682		発徴算法(関孝和)	文政3	1820	上中仙川村と用水量争う	
貞享2	1685	元禄道標	好色一代男(井原西鶴)	天保4	1833	境の元桶を石桶に模様替え願	
" 4	1687		綱吉、生類憐みの令	" 8	1837	上馬引沢村と碑文谷村で盗水事件	大塩平八郎の乱
元禄1	1688		<ニュートン、万有引力>	" 11	1840		<英清、アヘン戦争>
" 2	1689	上流の分水口閉鎖及び品川用水拡張工事	柳沢吉保、綱吉の側用人	" 12	1841		水野忠邦、天保の改革
" 3	1690	上仙川村の分水口の取入口の寸法取決め	水戸黄門 <英、名答革命>	嘉永6	1853		ペリー、浦賀に来航
" 4	1691	用水の高札を建てて。水の供給不十分で大改修、大井の掛渡井を併削	<英、権利章典>	明治1	1868		明治維新
" 5	1692	各村の分水口の大きさの協定		" 4	1871	東京府の管轄になり、下大崎村と新井宿村が用水組合に加わる	<ドイツ帝国成立>
" 7	1694	町制が成立	奥の細道(松尾芭蕉)	" 10	1877	西大井に隧道を作る	西南戦争
" 10	1697	上仙川村が堰を作り水車使用により争う		28	1895	大井村と上蛇窪村の水争い	下関条約
" 15	1702		赤穂浪士の仇討	大正12	1923	目黒線開通、宅地化で品川用水が下水化	関東大震災
宝永4	1707		富士山噴火で宝永山できる	昭和2	1927	大井町線開通(大井町→大岡山)	
享保1	1716		吉宗、享保の改革	" 3	1928	池上線開通(五反田→大崎広小路)	
元文4	1739	地蔵の辻で分水桶が破壊		" 6	1931	用水路の現状視察	
宝暦4	1754	取水口の全閉願い	<この頃、英産業革命始まる>	" 7	1932	恵澤橋の碑建立	満州事変
				" 10	1935	滝王子地蔵の昭聖化(附清)	
				" 23	1948	三鷹市の管理(品川の管理終わる)	
				" 33	1958	品川用水の暗渠(おぼろ)化工事	

図 1-1 品川用水の歴史—日本の動向

参考文献:「第五つうしん」第 66、67 号 編集委員会

2節 品川区域の自然環境

1) 地形

品川区域の自然条件としての特徴は、低地と台地からなる地形、つまり段階状の地形をなしていることである。(図 2-1)

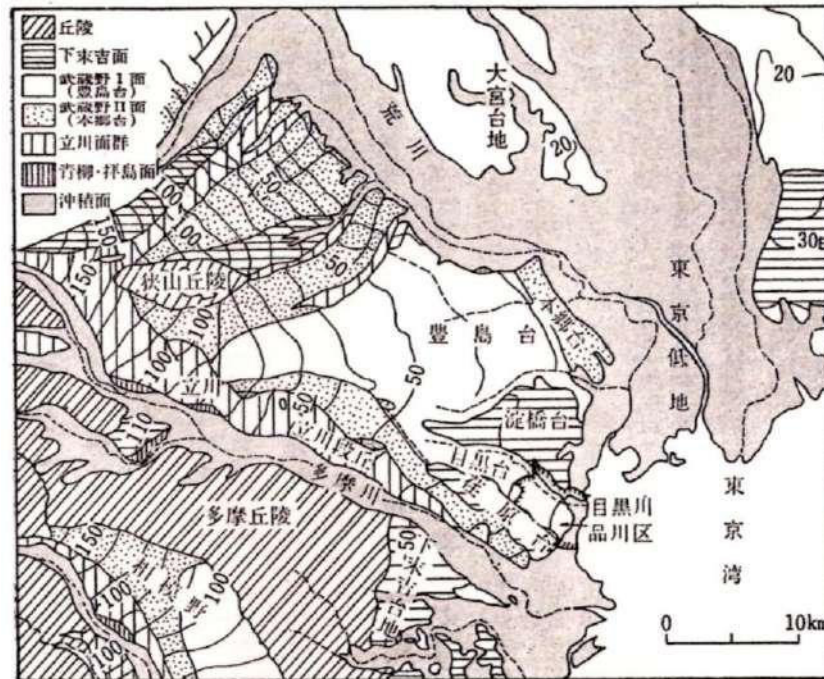


図 2-1 武蔵野付近の地形区分

貝塚(1964)の図を新しい資料で修正。

太い実線は地形の境界、細い実線の等高線(10m 間隔)は段丘面の原形を谷埋めして復元して描いてある。

低地は、東部の海岸平野と目黒川、立会川沿いにある海拔5 m以下の低平な平野である。台地は多くの谷に刻まれているが、上部は平坦で海拔(標高)15mから35mに及んでいる。

低地と台地の相違点は、土地利用をはっきりと規定している。(図 2-2 参照)

水田は沖積低地に細くのび、その谷頭部などには溜池があった。地下水面の深い台地では畑耕作がおこなわれ、水の得られやすい崖端などに集落が形成された。

武蔵野台地からみると、品川区域の位置はこの台地が、東京湾にせり出すようなところにある。

形成史的視点からいえば、沖積世の侵食作用によって台地が削られた、その東端部に品川区は位置するといえよう。



図 2-2 品川区付近の地図

参考文献：「品川区史(上)」より

2) 大地と谷の地理

当区の水系は、目黒川水系と立会川水系の二つに分けられる。(図 2-3)のように目黒川域は支谷数が多い。これらの谷奥には地下水が湧き、水の恩恵を受けてきた。

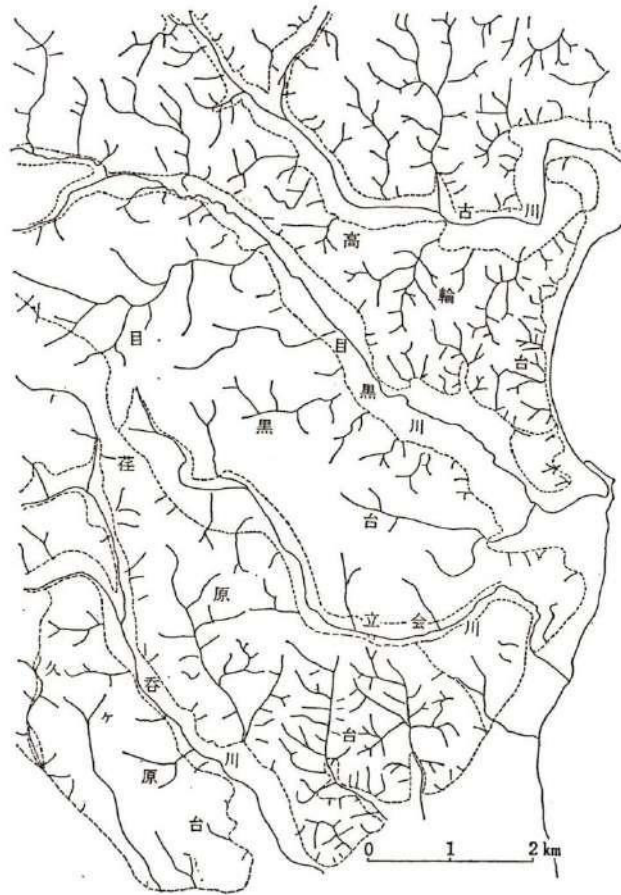


図 2-3 品川区とその周辺地域の水系図

海岸線は明治初期の図によって描いた。

点線は地形界(主に台地と沖積地とし境)

参考文献：「品川区史(上)」より

戸越公園の池もこうした湧水に養われており、三井邸の庭園の池となるまでは、灌がい用水として使われていた。

立会川は、目黒区の弁天池(今の碑文谷公園の池)および湧水池の溜池に発し、目黒台と荏原台との間を刻んで品川区に入っていた。品川区域の自然条件のなかの特徴は、低地と台地からなる地形が階段状の地形をなしていることである。

低地は、東部の海岸平野と目黒川・立会川沿いにある標高 5m 以下の平地である。台地は、多くの谷地に刻まれるが、その上部は平坦で標高 15m から 35m に及んでいる。

低地と台地の相違は、土地利用からみて規定している。それは明治初期の土地利用図をみると明らかである。水田は沖積低地に展開して細長くのび、その谷頭部などには溜池があった。

地下水面の深い台地では畑耕作がおこなわれ、水の得られやすい崖端などには集落があった。

都市化が進んだ大正期以後にも、地形条件と人為的景観との対応は、見分けやすい。

3) 地 層

品川区域は、武蔵野台地の東端部に位置しており、目黒川や立会川の小支流などによって谷地が複雑に刻まれている。

台地上面は海拔高度が高く起伏の少ない平坦地面が広がっており、関東ローム層と呼ばれる火山灰土で覆われている。

このローム層の多くは赤土が厚くおおい、その下部は砂礫層が積まっており、その間に粘土層がはさまっている。基底部は凝灰岩で構成されている。(図 2-4) (図 2-5)

ローム層や砂礫層は水をとおしやすいので台地は一般に地下水の浸透性が大きいため、地下水位が低く乏水性台地の性格が各地で見られる。

品川区域は大小の侵食谷が見られ、それらの谷戸から湧泉が出ていたことから、用水が引かれるまでは貴重な水源として村民は利用した時代がつづいた。

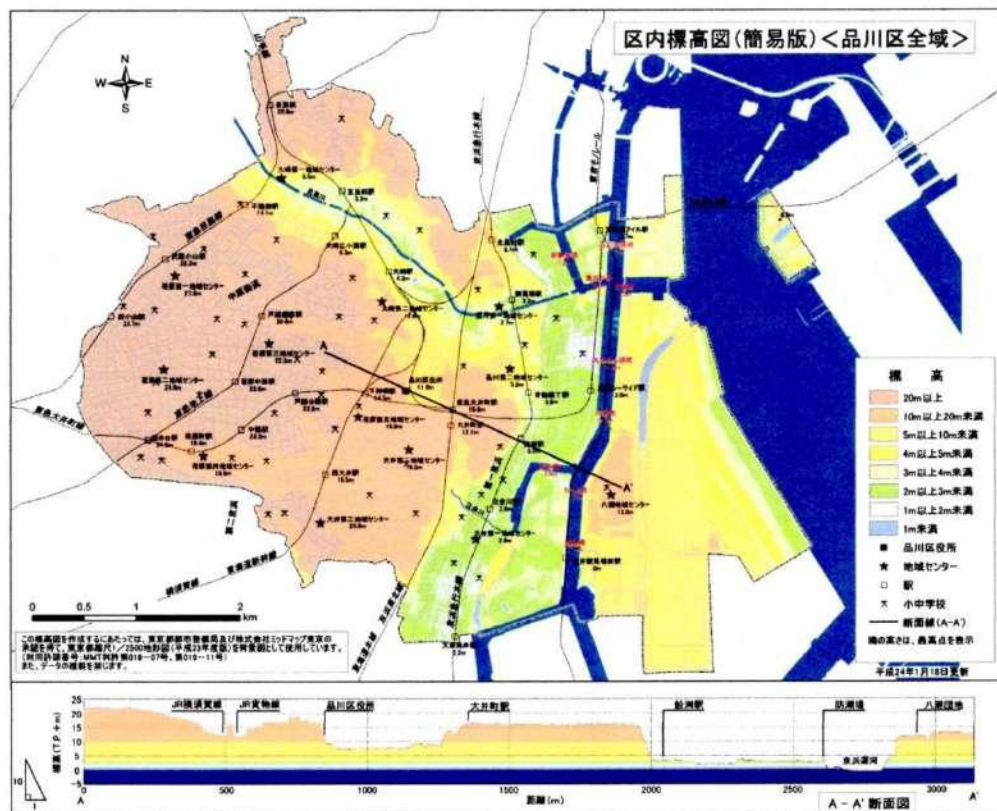


図 2-4 「品川区」ホームページ 位置と地形より (1/12)

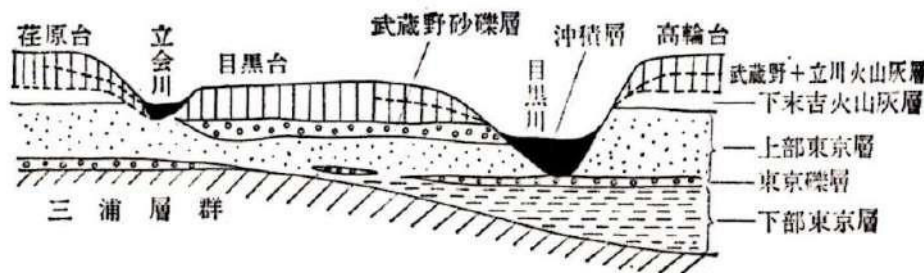


図 2-5 品川区の地質層序を示す模式断面図

品川区のほぼ中央部を北北東～南南西方向で切った断面

4) 地 下 水

品川区が地下水について調査した昭和 45 年 4 月、47 年 2 月の 2 度にわたって浅井戸および湧泉の水位および水質などの結果の報告書から要点について述べる。

- ① 地下水面の高さについては、図 2-6 を参照していただきたい。

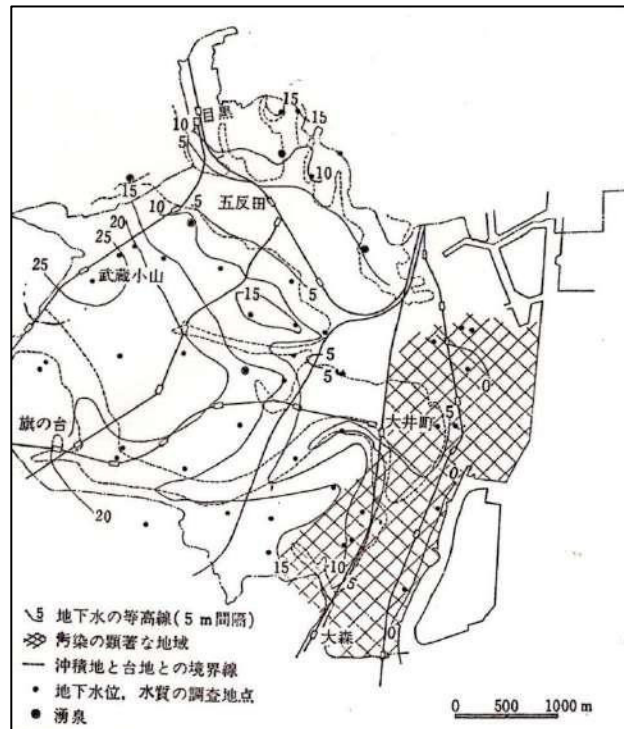


図 2-6 品川区の地下水の概況

参考文献：「品川区史(上)」より

- ② 全般的には自由面地下水の形状は、おおむね地形に順応するが、起伏の程度は地表面変化と比べゆるやかである。
- ③ 地表から地下水面までの深さについては、最も深いのは北部の高輪台であり、上大崎 1 丁目近辺で 9~11m 近くに達する。目黒台では、多くのものは 1.5~3m の範囲内にある。
- ④ これら地下水面の深い井戸は、いずれも谷戸の発達した地域や崖のそばなど、漏水しやすいところに存在している。
- ⑤ 地下水の水質については、当区内の浅井戸は幸福寺の「大井」をはじめとして古井戸が多いが、市街地化が進んだため人為的汚染をうけて、各水質項目すべてにわたって高濃度をしめし、大部分が飲用には不適であると報告されている。
- ⑥ 湧 泉

かつて区内には、台地の崖の中腹や台地をきざむ谷頭部の崖下の沖積地などには、多数の湧泉があったと思われる。大正期の地図には、湧泉と結びついていたと思われる池が、各地に記入されている。

しかし、現在は市街化がすすみ、池は埋められ崖面はコンクリートなどで覆われ、確認できる湧泉の数は少なくなっている。

3 節 品川用水の流路位置

品川用水が創設される以前は、玉川上水から現在の武蔵野市で分水した仙川用水が調布(仙川村)まで引かれていた。品川用水はこの仙川用水の分水を受けたので、現在の武蔵野市から三鷹市、世田谷区、目黒区を通して品川区域に入っている。(図 3-1)

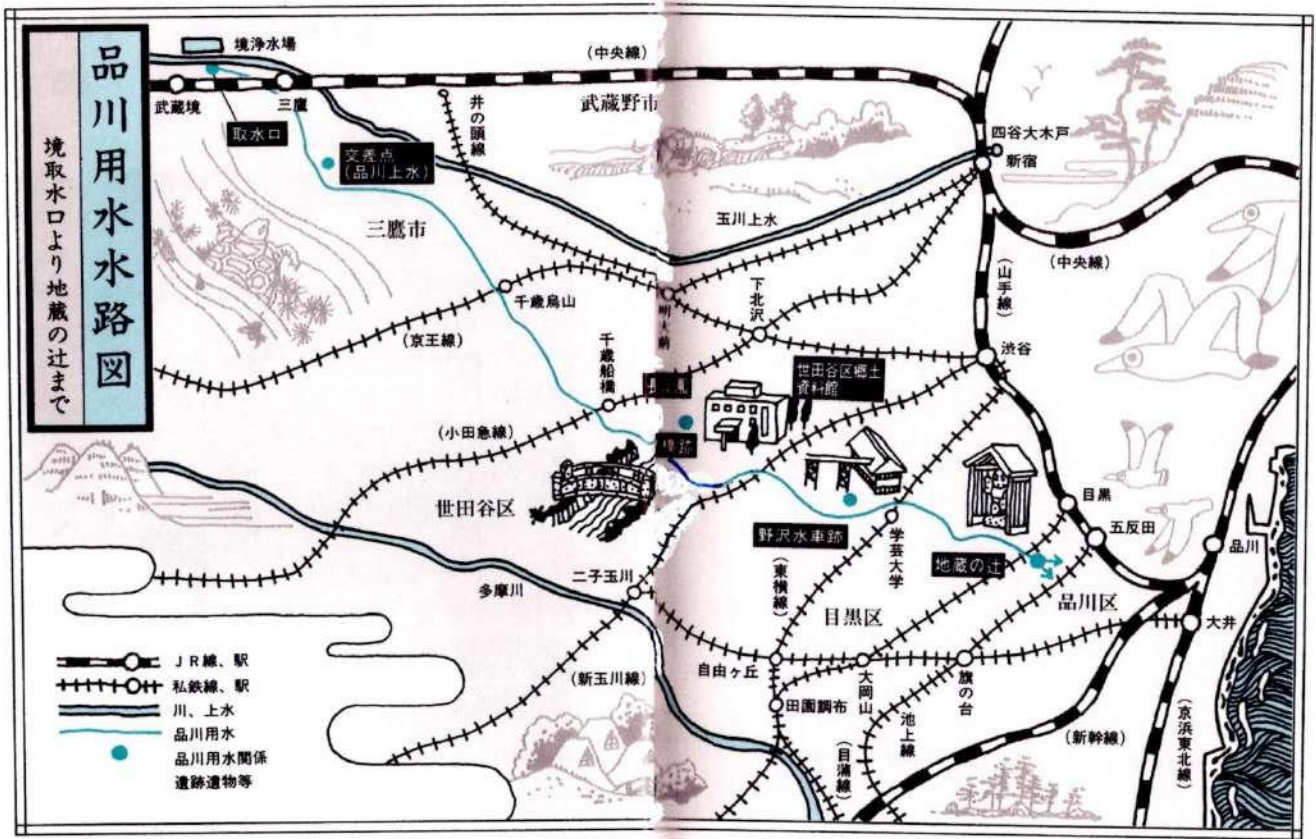


図 3-1 品川用水全体位置図

参考文献：「品川用水」16～17pp

通水の距離が 20 数 km にもわたって、水が自然流下できるようにするため流路は地形上の分水嶺を選定することが計画条件であった。しかし、流水区間の中には小河川の上部を通水せざるをえないところがあり凹地があった。水路が流下するところより高所であるところは深く掘削し、低地部では逆に土盛してその上に水路を造るなどさまざまな工夫が必要であり、困難な工事であった。

品川区域に入った品川用水の水は何本かの水路に分けて、現在の品川区全域に広がっている。その主な水路位置は図 3-2 を参照していただきたい。

幹線水路の最長は約 27.5 km あり、これらの用水を利用した村々の団地の面積は約 140 ヘクタール (140 町) になっており、その多くがこの品川用水に依存していた。

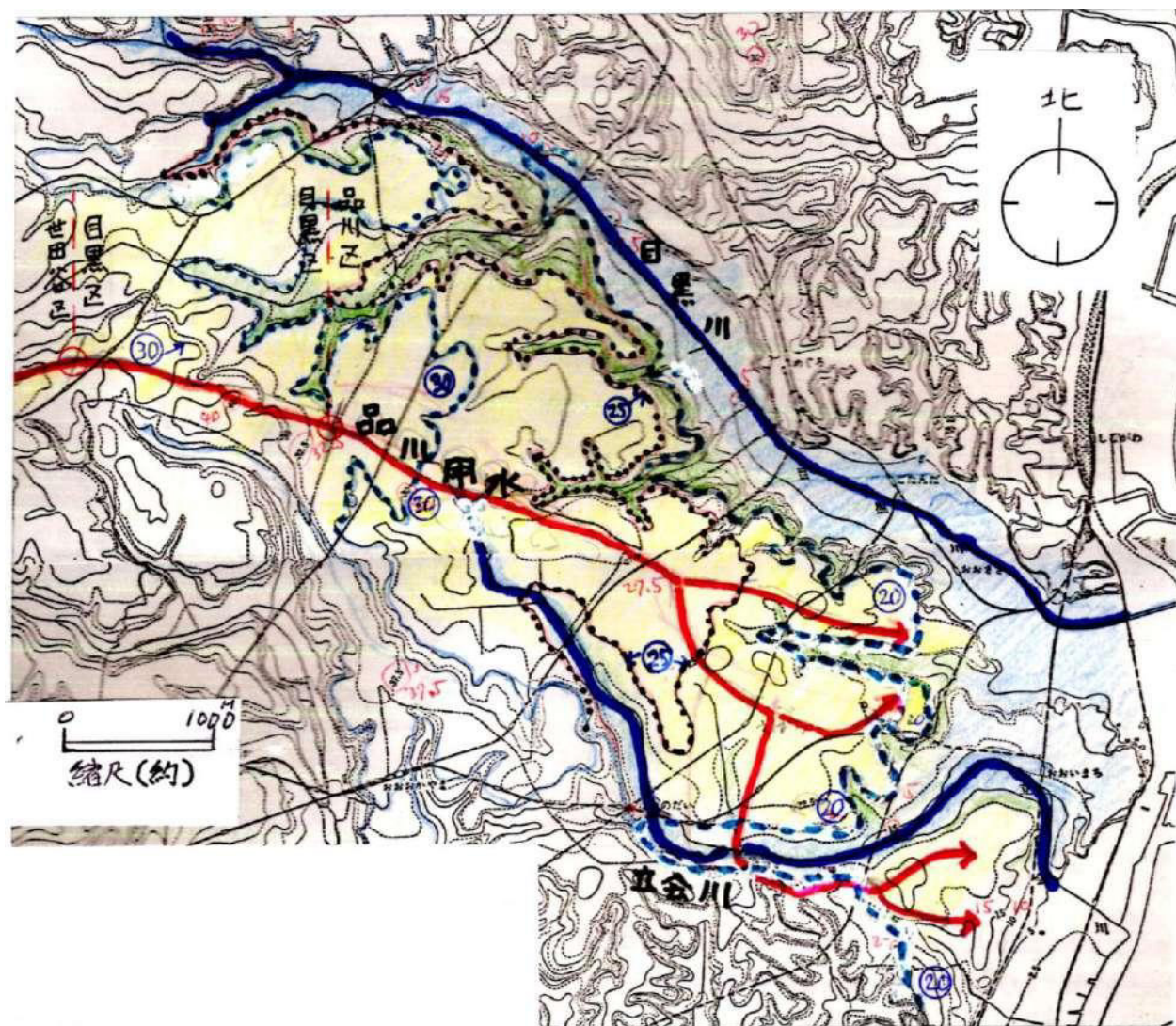


図 3-2 品川領と品川用水が掛かる地形と標高

②⑤--- は標高を示す — 赤線は品川用水幹線分水路

4 節 品川用水の果たした役割

品川用水は、品川領九宿村の農業用水として利用されてきた。それ以外の利用は固く禁じられてきた。途中の通過村では水利用できず、また農業用水以外の利用も許されなかった。(図 4-1)

この用水によって品川領内では水田開発が進み収穫量も増加した。たとえば、戸越村では開発前と比べると以前は 38 石が、開発後は 85 石余りとなり倍以上となった。

品川用水が通水されることによって、戸越村の溜池は埋められ水田に転用された。品川領域にあった村にあった溜池を埋めて新田にしたところも多く見られた

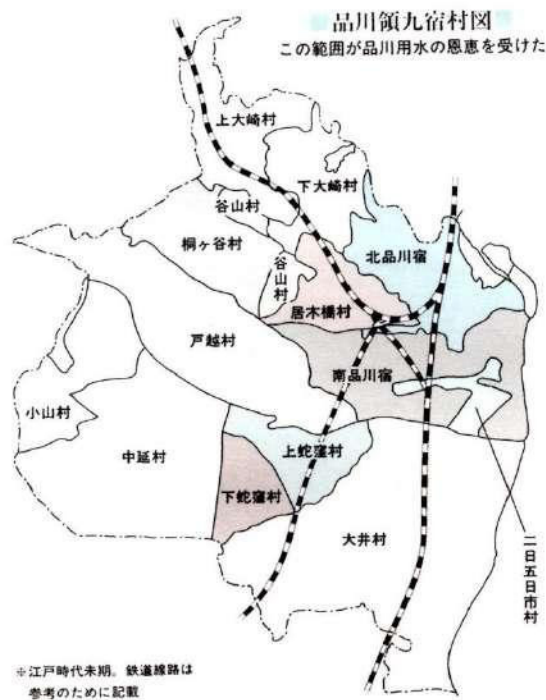


図 4-1 品川領九宿村図

参考文献：「品川用水」20pp

1) 維持と管理

品川用水は地表を人力で掘り込んだり、周囲の土や石積で盛り上げて水路をつくり、そこへ玉川上水の水を定められた樋口で受水して水路へ通し、長く品川の地(朝日地蔵の辻)へと通水される。そこから各分水路へと分水され、各村々の水田へと引き込まれて稲作が営まれてきた。(図 3-2 参照)

この営みは昭和の初期まで約 350 年ものあいだ続けられてきたことに深く注目しておきたい。

品川用水は、寛文 9 年(1669)に通水したが、約 20 年後の元禄年間になると品川領の各村まで水が届かないことがおきた。これに対応するため上流の村の分水を止め、品川領以外の水利用を禁じたのはこの頃とされている。

これだけの対応では十分な水供給はできなかったのも、幕府は元禄 4 年(1691)に大規模な補修工事を実施した。この工事の大部分は幕府が負担したが、品川領の各村の負担も大きく、数年来の干害で損害を受けていた各村には大きな痛手であった。特に大井村では、名主の屋敷を質に入れるなど苦勞して費用を捻出した。

その後もたびたび補修工事が行われ、そのたびに幕府の費用では不足する分を品川用水領の村々が補うなど、大変な苦勞をして品川用水を維持してきた。

品川用水が通る途中の村々(世田谷も含まれる)では、水路が壊されたり流水の水を「盗水」される心配もあったので幕府は5ヶ所に「高札」を建てて、その防止を図った。高札に書かれた文字は、品川用水の土手を壊したり、水を盗んだりする事を禁じる内容であった。(図4-2)

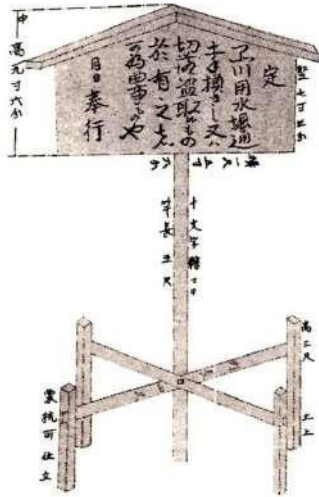


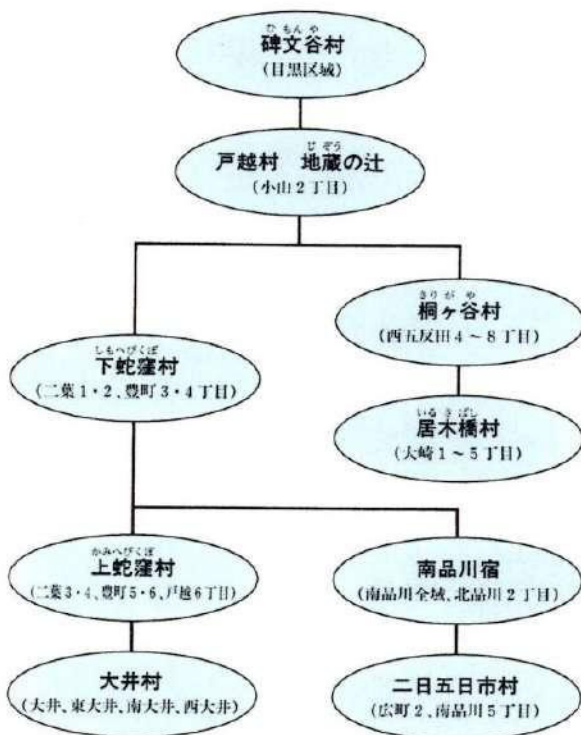
図4-2 品川用水の高札

参考文献：「品川区史(上)」通史編 824pp

また、品川領の各村は、品川用水組合をつくって共同で用水の管理にあたった。

境村の取水口をはじめ世田谷の水路の要所には番人を置いたり、水量不足のときには、領内の上流と下流での用水量の不均衡をなくすために水を水田へ引き入れる順番を決めて、水の流れを調節したりした。まさに品川用水の水は「いのちの水」だったといえる。

2) 品川用水にまつわる紛争



品川用水の分水は、戸越上水としての役目を短期間に終え、灌がい用水として使われてきた。用水に関係する九ヶ村(図4-3)は、「品川用水組合」を結成して分水路の管理に当たった。灌がい用水の供給量はさまざまな要因があって不安定であった。

これは、頻繁する干ばつの発生による玉川上水からの分水量が十分に確保できなかったこともあったが、品川用水上流部における仙川用水などの分水をめぐる紛争や、地域間の渇水期における用水の配分争いによるものもあった。これに加え、盗水事件や分水口の増設・改修などに関する紛争も各地で発生した。

図4-3 分水路系統図

参考文献：「品川用水」15pp

5 節 江戸時代の農業

1) 農業のあらまし

江戸時代の農業は、稲作が中心であったが農民の生活を維持するため麦・粟・稗・大豆等の雑穀や野菜類も作られていた。

品川用水が通水して安定した水供給はあったものの用水量は充分ではなかったため、以前からおこなわれていた摘田は明治時代まで残っていた。しかし、摘田は植田に比べると収量があがらないので、用水の供給が受けられるようになった地域では、植田へと転換されたところもあったという。

畑作は先にあげた穀物・野菜などのほかに戸越村のタケノコは、次第に付近の農村に広まって重要な特産物になった。(図 5-1 参照)

品川領の各村で栽培された野菜類は、湧水を利用した洗い場で荒い、江戸市中へ運んで販売され、江戸市民に新鮮な野菜として人気を集めた時代が続いた。

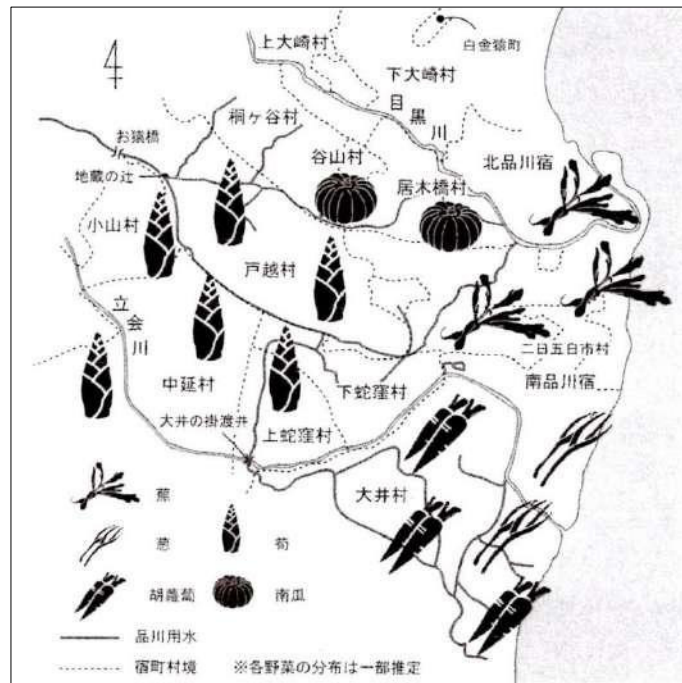


図 5-1 品川の「江戸野菜」栽培分布図

参考文献：品川歴史館解説シート N014

2) 九ヶ村における石高

ここにあげた九ヶ村における灌がい面積と石高については、残された資料が少ないので詳しくは紹介できないが、「品川用水沿革史」に記されたものでは、1779 年時では 143 町(約 141.9ha)余りであり、石高は、1349 石 6 斗(約 202 t)余りであった。

この石高は少ないので、その後の状況を調べてみると 1812 年の記録では、3 ヶ村(2 宿 1 ヶ村)の記述ではあるが村々の灌がい面積と石高はいずれも 3~5 倍に増加している。

参考までに、1779 年における品川用水掛九ヶ村における平均反収は 0.94 石/反(140kg/10 a)であった。

6 節 明治維新後からの品川用水

1) 明治維新时期

明治維新によって江戸幕府が崩壊したとき、品川領の農民たちにとってもっとも気がかりだったことは、用水の存続だったかもしれない。たとえば、幕府が建てた高札が官軍にとってどのように受け入れられるか不安で、官軍が近づくと一時、高札をとりはらって保管したりしたこともあったという。

品川用水の水源である玉川上水は、神田上水とともに幕府から明治政府に渡り、明治4年(1871)からは東京府の管轄になった。

これと同時に、今までの品川領の9村に加えて下大崎村と新井宿村が加わった全11ヶ村で品川用水組合(のちの品川用水普通水利組合)を結成して用水の維持、管理にあたってきた。

これ以後は、用水組合が中心となって住民の自主的運営にまかされた。

2) その後の品川用水

明治時代の末期になると品川用水路の各村は都市化が進み宅地が増えたため、品川用水は農業用水としての需要が減り、次第に工業用水、洗い場用水、消防用水として利用されるようになる。このため管理組合は水使用料を徴収して、組合員以外の村の人々にも水の使用を許可した。

流水が水車用にされたり、水路の土手が宅地に転用されたところもある。

世田谷区野沢にあった「野沢水車」とよばれる水車は、直径5mもある大きなものもあった。明治15年に設置され大正時代の終わりまで使用された。(図6-1)



図6-1 野沢水車の全体像

参考文献：「品川用水」43pp

新しく住民となった人々は、用水に関心が薄く、水路にはゴミや瓦礫が捨てられたり、下水が放流されたりして水の流下が妨げられたりした。これらの状況が品川用水の上流部、下流部でも進み、次第に下水化していった。

終戦後、昭和 22 年(1947)になって、品川用水の上流部にあたる仙川用水を利用していた三鷹市から、品川用水普通水利組合にあてて、品川用水の水利権を譲り受けたという申出があり、これを受けて、昭和 23 年(1948)に品川用水の管理は三鷹市に移り、品川用水は、品川区での役割を終えた。

3) 品川用水の現状と遺構

品川区内に入っている品川用水路は、朝日地蔵の辻で大井町方向にむけて流下する大井分水系と戸越分水系・大崎町方向にむけて流下する桐ヶ谷分水系の 3 方向にむけて分流されている。これらの断面規模は、品川用水本水路幅で(約 1.5~1.8m)、分水路では、2 分の 1 (約 1.0~1.3m 地形によって異なる)と程度であったと想定される。

用水の管理が三鷹市に移り、品川用水が果たしてきた農業用水の役割を終え通水が止まると、分水路の環境は悪化が進んだ。

昭和 34 年(1958)ごろから暗渠化の工事が各地ではじまり、水路は地下に埋設されて住宅地を結ぶ道路に利用された。

これらの分水路は、数百年の品川の発展の歴史を刻んでおり、丹念に眺めてゆくと往時の遺構や、用水路のほとりで展開されてきた生活や「農」の営みの姿が面影となって残り、各地から見えかくれしている。

4 章 品川用水と分水路の「遺構」を探る

1 節 水利遺構とその空間を見つける方法

品川区内に付設されていた分水路網は、昭和 20 年～30 年代になって通水が止められた後は、埋められて道路や下水道などの都市施設に転用されて、用水路ありし頃の流水や面影を見い出すのは難しい状況が半世紀ものあいだ続いている。

このような状況のなかで水利遺構を見い出す作業を展開するには、当時の姿をとどめている写真、古地図、絵図、説明文、研究書を収集し解読したり、用水路周辺部に残っている地形、土木的工事跡(石積など)、植栽、道路の形状、街並風景などから残された造形や空間を確認する方法を採用することにした。

2 節 「絵図」から水利遺構にせまる

品川用水の名が絵図上にみられるのは、「江戸時代の水道」—正徳末頃(1715～1718)である。

(2 章の図 2-2 参照)

流路位置が描かれているものでは、「品川用水路絵図(二)」安政五年作図がある。(図 2-1)

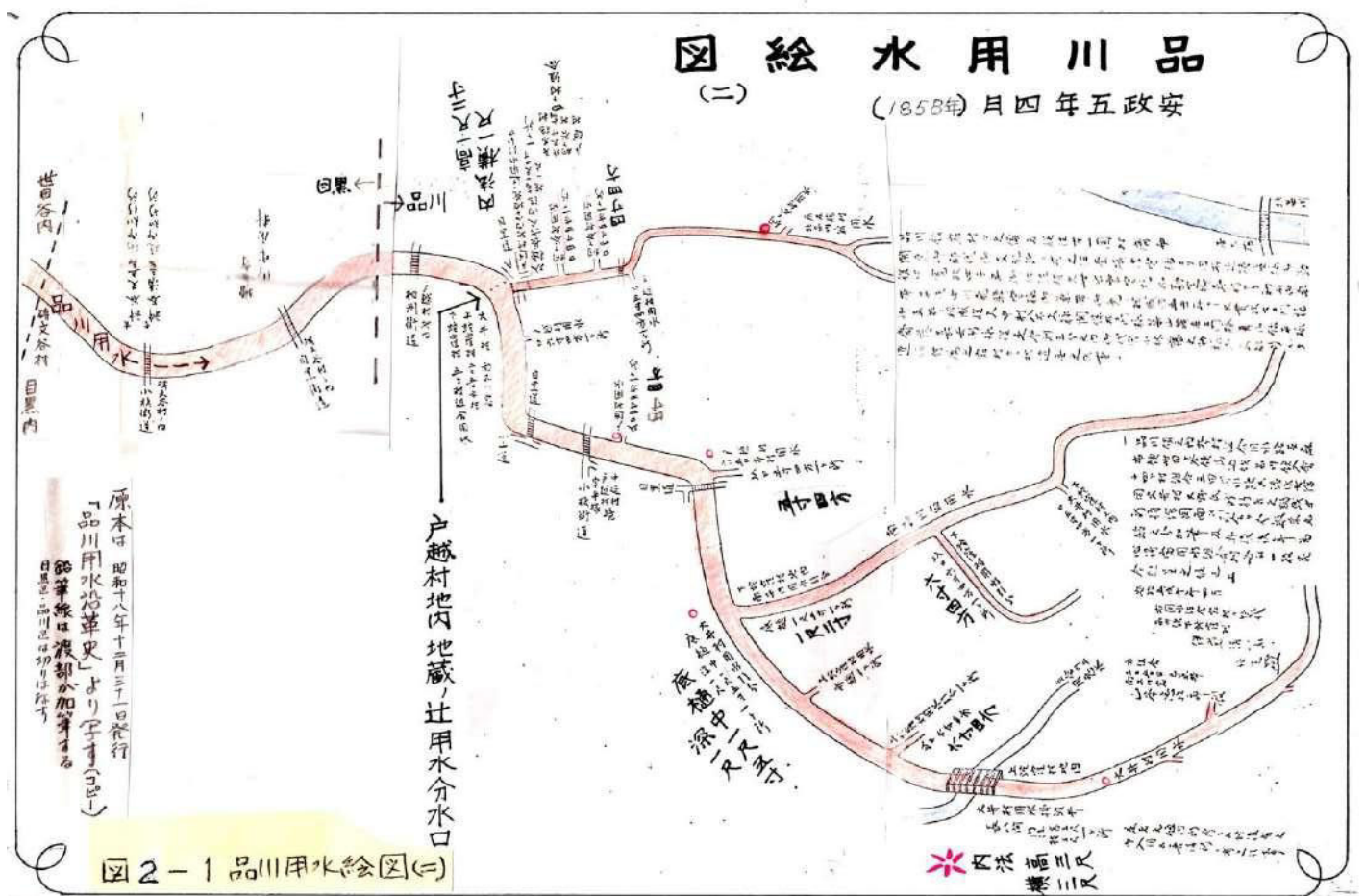


図 2-1 品川用水絵図(二)

この絵図中には各分水路ごとに分水口の規模が記されているため、この値を読みとる。資料として拠り所とし、入手した各種の絵図、地形図等と比較して分水口の位置と形状をイメージし確認することにした。 入手した古地図のなかのひとつに「品川の古道」、「品川領水路図」と題したものがある。(図2-2)(図2-3)

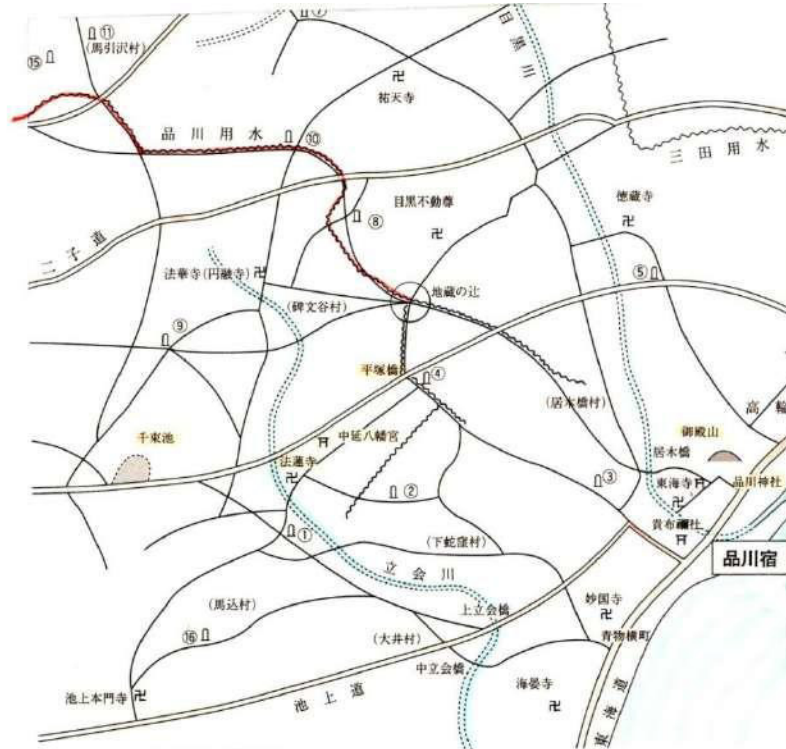


図2-2 品川の古道と品川用水

参考文献：「品川の古道」・区教育委員会

この図中には、古道と水路が交叉するところに設けられた「橋」の名が記されているので、遺構の現地調査候補地点にあげた。例えば、朝日地蔵尊前の「辻の橋」、中原街道に架かる「平塚橋」、下神明駅前にある「古戸越橋」など由緒ある橋の名が残っている。

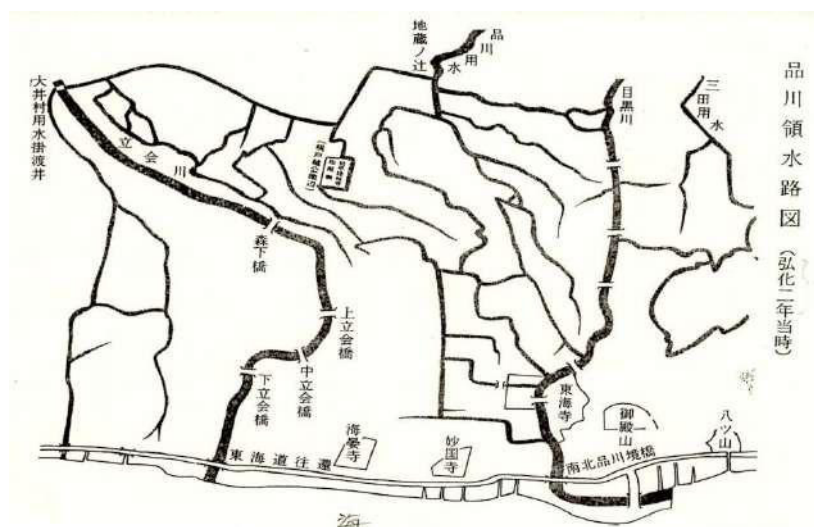


図2-3 品川領水路図

参考文献：「品川区史(上)」より

3 節 等高線が入った「地形図」から分水路の位置を知る

陸地測量部や国土地理院発行の地形図を収集し重ね合わせてみると、分水路が見えかくれして表示されているものがある。大正、昭和期に発行された「地形図」陸地測量部のものを見ると、分水路位置が示されている。(図 3-1)

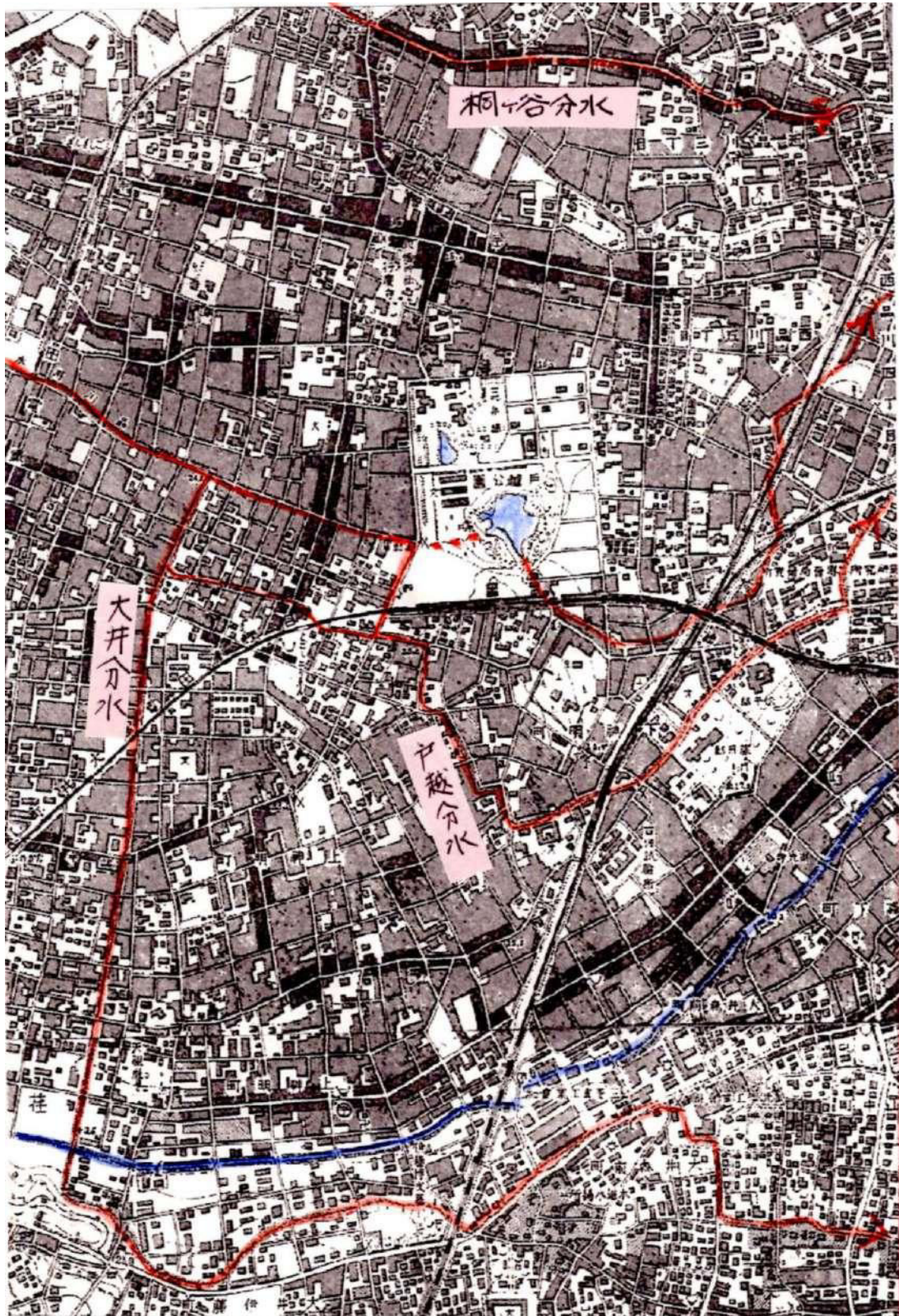


図 3-1 分水路の位置が示された地図

発行年が新しくなると道路、鉄道などが記されたり宅地が表示され、水路の位置が変更されたり消えていたりするところもあることがわかった。中でも各分水路の末流部は、時代が新しくなるにつれ消えているところも多くみられた。

等高線が地形図中に詳しく入ったものの中に「迅速図」明治14年測図(図3-2)がある。



図3-2 品川地域の迅速図 明治14年測図

この図(標高値)をよりどころにして、分水路網と等高線を重ね合わせた重図(図3-3)を作成した。

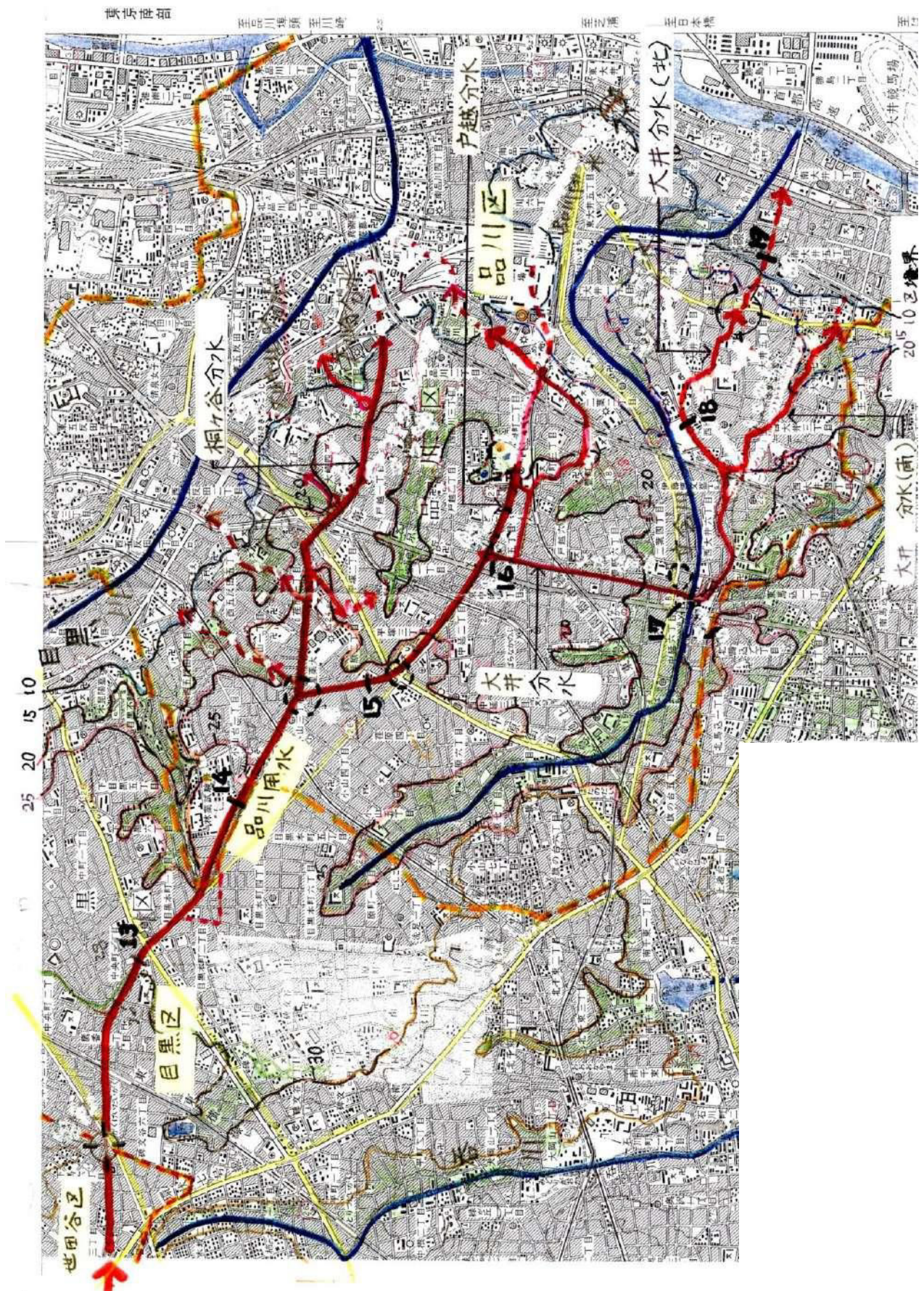


図3-3 重図

縮尺 1/25000

また、この重図にもとづき「現地調査用・調査対象水路位置図」(図3-4)と「品川用水周辺の標高値と水路低部の縦断面図」(図3-5)を作図化した。

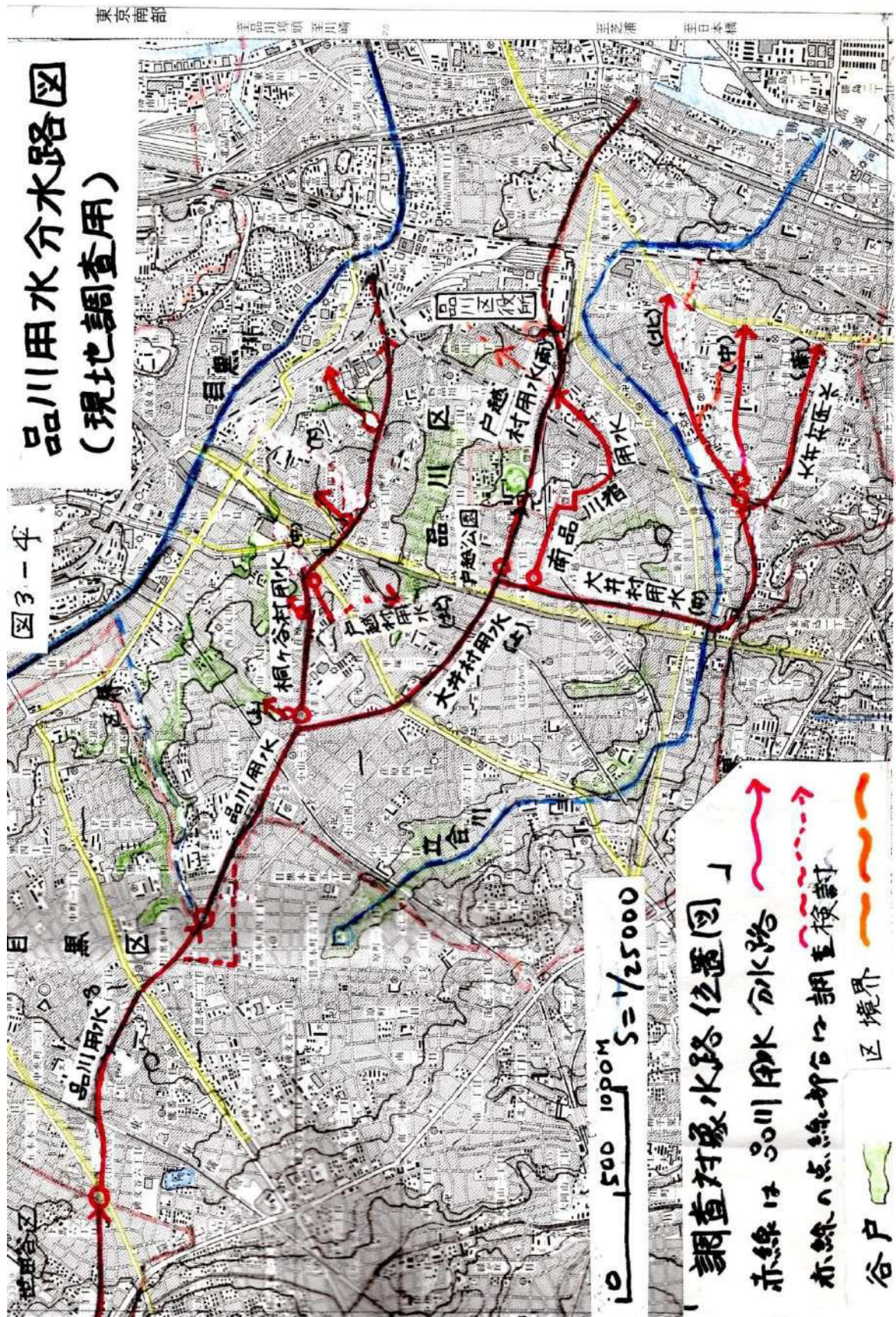


図3-4 品川用水分水路図(現地調査用)

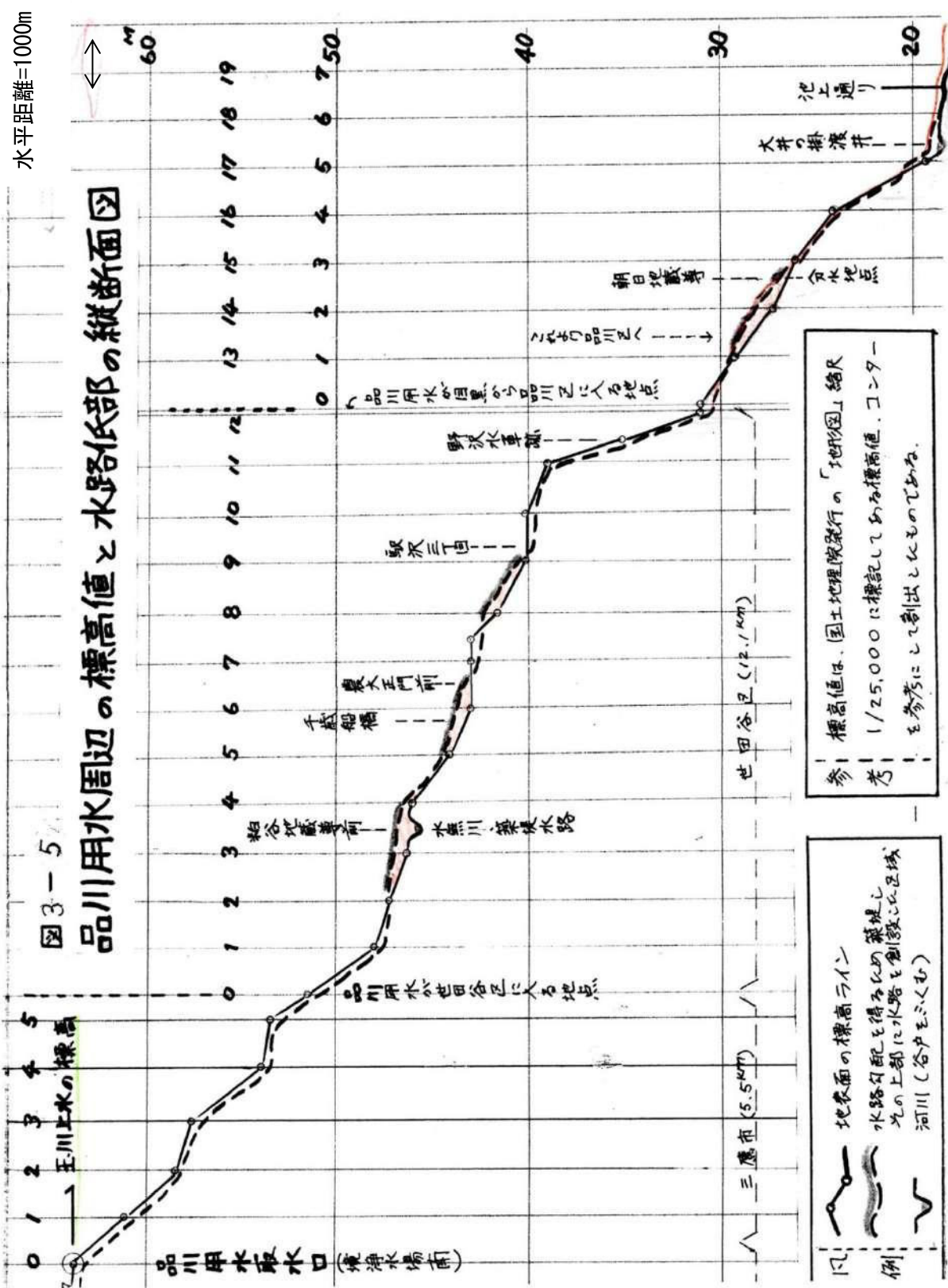


図 3-5 品川用水周辺の標高値と水路低部の縦断面図
(これを原図とする)

これらの地図をみくらべると、品川用水取水口から世田谷を流下し品川区内の水路勾配の形状や築堤水路箇所の高低の様子がイメージしやすくなった。

4 節 出版物に品川用水を表現した写真、絵図、作文を探し出す

筆者等がこのテーマに関係する収集した刊行物の一部を紹介する。

- a) 「品川用水—溜池から用水へ」 平成 6 年 品川区教育委員会 (図 4-1)

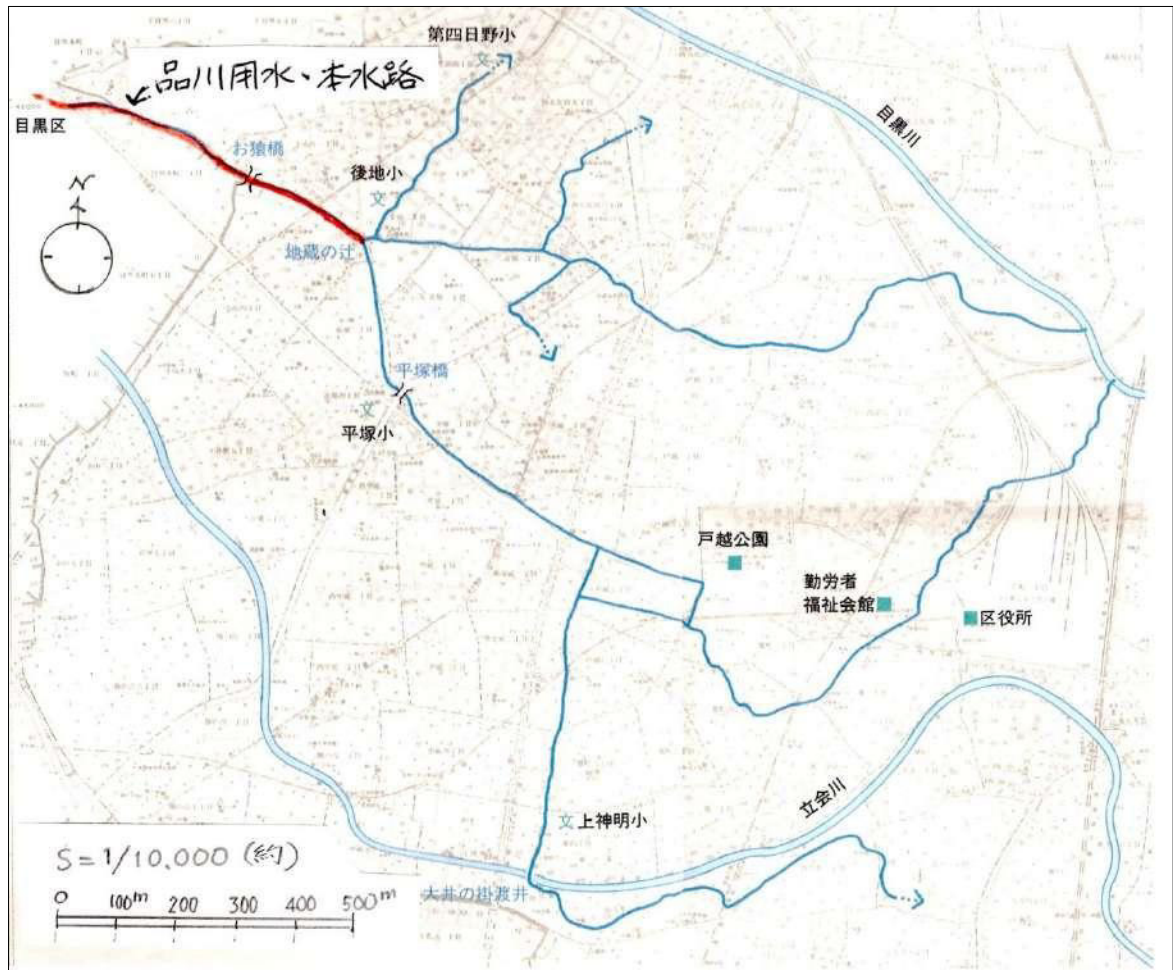


図 4-1 「品川用水の主な水路」(明治時代末)

明治 42 年の土地利用図をもとに作成した水路図を現在の地図に重ねた。

参考文献：「品川用水」品川区教育委員会

- b) 「第五つうしん—66、67 号」 平成 12 年 編集委員会 (図 4-2)
c) 「品川歴史館解説シート」 平成 23 年 品川区歴史館
d) 「品川用水沿革史」 昭和 18 年 品川用水普及水利組合
e) 以上の刊行書のなかの絵地図、地形図、写真、作文などから選び出して「遺構地」の候補にしたものがある。具体的事例は 5 章で示している。



図 4-2 品川区内の主な品川用水路と史跡場所などの図

参考文献：「第五つうしん」第 66、67 号(品川区)

5 節 水路を形成した構造、規模、形状の情報を集める

まちのなかに埋没しかかっている「品川用水の遺構」を見つけ出す手がかりとなるもののなかに、水路の構造、規模、形状等のハード面に関する情報を事前に把握しておく必要があった。

その手がかりにしたのは「品川用水絵図(二)」の中に書かれた説明文中に規模、形状等が記されている。これを筆者は読み取り「品川用水絵図(二)」を下図にし、その横に手書き文字で記した。(図 2-1 参照)

6 節 「品川用水絵図(二)」(図 2-1 参照)を解読

水利遺構のあった場所を見い出す手がかりとしたのは、水路規模、構造、形状、付帯施設等のハード面についての情報を現地調査前に入手しておく必要があったからである。

この作業に時間をかけた。その手掛かりとしたしは「品川用水絵図(二)」(図 2-1 参照)書き込まれた説明文(分水口の規模、形状等)を読み取り、図中に転記した。(図 6-1)

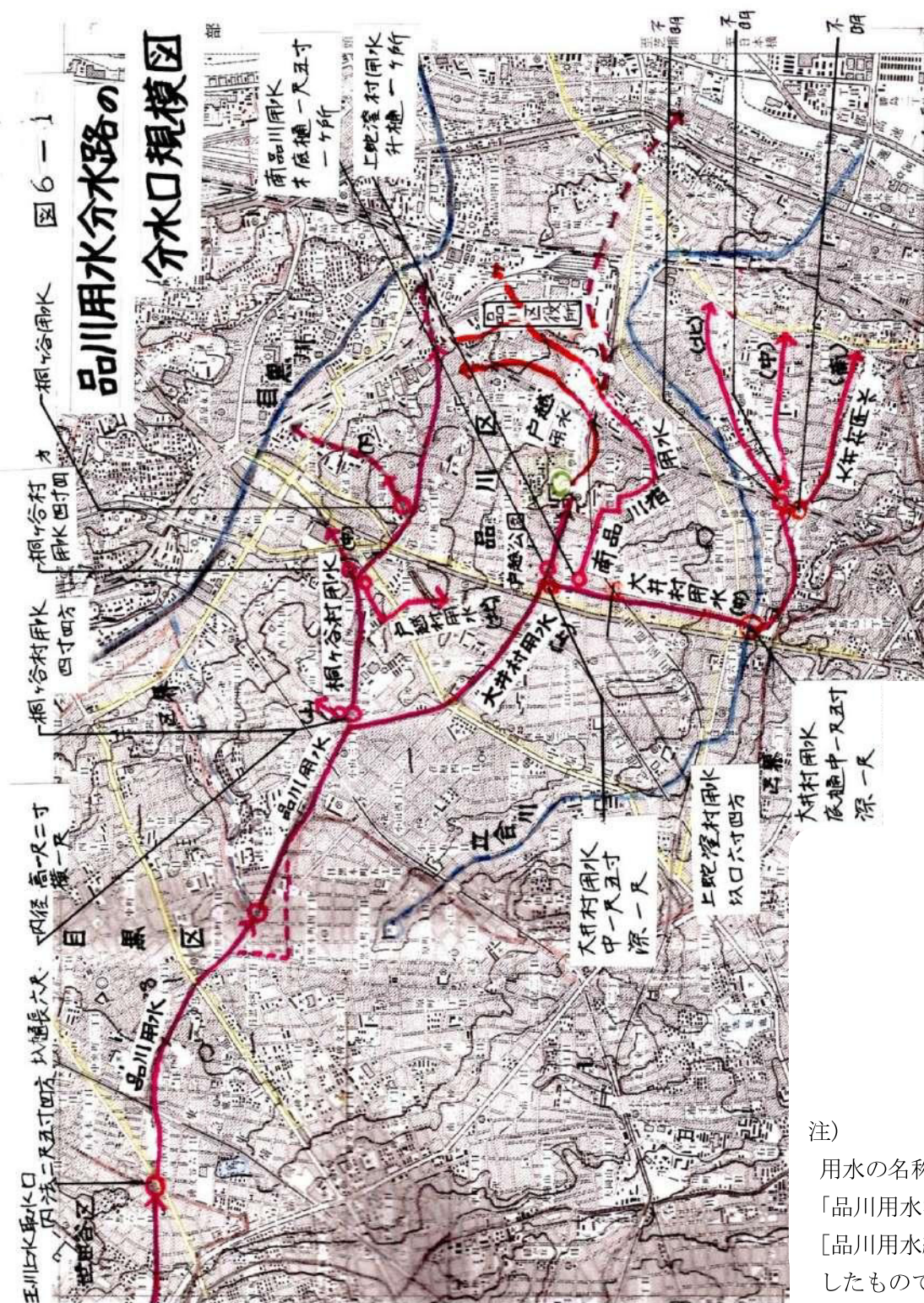
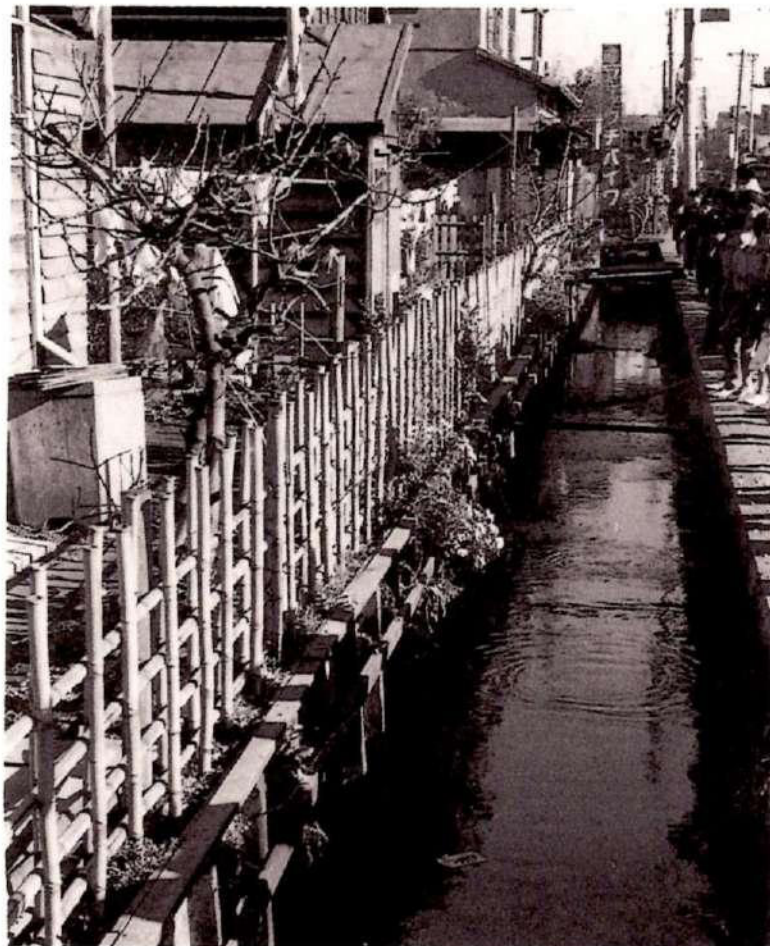


図 6-1 品川用水分水路の分水口規模図

次にこの作業で知り得た情報を要約して次に示した。

- ① 品川用水の取水口は、玉川上水が三鷹市を流下する地点にある。この取水口の規模が「2尺5寸(四方)」と記されている。時代が変わってもこの寸法とその形状はほとんど変更されていない。
- ② それ故、品川用水の取水口から入ってくる水量の大半は、品川区「朝日地蔵の辻」に達するものと考えてきた。
- ③ 主要な分水路である「大井分水」は、1尺5寸(四方)とある。この分水口の数値と品川用水路の平均的断面形状から類推して、地上面を開削して通された水路幅は、約0.8m～1.1m、深さ0.7m～0.9mくらいであったと想定した。
- ④ ここに想定した水路規模を裏付ける写真—大井分水の上流部(戸越3丁目付近)(写真6-1)があるので参照していただきたい。



暗渠になる直前の品川用水—戸越3丁目付近、昭和36年(山本馨氏撮影)

写真6-1 品川用水から分流されている「大井分水」の風景

参考文献：「品川用水」品川区教育委員会

- ⑤ 品川用水は、品川区に入ると先にあげた大井村方面へ向かう大井分水のほか、戸越村方面に向かう「戸越分水」と桐ヶ谷・大崎方面に流れる「桐ヶ谷分水」がある。

「品川用水絵図(二)」によると、戸越分水の底桶は1尺2寸、桐ヶ谷分水は内法1尺2寸・横1尺と記されている。このことから、これら2本の分水路の地面上の規模は、大井分水路の約3分の2程度であったと想定した。

地面上に開削された水路規模の想定作業から考えたことは、3分水路に関係する規模の遺構情報は現地で得られる可能性はあるが、各3分水の支分水は小規模となるため見い出すのは困難になると考えた。

- ⑥ 「品川用水絵図(二)」の読み取り作業から、3分水路のハード面の情報にもとづき「品川用水と分水路の位置図」を作成した。筆者等は、この図を現地調査用の水利遺構案内用とした。(図3-4参照)

- ⑦ 各地の分水路網図をよりどころとして水路空間を描いた絵図、写真、説明文を収集し「水利遺構」のありかを探った。

品川区域は、江戸時代から多くの街道が通り、港が栄え、大名屋敷、社寺仏閣が建ち並ぶ歴史をとどめる地域であったことから、品川用水の様子は、様々な古文書、絵図、写真などに残されていると予想して収集、解読をしてきた。

その結果、品川用水の姿や形状がわかる紙面等を入手し、それらの地点を定めることができた。それらのポイントは、約20箇所になった。これを先に作成した「品川用水と分水路の位置図」(図3-4参照)に水利遺構の候補地として記し、後日、現地調査を実施した。

参考 — 分水路にまつわる水利遺構の所在地は、5章で示している。

5 章 水利遺構を見出す着眼点と作業

1 節 事前の現地調査で得た事項

平成 11 年夏、本調査の開始前に品川用水の全体像を把握しておきたいと考え、品川区が作成していた「品川区・用水位置図・縮尺 1/10,000」や、地形図(国土地理院発行)などを拠りどころにして、主に水路跡地を踏査して歩いた。

この事前調査で認識できた事項を下記に示した。

- 1) 分水路(1次分水路を対象としている)の全区間にわたって水路地の転用や下水道施設への埋立がおこなわれており、水利施設(主に水路)の原形が、残存している区間は見出すことはできなかった。
- 2) 水利施設の断片(たとえば下水路にされているが側面が見出せるものなど)が緑道の一端に存在するものや、かつては水路に架けられていた橋の「親柱」が遺構として残っている個所を見出すことはできた。
- 3) 1次分水路の多くは、街道や古道と平行して通っている区間が多くあり、これらの由緒ある古道(水路も含む)には、案内板、標石、庚申塔などが建てられており、なかには、水路名が石柱に刻まれているものもあった。
- 4) 水路沿いや、分水口には水にまつわる信仰と結びついていた水神、稲荷、地藏尊、庚申塔、石仏、社寺などが建てられており、水路との空間的結び付きを暗示する造形が残っているものを見出した。これらは、本調査時には風景構成物として取り上げることにした。
- 5) 水路の一部をひろげ共同洗い場にして地域の小広場に使っていた「面影」が感じられるところもあった。

2 節 水利遺構地を「水利遺構空間」として見なす

- 1) この予備調査を行ったことで知り得たことは、用水路の通水機能が停止すると、他の都市施設に転用され、水利遺構として大規模な痕跡を見出すのは困難であると実感した。
- 2) 水利施設が道路や宅地などに転用され、数十年が経過している状況があるなかで遺構を見出すことにこだわらず、水利施設とそれに付帯する施設や水路とその空間を利用してきた生活や生産等、日常的に利用できた水路沿いの古道の街道を構成していた風景要素を取りあげて、これらをセットにして「水利遺構地の空間」とみなすことが必要だと考えた。
- 3) この着眼点は、現地調査対象とした水利遺構地の確認票の項目に取り入れている。
- 4) 水利遺構地とそれを取りまいている事物をセットにして扱うことによって、水利施設が利用されていた時代の「面影」を連想できることに着目した。

3 節 水路の規模(幅員・深さ・通水量)の推定

- 1) 品川区、朝日地蔵の辻に入っている品川用水路の規模は、世田谷区桜丘では幅 1.8 メートル、深さ 0.9 メートル前後であると予想した。(写真 3-1)
- 2) この水路断面に近い規模が受け継がれ品川区に入っていたと予想した。
品川用水路は、この朝日地蔵の辻で2分され、北方向は桐ヶ谷分水、南方向は大井分水(戸越分水を含む)として流下している。(写真 3-1 参照)
- 3) ここで2分された水量は、品川用水絵図(4章・図 1-1)によると、桐ヶ谷分水に約1/大井分水(戸越分水を含む)に約2/3流入していたものと推定している。
- 4) 分水路網全体を概観すると、通水網の先端部にゆくにつれ通水路の規模は小規模となる。また通水先が水田地に入っていたことを考慮に入れると幹線分水路から先の支分水路の水利施設の遺構を見出すのは、小規模のため難しいと考えた。



写真 3-1 世田谷区千歳台を流れる品川用水の風景

4 節 現地調査する水利遺構地のリストアップ

- 1) 前節までに記した予備調査で得た情報等から、現地調査の対象は、品川用水路と 3 本の分水 路にした。（4 章・図 3-4 参照）
- 2) この分水路図を目安にして、品川区教育委員会、品川区歴史館等が発行してきた「品川用水 関連の資料」のなかから、水利施設に関する説明文、写真、絵図、地図等を解読し三分水系 ごとにとりあげた。

- 3) 現地調査対象として取りあげた「水利遺構地」を下記に示した。 A－水利遺構地名のリスト

① 品川用水・桐ヶ谷分水系

- | | | |
|---|-------------|----------|
| 1 | 猿橋庚申堂 | 小山台 1 丁目 |
| 2 | 朝日地藏尊の辻 | 小山 2 丁目 |
| 3 | 水車を動かしていた水路 | 小山 2 丁目 |
| 4 | 京陽小学校横の水路 | 平塚 3 丁目 |

② 戸越分水系

- | | | |
|---|------------|----------|
| 1 | 戸越公園 | 戸越 4 丁目 |
| 2 | 古戸越橋 | 豊町 3 丁目 |
| 3 | 下神明ガード下の水路 | 豊町 3 丁目 |
| 4 | 二葉の地藏尊前の水路 | 二葉町 2 丁目 |
| 5 | 階段状水路 | 西品川 1 丁目 |

③ 大井分水系

- | | | |
|---|---------------|-----------------|
| 1 | 平塚橋の交差点 | 武蔵小山 |
| 2 | 大井分水路の水面に集う児童 | 戸越 3 丁目 |
| 3 | 大井分水路跡 | 戸越 6 丁目（大井町線下） |
| 4 | 大井の掛渡井 | 二葉 4 丁目（立会川を渡る） |
| 5 | 鹿島神社「恵澤潤治の碑」 | |

大井 6 丁目 上記にリストアップした水利遺構地は、分水路図をベースにして「水利遺構地案内図」を作成した。(6 章・図 6-1 参照)

- 4) 水利施設に関する資料は入手できなかったが、分水路跡地には、水路に水が流れていた面影 を感じさせてくれる空間が各地に点在している。その構成要素をあげると、地形、石積み、 古木の並木、古民家、壁、緩やかな街路構成などが、あるまとまりをもって形成している伝 統的風景が残っている場所がある。これを「面影」と称する。

この地点を水利空間の「面影」ポイントとして記録にとどめることにした。

そのまとめ方としては B－「面影ポイント」案内図として水系ごとに、案内地図と写真によっ て紹介するページを加えた。

5 節 水利遺構地の現場確認事項票(シート)

調査日

担当者

1. 水利遺構地名：
2. 所在地：
3. 残存物：
4. 主な情報媒体 ① 説明文、② 写真、③ 絵図、④ 地図、⑤ その他
5. 水利遺構について
 - 1) 水路形状：
 - 2) 分水口の形状：
 - 3) その他の現存するもの：
6. 水利施設に関連する造形物
 - 1) 盛土、切土の形状：
 - 2) 橋（親橋など含む）：
 - 3) 各種の案内板、石柱：
 - 4) アクセス用の小径：
7. 水利施設と関連していた風景の構成要素（囲う）
 - 1) 生活と結びついていた利用形態
 - ① 共同洗い場、② 庭池用、③ 防火用、④ その他
 - 2) 生産業用と結びついていた利用形態
 - ① 稲作、② 養魚用、③ その他
 - 3) 街道の形成要素となる
 - ① 石垣、② 高木樹、③ 古い街並、④ 古民家
 - 4) 水利施設と結びついていた祈りの造形
 - ① 水神、② 稲荷、③ 地藏尊、④ 庚申塔、⑤ その他
8. 現地調査で知り得た情報（個条書で書ききれないときは別紙）
 - 1)
 - 2)
 - 3)
9. その他、情報、資料について

6 章 水利遺構地の現地調査まとめ

- この章は、1 章で示した目的と方法を踏まえ、2 章から 5 章までの目次項目ごとの作業を実施し、水利遺構地の現地調査時に必要な情報・資料を収集した。
- そして、前章で示した水利遺構地調査実施を 15 箇所定めて調査を実施した成果をとりまとめたものである。
- これに加え、1 次分水路（桐ヶ谷分水、戸越分水、大井分水）に流路沿いに残る「面影」を見出し、写真で記録したものを「面影」マップとして作成し、ここに添付している。

1 節 水利遺構地の現地調査記録

A. 現地調査した「水利遺構地の案内図」

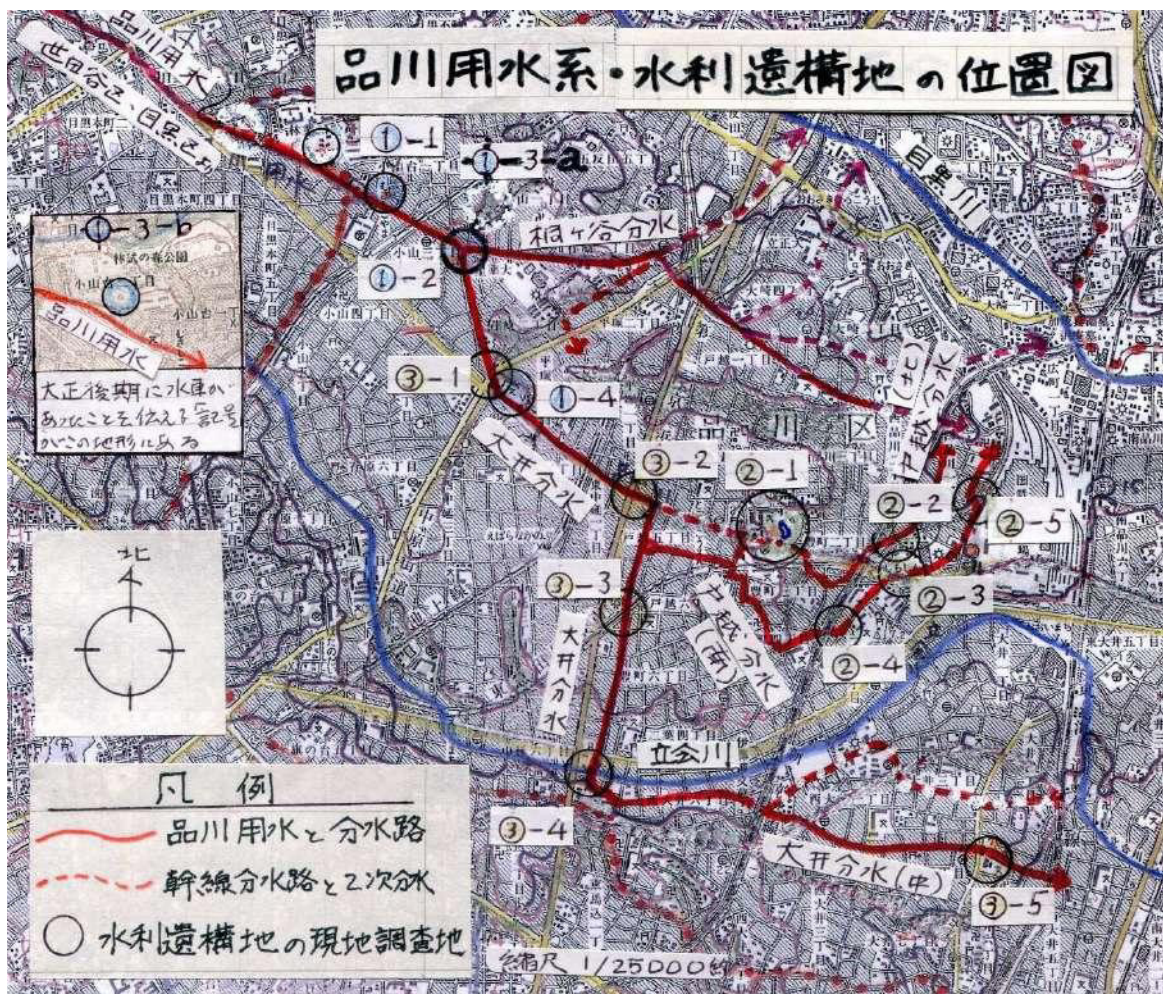


図 6-1 水利遺構地案内図

- | | | |
|---------------|---------------|----------------|
| ① 品川用水・桐ヶ谷分水 | ② 戸越分水系 | ③ 大井分水系 |
| ① 猿橋庚申塔 | ① 戸越公園 | ① 平塚橋交叉点 |
| ② 朝日地蔵の辻・分水口 | ② 下神明ガイド下の水路 | ② 水面が見える水路風景 |
| ③ 水車を動かしていた水路 | ③ 古戸越橋 | ③ 大井分水路跡 |
| ④ 京陽小学校横の水路 | ④ 鬼門除け地蔵堂前の水路 | ④ 大井の掛渡井 |
| | ⑤ 階段下の水路 | ⑤ 鹿島神社「恵澤潤治の碑」 |

2節 水系ごとの解説

① 品川用水一桐ヶ谷水系と面影ポイント案内図

1

猿橋庚申塔の前を流れる品川用水路

- 庚申堂のそばを用水が流れ、橋が架けられていたため、「お猿橋庚申堂」と呼ばれています。1674年に旧戸越村槍ヶ崎の集落十数戸の人々の庚申講によって建てられました。現在は講も絶え、地域の人々の暖かい庇護により管理されています。
- お猿橋庚申堂の高札に「旧戸越村槍ヶ崎の集落の人々」とあるが、現在西品川3丁目にも『鎗ヶ崎公園』があるので関係を調べました。大正12年の地図では、「大字戸越村槍ヶ崎」(小山台1～2丁目付近)と「大字南品川南三木鎗ヶ崎」(西品川3丁目付近)の表示があり、どちらも、地形が槍の穂先のようにつきでているところから地名となったようで、特に関連はないようです。昭和7年に東京市に編入(品川区・荏原区)された際『槍(鎗)ヶ崎』の地名はなくなりました。地名の移り変わりに歴史が感じられます。



写真-3 小山台1丁目庚申堂

- ・「お猿橋」の名を残す
- ・すぐそばを品川用水が流れていた
- ・由来文中に品川用水との関係が記されています

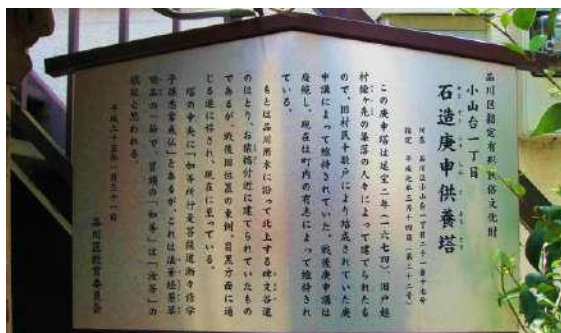


写真-1 「石造庚申供養塔」由来文



写真-2 石造庚申供養塔



図-1 現在の地図(住宅地図)

※本章の現在地図については 1/1500 を使用する。

2

- 1 朝日地蔵の辻・分水口

○地蔵の辻(小山2丁目) 名前の通り

「朝日地蔵尊」がそばにあり、大井村・桐ヶ谷村の分岐点のためこの名前があります。 この辺りは農業用水として使われ、水量もかなりありました。現在は、ほとんど面影はありませんが曲がった道、清められた「朝日地蔵尊」に当時の 形跡が偲べれます。



写真-1 朝日地蔵ノ辻 (朝日地蔵尊)



写真-3 「朝日地蔵尊」の由来文

解説文

寛政元年(1789)目黒道と碑文谷道との交差点に建てられた高さ約1メートルの道標で、江戸時代多数の参詣人を集めた目黒不動尊と、碑文谷仁王尊への行先を示したものである。造立者は江戸の商人や職人たちで、願主は即應である。

昭和 31 年道路改修のため僅かながら移動され、左右方向が反対になった。

なお堂内左奥にある小さな道標は、明治 34 年に建てられた摩耶寺への案内である。



写真-2 朝日地蔵ノ辻一品川用水分水口の江戸時代のものを模型で表している
実物は品川歴史館に展示されている

2

- 2 朝日地蔵の辻・分水口



写真-4 地蔵の辻ー品川領内に入った品川用水はここで桐ヶ谷村方面と下蛇窪村方面に分かれた



写真-5 朝日地蔵尊

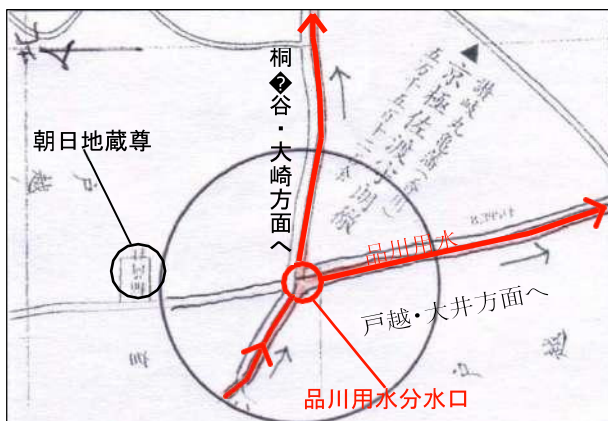


図-1 古地図（朝日地蔵ノ辻付近の図）



写真-6 品川用水分水口あたりから桐ヶ谷方面をみる

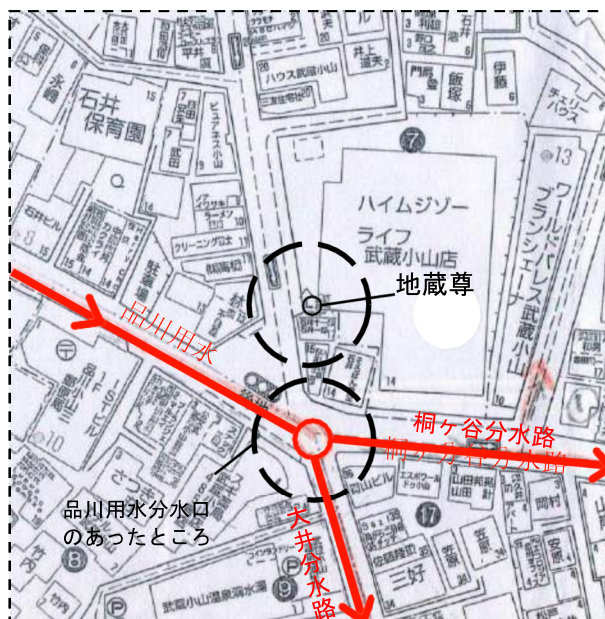


図-2 現在の地図(住宅地図) 品川用水分水口と朝日地蔵尊の案内図

※本章の現在地図については 1/1500 を使用する。

3

水車を動かしていた水路

- 後地小学校の方への分水は、かなりの急流で水量も多く、また、明治の末には、この辺りに水車がありました。
- 昭和初期にはドブ川になっていて、戦争中にはここに堰を造って、空襲警報が鳴ると水をため、消火に使いました。
- 地蔵の辻の後地小学校付近の分水は水量もかなり多く、明治の末には水車がありました。戦時中はここに堰を造り、防水用水として大いに役立ちました。
- 水車がこの地点にあったとしたのは、次の理由にもとづいています。
 - 1) 「品川用水－溜池から用水へ」59 ページに「後地小学校の方への分水は、かなりの急流で水量も多く、明治の末にはこの辺りに水車がありました」
 - 2) 後地の交差点に住んでいる人に尋ね確認ができた。
 - 3) 水車が小山台2丁目にもあったことを伝える記号が古地図にあるので「水利遺構地案内図」に示した。

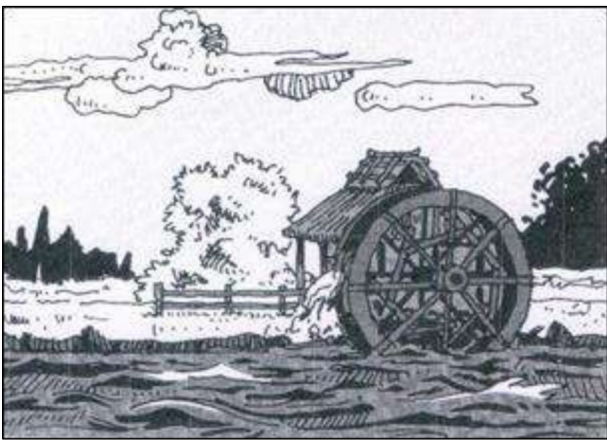


図-1 後地水車の想像図

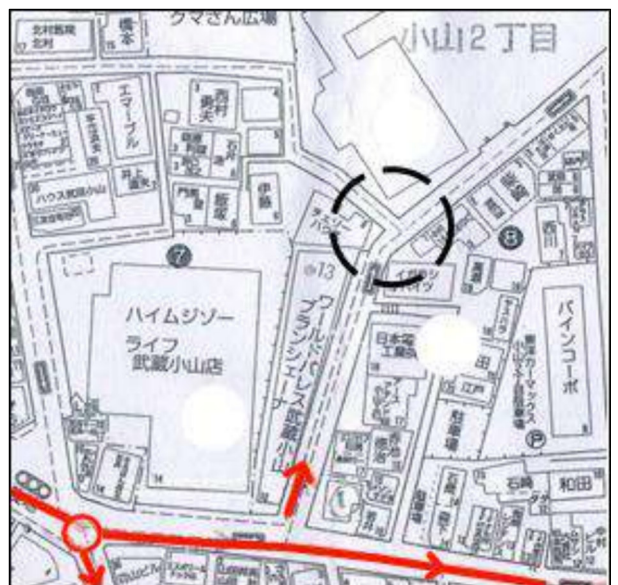
写真-1 後地水車のモニュメント
(あさひ公園内にあります)写真-2 後地水車跡付近 1
(小川米店－後地水車跡とある)写真-3 後地水車跡付近 2
(近隣の方の話では小川米店の向側の
この辺に水車があったとのこと)

図-2 現在の地図(住宅地図)

※本章の現在地図については 1/1500 を使用する。

4

-1 京陽小学校横を流れていた品川用水

- 明治時代、京陽小学校は旧中原街道に面した平塚橋の側にあり、校庭の脇を用水が流れていました。
- この絵図を最初に見たとき品川用水路だと思った。(図 4-2)絵図の下に「明治 11 年の開校当時の京陽小学校の様子ー右側に品川用水が描かれている」と記されている。
- 品川観光マップをひろげ所在地を探すと平塚 3 丁目にあった。この地には品川用水が通っていないため、近隣の人に尋ねると「平塚橋の近くに移った」と言われた。
- 明治期に印刷された古地図を見ると平塚橋交差点そばに「京陽学校(小学校)」と記されていました。(図 4-1)
- 住宅地図と絵図を抛りどころにして、小学校の正門の位置と品川用水路の流路を想像して写真(写真 4-1, 4-2)を撮った。
- 図 4-2 は絵図、まわりの字は筆者が記したものです。
- この絵図は、明治期の品川用水路の風景を伝える貴重なものです。

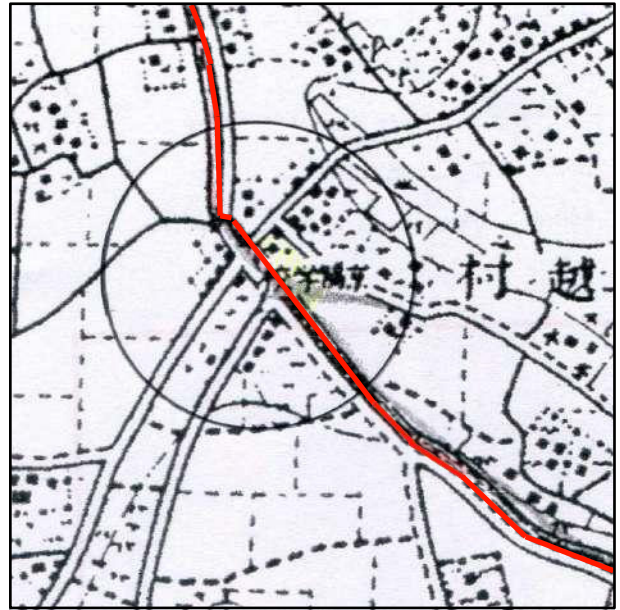


図 4-1 京陽小学校がかかっている
古地図 明治 14 年測 (8-1 荏原) より



写真 4-1 中原街道北側から小学校正門辺り

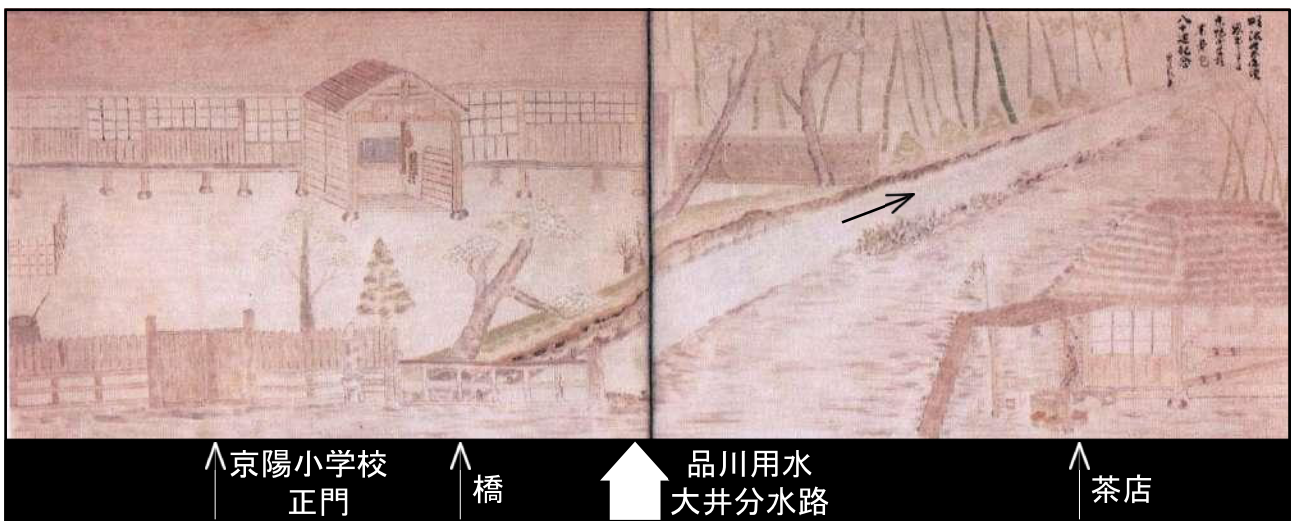


図 4-2 京陽小学校横を品川用水路の風景 (京陽小学校所蔵)

4

-2 京陽小学校横を流っていた品川用水



写真 4-2 旧京陽小学校跡地横から戸越・大井方面を見る右には「平塚橋の碑」

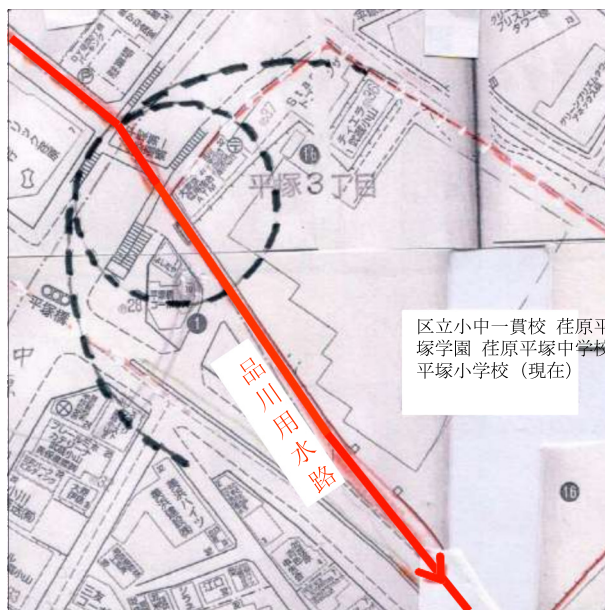


図 4-3 現在の地図(住宅地図) この地には明治時代京陽小学校があり、その西側には品川用水(大井分水路)が流れていた。

※本章の現在地図については 1/1500 を使用する。



5

—1 面影ポイント — 品川用水幹線水路



①

猿橋庚申塔 この近くを品川用水は流れている。



③

後地小学校の近くにあった「水車」の方向、よく見ると水車跡の面影が見え隠れする。



②

品川用水分水口があったところ



5

—2 面影ポイント — 桐ヶ谷分水路



朝日地藏尊の辻から桐ヶ谷方向の風景



旧中原街道分水口から荏原2丁目方面の風景



荏原への分水 荏原1丁目一右は旧中原街道



大崎方面の風景 大崎2丁目一百反通り



② 戸越分水系と面影ポイント案内図

1

戸越公園の池水

1) うつりかわり

品川台地の分水嶺の東先端部で、手指を広げた端部に現在の戸越公園は位置しており、品川用水の分水を取り入れやすい位置にある。

戸越公園は、寛文2年(1662)、肥後熊本藩主細川越中守が、品川領の戸越、蛇窪村の4万5000坪拝領してつくった屋敷がはじまりである。

細川家はここに東海道五十三次風景を表した庭園を造り、玉川上水の分水たる品川用水(初期は仙川用水)から水を引く工事をして池を潤した。

この屋敷は、天明四年(1784)、曾根屋敷にかわって以来、茶人として知られた松江藩主や、羽前上、山藩主、隠岐守の屋敷などにかわっていった。

明治以降は、久松伯爵邸、吉井伯爵邸、彫刻家瑞詳邸へとかわり、明治二三年(1890)三井家屋敷となった。三井家はこの印の隣接地を買収し、昭和七年(1932)には、戸越小学校並びに、公園用地の一部として荏原町に寄付した。これが東京、市に引き継がれ昭和十年(1935)東京市立の戸越公園として発足した。

2) 公園のあらまし

戸越公園は廻遊式庭園となっており、敷地の中央部に池を掘り、その土で背景の築山をつくり、地形を活用して丘陵を築くとともに溪谷をかたちづくり、その一角に滝をかけるという配置を形成させている。開園にあたっては、大名庭園様式を重んじて加工されたので、当初は昔の面影をよく伝えているといわれていた。

現在は、品川区立の公園(区指定文化財)となり、改造の手が加えられているものの、なお往時の景観をしのばせる風格を残している。

3) 地形特性を活用した池空間

中央の池のほつりを歩むと、水辺のほとりの築山に囲まれた江戸時代の風格ある庭園にまねき入れられる。この江戸時代中期に完成したといわれている水辺を核にした庭園空間の構成をさぐるため、ここでは、谷戸状となっている地形特性と池空間の形状を各年代に表現されている地図を収集し解読してみた。入手した地図を古い年代から近年に至る7面を一眺できるように並べて、屋敷内の池(赤線部が池)の位置と形状に視点あてて観察した。

その方法としては、屋敷内には、等高線20メートルが表記されている。③の迅速図を抛り所にした。他の図はこの20メートルのラインがあるものとみなして観察した。

その結果、各地図に表記された主な池は、この20メートルの等高線内に入っていることがわかった。この谷戸状空間は、北西面には、品川用水路が、流下しており、湧水など水源が得やすく、排水の便も容易であったことから、敷地の主が変わっても、谷戸庭園の基本型を大きく変えることなく受け継がれてきたのであろう。

品川用水を引き込んで作り上げられた池空間には、江戸庭園の遺構がいたるところに散りばめられて残っている。

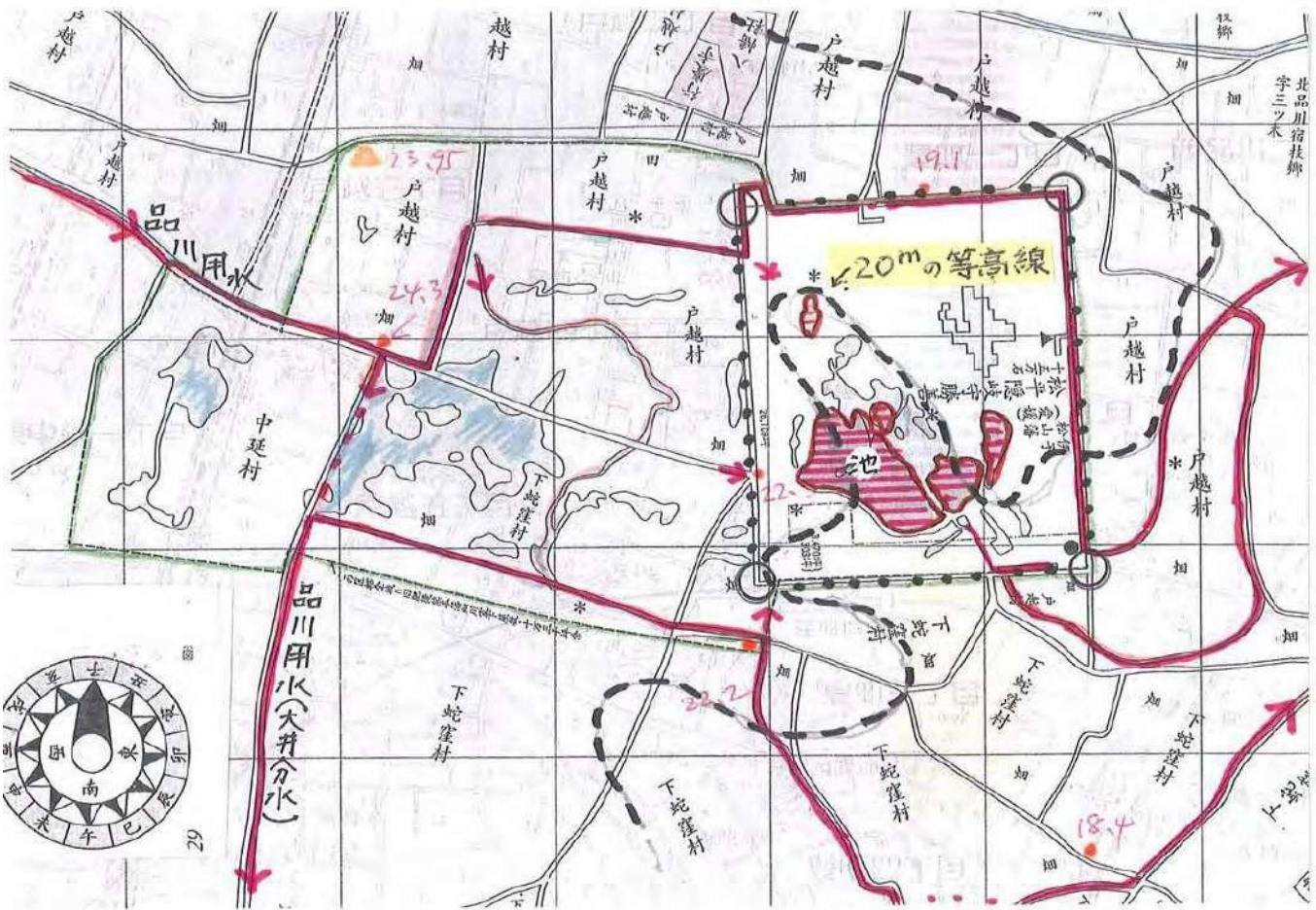


図 1-1 江戸時代工期 地図

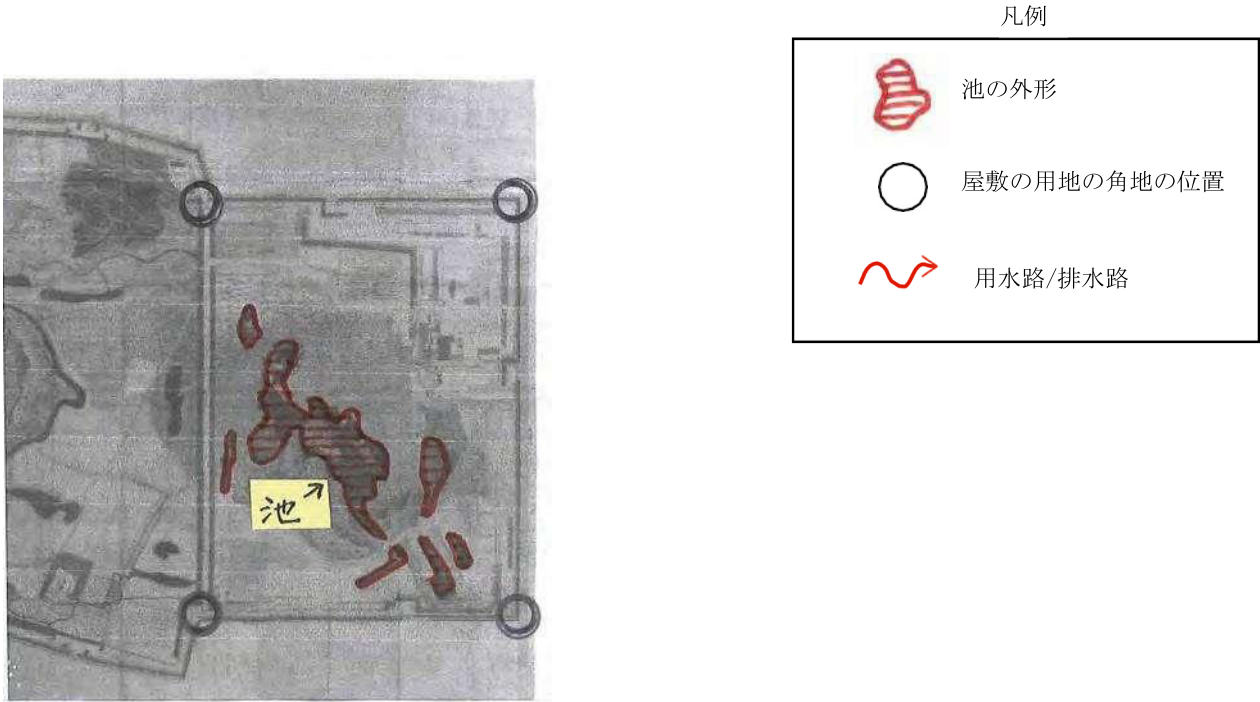


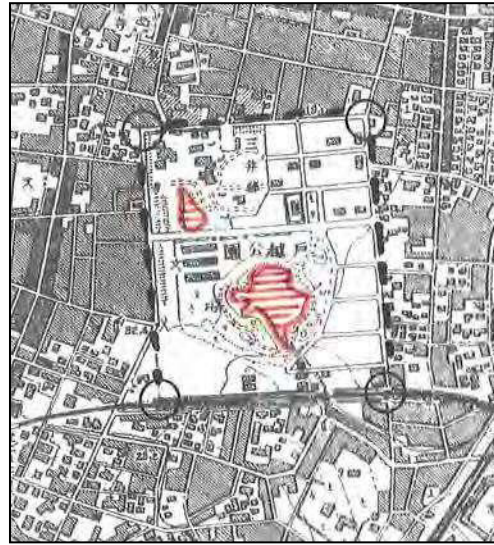
図 1-2 寛文 11 年 (1670 年) の絵図



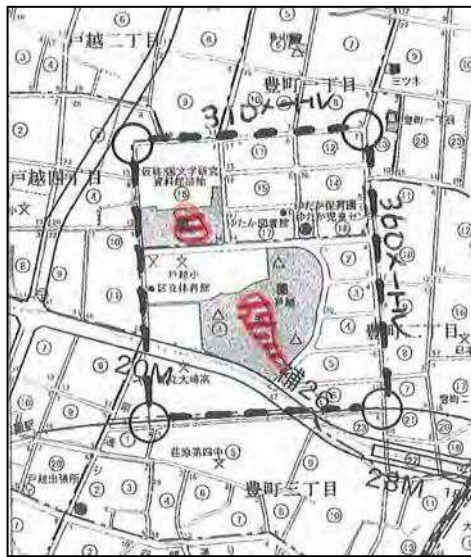
図 1-3 明治 14 年 迅測図 縮尺 1/10,000



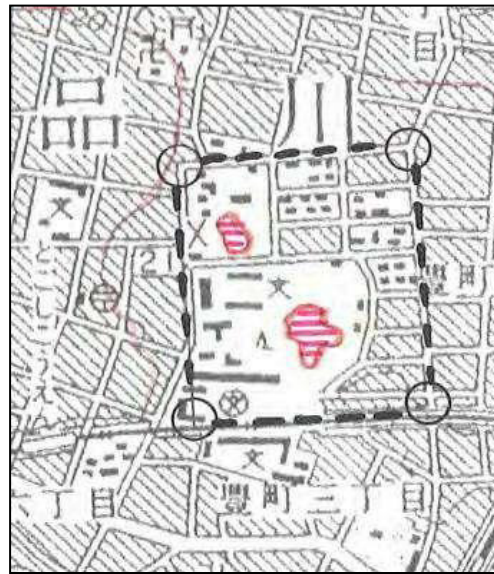
a. 昭和20年（部修）地形図



b. 昭和12年（部修）地形図

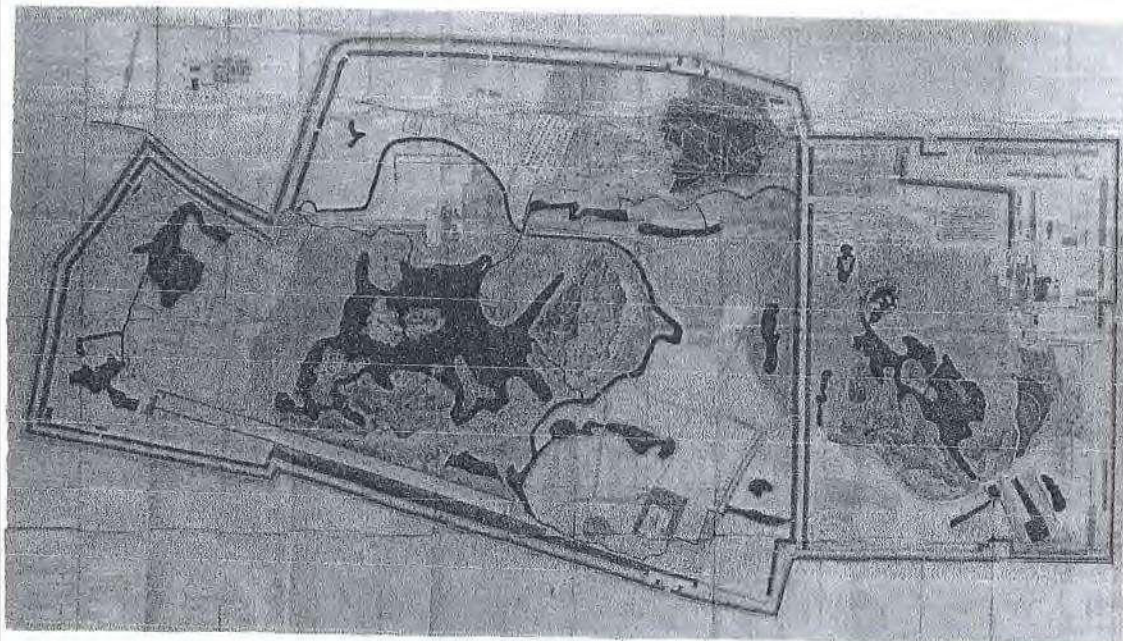


c. 平成前期(2015) 品川管内 縮尺 1/10,000



d. 昭和中期 地形図

図1-4 年代ごとの池の位置と形状を示す図



▲熊本藩戸越屋敷の図（「寛文拾壹年十月三日出来戸越御屋敷惣御絵図」財団法人永青文庫所蔵）

熊本藩の戸越屋敷絵図

寛文11年（1671）の「戸越御屋敷惣御絵図」は広大な戸越屋敷の全貌を示したものである。当時流行した大規模な庭園と瀟洒な趣の数寄屋造りが特徴である。この図によれば、敷地は中央を南北に走る馬場によって東西に二分されている。東側の庭園には、北東部に御殿群が設けられ、これらの御殿から眺められるように南西部に築山や園池が配されている。図面では、十一重塔や蓬莱島、池中に茶屋も見ることができる。このあたりは現在の戸越公園の敷地と重なり、今も面影の一部を伝えている。また、花畑西側の池は、旧国文学研究資料館内の池にあたる。御殿は長屋2棟、作事小屋、馬場からなり、家臣が常駐する場所はなく、留守居役と番人がいるほか普段は空屋敷だったようである。

一方、西側の庭園は東側の2倍以上の広さがあり、中央に琵琶湖を想定した広大な御泉水を掘り、



▲戸越屋敷内東側御殿の図

南に富士山、東に筑波山を模した山を築き、周囲に芝地、田畑、花畑を配している。北側の「新御茶屋」を中心にして、庭園を廻る小路と、各所に休憩のための小さな茶屋が設けられ、散策を目的とした回遊式庭園に造られているところが特徴である。また、乗馬や舟遊びも楽しめ、一日中散策しても飽きることがないほど広大な庭園であったことが窺える。同じ熊本藩の熊本市郊外にある水前寺庭園も同様の様式で造られている。



写真 1-1

調査は夏場の時期で、子どもたちが水遊びに熱中していた。高低差があり、この場所が水を呼び込みやすい地形であることが分かる。



写真 1-2

当時の大名庭園のような趣ある護岸となっており、都心とは思えない、豊かな水辺空間が現存している。



写真 1-3

写真右奥から流れ落ちる水。水道が風道となり、心地良い風が、緑の下を通りぬけている。



写真 1-4

写真奥が、用水取水口辺りである。高所となっており、水が段々に落ち、鍮水を抜け、池へと流れてゆく。この構図は、藩主の時代より継承している。



写真 1-5
藩主の頃の庭園のような趣を今に残す池とその周辺景観。



写真 1-6
現在は、公園として整備され、市民の憩いの場となっている。



写真 1-7
現在は、東屋などが整備され、日本庭園の要素を残した公園として整備されている。池には鯉やカメが住んでいる。



写真 1-8
かつては、多摩川の水が品川のこの地、この庭園まで水路を通り流れていたことを考えると、なんとも贅沢な庭園であらうかと思う。

2

－ 1 下神明駅ガードレール下の水路

- ・この写真(写真 2-1)を手にした時、左下に見える「水路」品川用水の水路、戸越公園の雨水排水を流す水路であるとみた。
- ・この写真のコメントには「昭和 30 年の下神明。駅近くのガード下の風景。まだ、ドブ川にフタはされていない」と記されている。
- ・各種の地図を見て、この写真の位置は、下神明駅ガード下を流下する戸越分水路(南流)であると推測した。
- ・水路規模は幅員約 2.0 メートル、深さ 1.2 メートル、流量は不明。
- ・この写真の撮影地点に立って写したものを紙面に入れた。
- ・水路遺構はないか、さがしまわったが、のこされていないが、撮影地点が見通した道路の線形が S 字状の歩道(下は排水路)になっている点が、水路跡の風景ではないか?と思った。



写真 2-1 下神明駅 ガード下を流れる戸越分水路(南)の風景

2

— 2



写真 2-1 下神明駅
ガード下を流れる戸越分水路（南）の風景



写真 2-2

左記写真（2-1）の場所より撮影した現在の風景。現在は、水路なく写真左側の水路は公園の歩道になっており、水路があった面影は全くない。しかし、当時と同じ道路形状と高架の存在が、当時の水路位置を私達に教えてくれている。

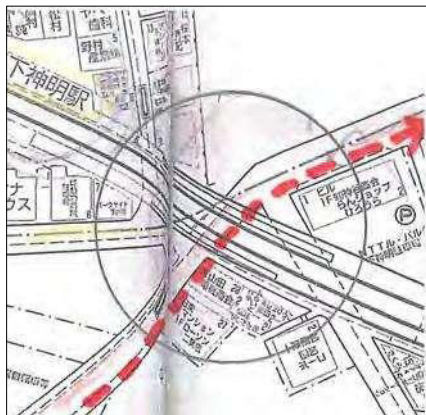


図 2-1 下神明駅下を流れていた 品川用水の水路（戸越分水路）加硫部から上流を向いて撮影したもの



写真 2-3 上記写真（2-2）撮影位置の後方を撮影した風景。写真の右側の歩道辺りを道路に沿って、水路が流れていたことになる。

3

－ 1 古戸越橋

西品川一丁目

- ・「古戸越橋」の様子は、品川区発行の書籍や歴史跡散歩の紹介文、パソコンのホームページなどで紹介されているのを見て水利施設であると予想していた。
- ・古戸越橋下を流下する水路の系統を調べてみると戸越公園の池水の排水機能も果たしているのではいかと思った。
- ・歴史をさかのぼれば、品川用水路の水を池水として溜め、下流にある水田に数百年間に渡って注いできた歴史をもつ水路といえる。
- ・この橋のある場所は、下神明駅(東急大井町線)の北側にあり、駅下を南北に通過している歩道と交差する水路に架かっている。
- ・写真 3-1 で見られるように、残っているのは、橋の欄干は、コンクリート造であるが、長い歴史を経ているため親柱などは、あちこち傷ついており、存在感がある。
- ・この地にありつづけた橋として駅前を行きかう人々に水辺空間小広場として親しまれてきており、歴史的な水利遺構地としての価値を発揮し続けている。



写真 3-1 古戸越橋のある位置

橋の欄干がかつて、ここに水路があった 面影を唯一伝えている。

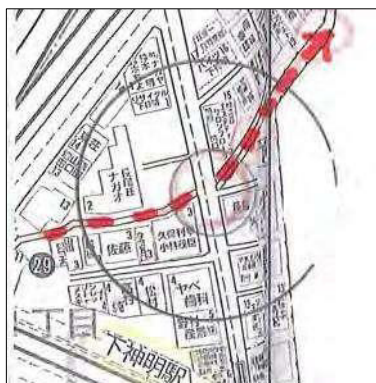
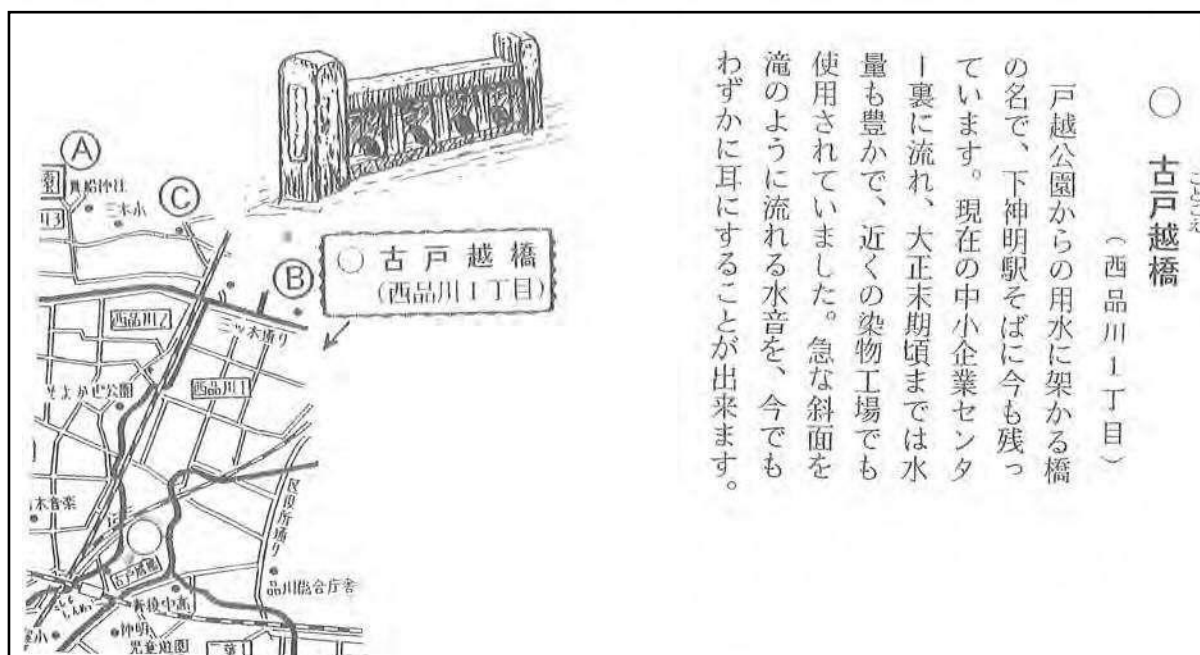


図 3-1 古戸越橋のある位置



資料 3-1 「古戸越橋」の事が説明されている文献



写真 3-2 上記写真 (3-1) の左側の風景

水路右側部分が小高く、高低差があることが分かる。水路が地形を匠に読みとり、つくられていることが読み取れる。



写真 3-3

上記写真 3-1 の右側の風景
民家の間を流れていた水路。当時は、生活と密接な関わりがあったことが想像できる。

4

- 1 鬼門除け地藏堂前の水路 二葉二丁目

- ・写真中央に児童が自転車をもっている。その後方に写っているのが水路(戸越分水路(南))であると見たので、調査地として取り上げた(資料4-1)
- ・写真に写っている水路上部には建物が見える。よく見ると「地藏堂」のようであった。
- ・この水利遺構地に入り、交番の人に写真を見せながら、地藏堂の前に用水路が通っていたと思いますが、知りませんかとたずねると、写真の児童をみつめ「この人なら筋向いの住宅にすんでいるが、今は昼寝中だよ」といわれた。
- ・「今、無理を言うわけにはいかないので、また次の日にきます」と言って交番をあとにして、地藏堂周辺の水利遺構物を探し回った。
- ・地藏堂前の道路は一部拡幅されているが、水路幅員から推測して暗渠化されたのではないかと考えた。
- ・資料4-1の説明文にあるように児童たちは近くの大間窪小学校の横を流れていた水路で様々な思い出を結びながら成長していったのであろう。



資料4-1



写真 4-1



写真 4-2 右写真の児童と同じ位置に代表渡部が立っている。
写真右側の茶系色の歩道あたりを用水が流れていた。

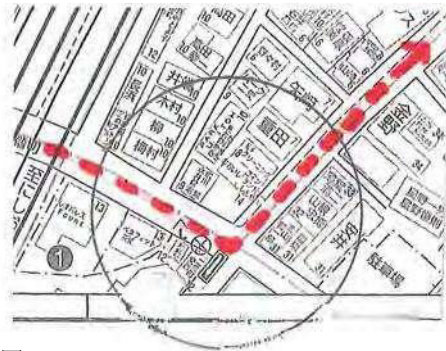


図 4-1
地蔵堂と水路の位置



写真 4-3 現在の御堂

資料 4-1 写真に
写る当時の御堂
と同じ姿であつ
た。



写真 4-4
水路は、写真の左側の茶系色の歩道側にあり、
写真奥の方へと流れていた。



写真 4-5
水路は御堂の前側を流れ、90° に曲がり右側の茶
系色の歩道あたりを流れていた。

5

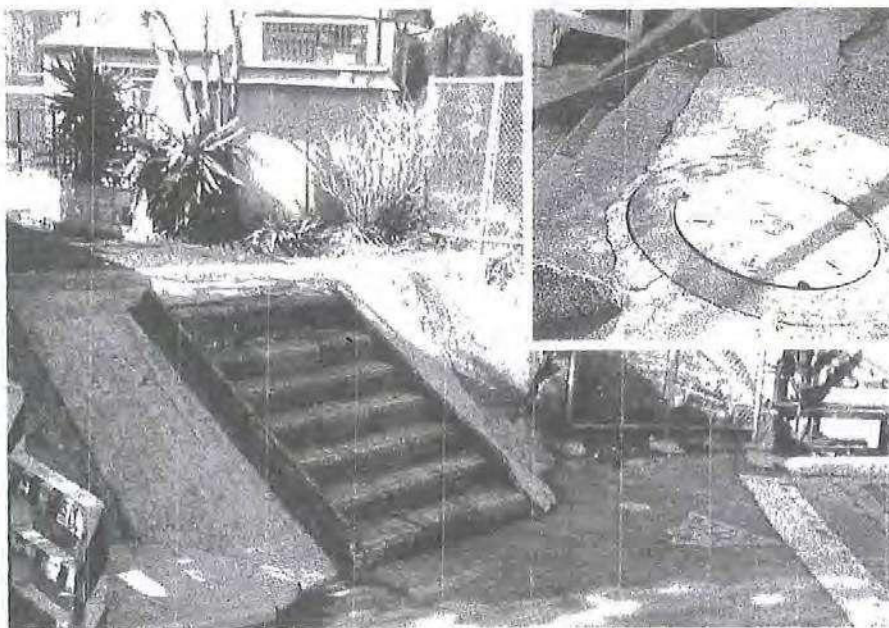
- 1 階段下の水路

西品川一丁目

- いくつかの書面で紹介された情報にもとづいて現地に入った。この地点は、品川用水の分水戸越分水路(南流)が、大井町線下を通り抜け中央公園内を流下し、横須賀線手前にある斜面を水路が流下する箇所にもうけられた「落差工」としてつくられた施設である。
- 水路はコンクリートで覆われており、歩道になっており、落差工の部分は階段(08 段位)になっている。
- 階段を上から下るとすぐ前に線路踏切がある。水路は線路下をくぐりぬけ「広町方向に流下してゆく。
- 目視できる遺構としては水路と一体化してつくられているコンクリート造の階段になる。
- 階段を下ると、マンホールがあり、水の流れ落ちる音が聞こえてくる。ひと休みして・・・といているようだ。

(品川区西品川 1 丁目20番)

品川区勤労者福祉会館の裏あたり、西品川 1 丁目20番付近は、用水が目黒川南側の水田に落ちてゆく水路で、急な斜面にそって、滝のようにゴウゴウと音を立てて、水が流れていました。現在は暗渠化されて細い路地になり、JRの線路に向かって急な階段が設けられ、階段の上のマンホールから、水がゴウゴウと流れる音が響いています。



西品川 1 丁目付近の品川用水旧水路一階段の上のマンホールからは水の流れ落ちる音が聞こえる。

資料 5-1

5

— 2

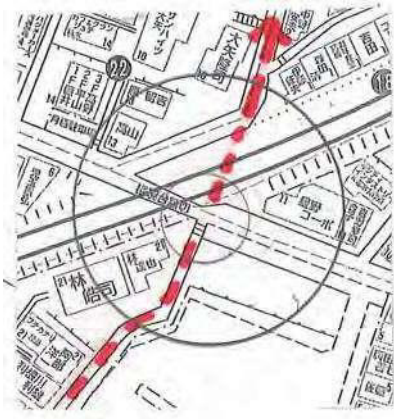


図 5-1 階段下の水路がある周辺地図



写真 5-1 現在の西品川 1 丁目 20 番の踏切と階段の風景



写真 5-2 現在の水路部分は幅の狭い道になっている。



写真 5-3 踏切とマンホール



写真 5-4 踏切の奥の小道へと水路は流れて行った。

6

戸越分水-面影ポイント案内

本調査では、戸越分水は、5か所の遺構を対象地とした。

本分水は、大名屋敷庭園の名残が色濃く残っている戸越公園などが存在する分水系である。

用水があった箇所を歩いてみると、複雑な高低差を匠に読み取り、上手に流水させていることが良くわかる。是非、歩いてみることをお勧めしたい。



①戸越公園の池水



②下神明駅ガードレール下の水路



③古戸越橋 西品川一丁目



④鬼門除け地藏堂前の水路 二葉二丁目



⑤階段下の水路 西品川一丁目



図6-1 戸越分水に残る「面影ポイント」案内図

③ 大井分水系と面影ポイント案内図

1 一 1 平塚橋下を通る大井分水路 平塚3丁目

- 品川用水が朝日地蔵の辻で2方向に分水され南流し大井方向に向かうのが、大井分水路である。
- この分水路が旧中原街道を交叉するところに架けられているのが「平塚橋」であった。
- 平塚橋と品川用水に関する解説文が橋の近くに標識として建てられていたのでその写真を参考にしていただきたい。
- 水利遺構の調査対象にしたのは、江戸時代から人の往来の多かった有名地点であったため、何らかの遺構が残されていると期待したからである。
- 筆者等は文献等に紹介された資料を事前に目を通していたので「石碑」の前に立ち碑文を拝し品川用水が品川地域を広く潤していたことに想いをはせた。
- 碑石の近くを探索してゆくと、分水路が分水嶺上に通されていることから、ビルの間にあっても眺望の良さを感じた。
- 平塚橋下を流れる大井分水路の規模を知るため古地図や「品川用水絵図」などを読みとった値を推定すると、およそ幅員は、1.4m・深さ1.2m前後であったと予想した。
- それ故、橋のスパンは小規模のものであったと思われる。
- 戦後、急速な都市化が進む中で、大井分水路もその影響をうけ、拡大する道路用地のなかに組み込まれており、遺構物を見い出すことはできなかった。

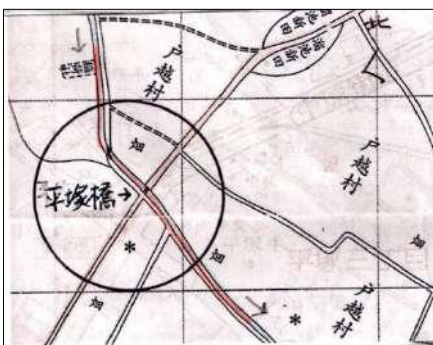


図 1-1

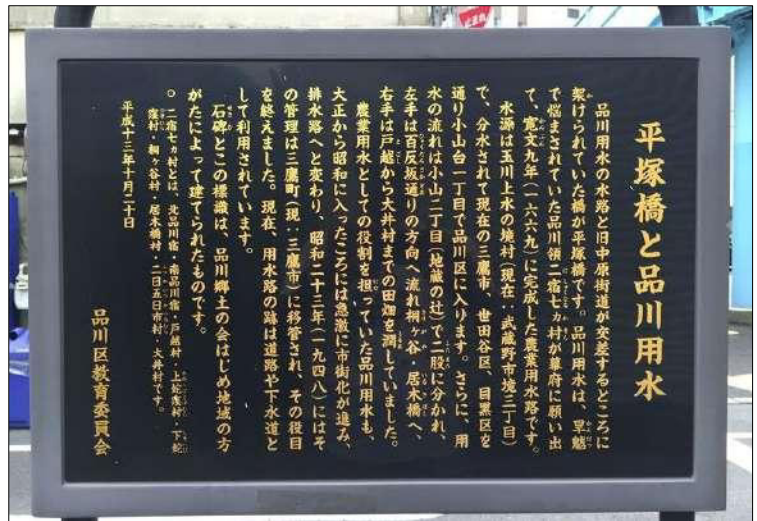


写真 1-1

平塚用水路・平塚橋の碑

平塚 3-16

品川用水と旧中原街道が交差するところに架けられた橋が平塚橋。平成13年に地域の有志により「平塚橋」の名を刻む石碑が平塚橋交差点近くの平塚中学校沿い歩道に建てられた。

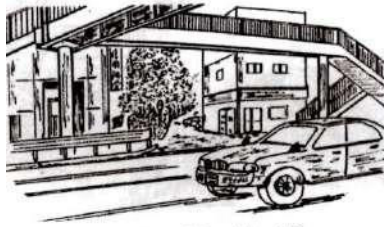


資料 1-1 平塚橋の碑

1

—2

拾った
子猫に
飲ませ
たりす
る、わ
んぱく
たちも
いたそ
うです



平塚橋付近

◎「平塚橋」の名の由来を語る碑
「品川郷土の会」の方々の努力により、交差点付近に建てる計画が進んでいます。この橋の付近では、60年程前までは大八車に野菜等を載せた人々が行き来していました。また近くにミルクプラントがあり、用水に流れ出る排乳をすくって、

資料 1-2



髭題目(参考)

◎ 平塚橋
旧中原街道が用水を渡る所に架けられた橋の名が残りました。牧場があり、牛馬が飼育され、牛乳工場もありました。中原街道(東海道の脇往還)は、江戸城虎之門から平塚市中原までの道でこの名前があり、旧道には髭題目が刻まれた石造墓碑が残っています。

資料 1-3



写真 1-5

石碑前が品川用水跡



写真 1-2

平塚橋の石碑



写真 1-3

歩道橋上から品川陽水跡を見た所



写真 1-4

歩道橋上から品川陽水下流を見下ろした所

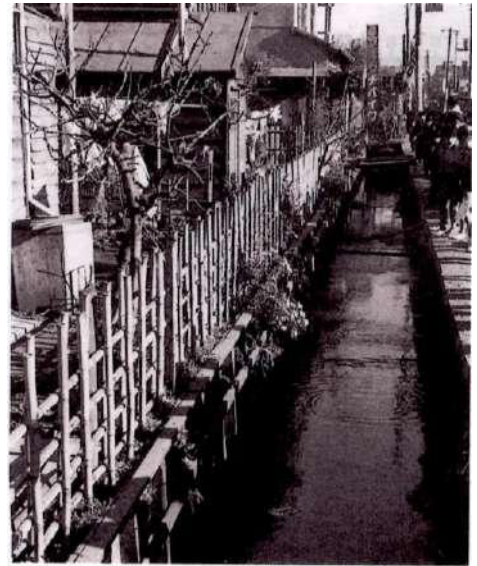
2

大井分水路の水面に集まる児童（品川用水の分流） 戸越3丁目

- この写真(写真2-1)のコメントには「暗渠になる直前の品川用水の様子—昭和36年、戸越3丁目付近」とある。
- この写真とコメントをよりどころにして、まず水路位置の確認作業を実施した。古地図、地形図(国土地理院発行)などから、おおまかにあたりをつけたあと、品川区教育委員会の人にたずね、戸越交番近くであることを確認した。
- この水路は品川用水の分水なので筆者は、流末が大井町方面に入ることから「大井分水」としてあつかうことにした。
- この写真の位置から約80メートル下がって流路を南方へ向かったあと、戸越分水—分水口へ至る。この写真の存在は、品川用水の分水の中で主幹的な役割を果たす大井分水であり、昭和中期の水路規模、水量、周辺の風景を知る上で貴重な情報源である。
- 児童たちの体格などから目測して、水路幅員は約0.9~1.0m、深さは水面まで0.6~0.7m、水深は0.1~0.2mと予想した。(流速は不明)
- この予想値をもとにして作図したのが図2-2である。
- 戦前の稲作が盛んであった時期は、流水量は写真の水面より高かったものとする。



写真2-1 戸越3丁目付近を流れる
品川用水の様子



暗渠になる直前の品川用水—戸越3丁目付近、昭和36年（山本肇氏撮影）

資料2-1 暗渠になる直前の品川用水



図2-2

品川用水—大井分水路の
断面図を書いた所

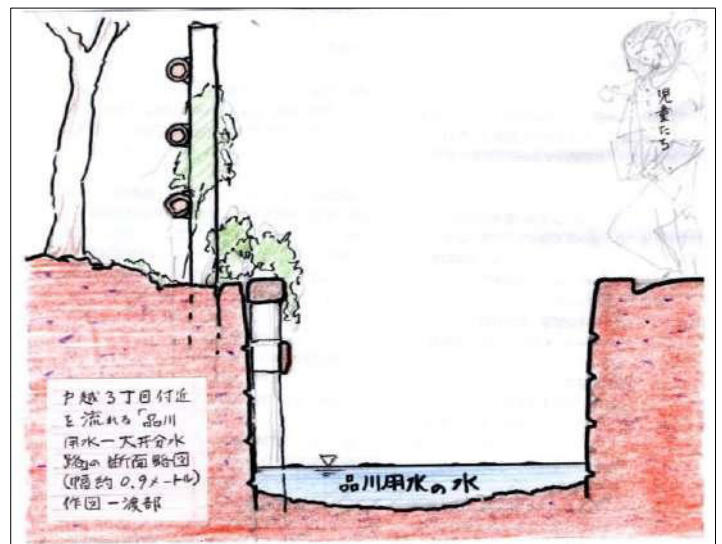


図2-2

図一渡部一二

3

水路が大井町線下を通る 戸越6丁目

- 大井分水路の断面形状が露出しているの
が見ることができるかもしれないという
期待はあった。昭和の中期に通された大
井町線の下をどのような構造で支えられ
ているのか興味があった。
- この水利遺構地点は、大原小学校西側を
通り、大井分水路(全部暗渠化されて道路
になっている)がゆるやかな勾配で南へ
下っている地点にある。(図 3-1 参照)
- 水路は、線路に対してほぼ直角に横から
水路断面を掘り込まれている。その幅員
は約 1.4m、深さはコンクリート版でふ
たされていたため水路内は不明。(写 3-2
参照)



写真 3-1

正面前方に大井町線が通っている。



写真 3-2

コンクリート橋の下を大井分水が通っていた。



図 3-1

用水路跡(大井町線下)

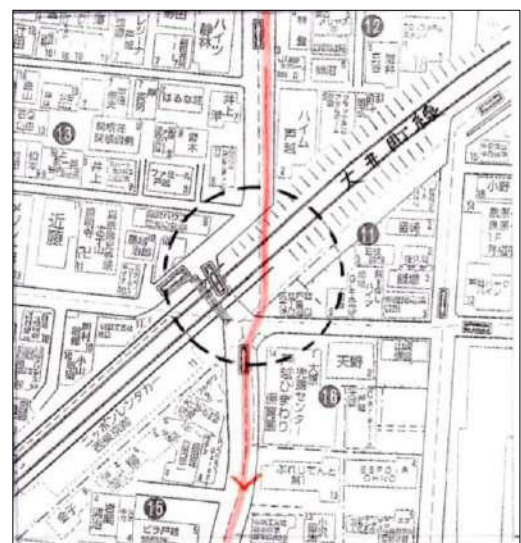


図 3-2

大井分水路遺構地の案内図

4

— 1 大井の掛渡井跡 二葉4丁目

- この遺構を選んだ理由は、参考図(図 4-1)の絵を目にした時からである。そして、なにか水利遺構が残っていないか期待した。
- この絵のコメントには「立会川に架けられたアーチ型の石造りの橋の上を品川用水は、立会川をわたってきました」とある。
- ここに語られる品川用水は、品川用水の分水である「大井分水路」のことであり、断面規模は上流部で戸越分水路に約 40%を分水していることからその分、細くなってこの地点に到達するので、この絵で見るほど大規模ではなかったのではないかと考えた。
- この掛渡井は、この石造りになる前は、おそらく木造で水路をつくり、これを支える構造は木材で柱をたて組んでいた時代が長く続いたのではないかと思った。

○大井村に入る地点の品川用水は、立会川に架けられたアーチ型の石造りの橋の上を流れ、立会川を渡っていました。これを大井村の掛渡井と言います。

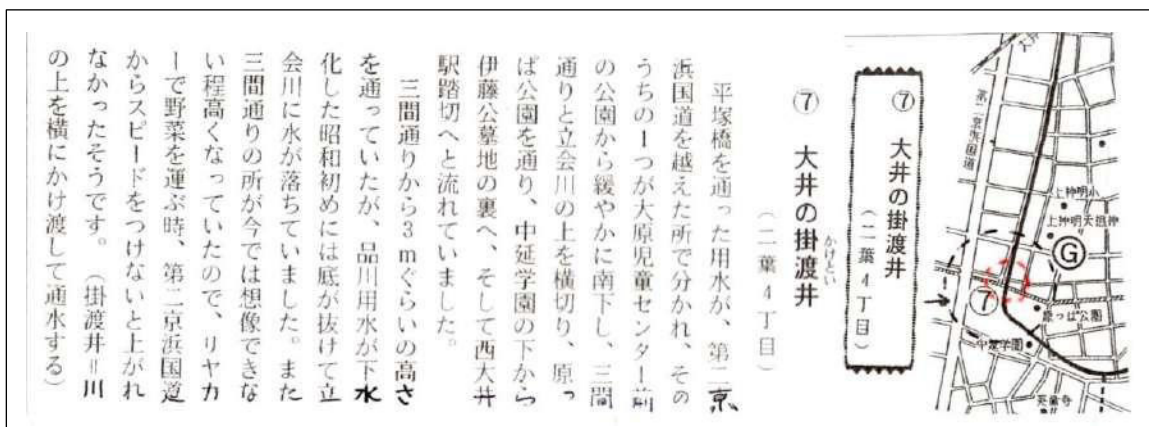


図 4-1

絵の上部を流れるのは品川用水(大井分水路)

下部の流れは立会川

- この掛渡井に水が流れていた時代の様子は参考文(資料 4-1 の文章)を見ていただきたい。
- この掛渡井のあった場所は、地図(図 4-2)に示しているが、上神明児童遊園横で、現在は立会道路になっている。
- 大井分水路の上部は歩道が通されている。この歩道を下ると目線下に立会道路(その下は立会川だった)、その奥方向に大井分水路の緑地がベルト状に延びている。(写真 4-1)
- 大井分水路と水が流れていた時代の立会川交差点に絵のような掛渡井をかけ合わせて連想を試みると、それらの面影が結ばれ見え隠れしてくる。貴重な水利遺構地といえよう。



資料 4-1

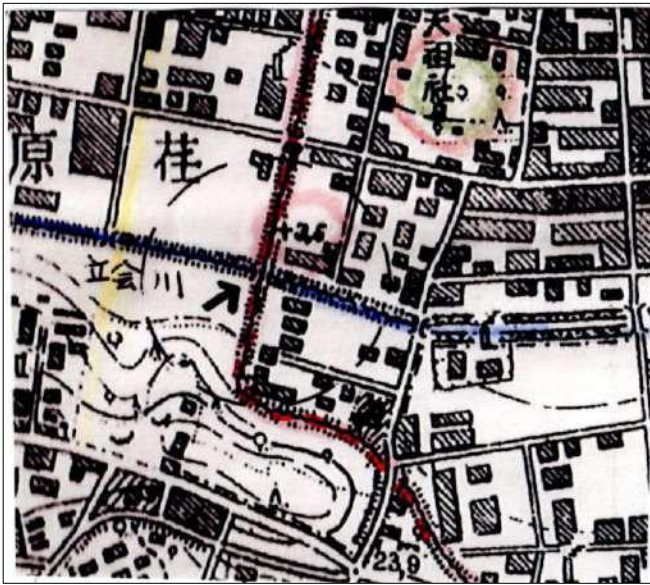


図 4-2

古地図(昭和 12 年版)に記されている
大井の掛渡井の位置

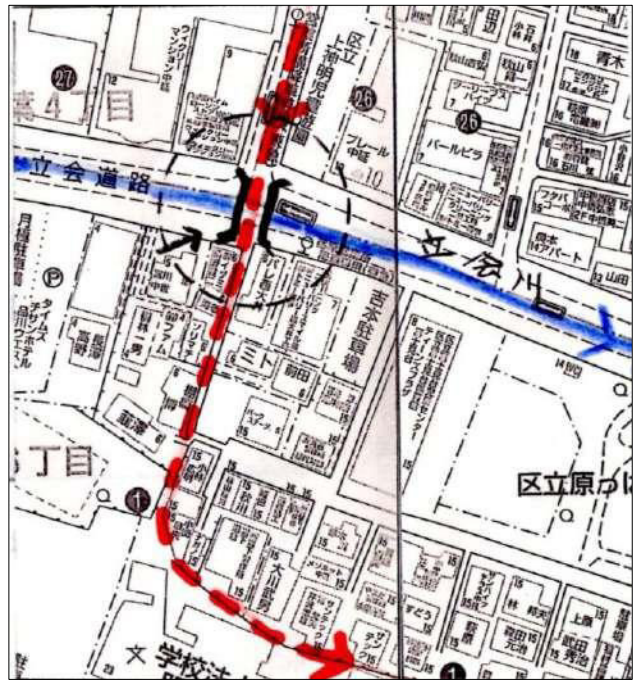


図 4-3

現在の地図



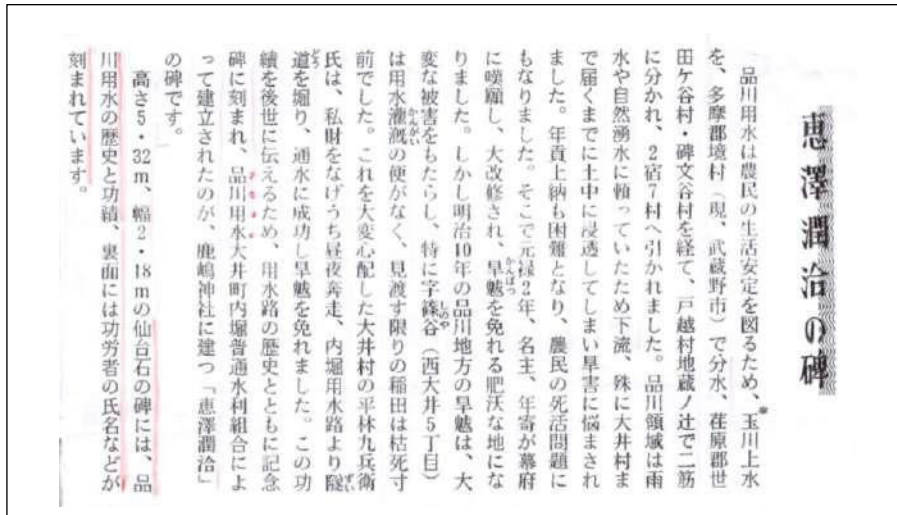
写真 4-1

掛渡井があったと考えられる地点から
大井分水の上流を見た風景



写真 4-2

掛渡井があったと考えられる地点から
大井分水の下流方向を見た風景



資料 5-1



写真 5-2 鹿島神社正面



資料 5-3



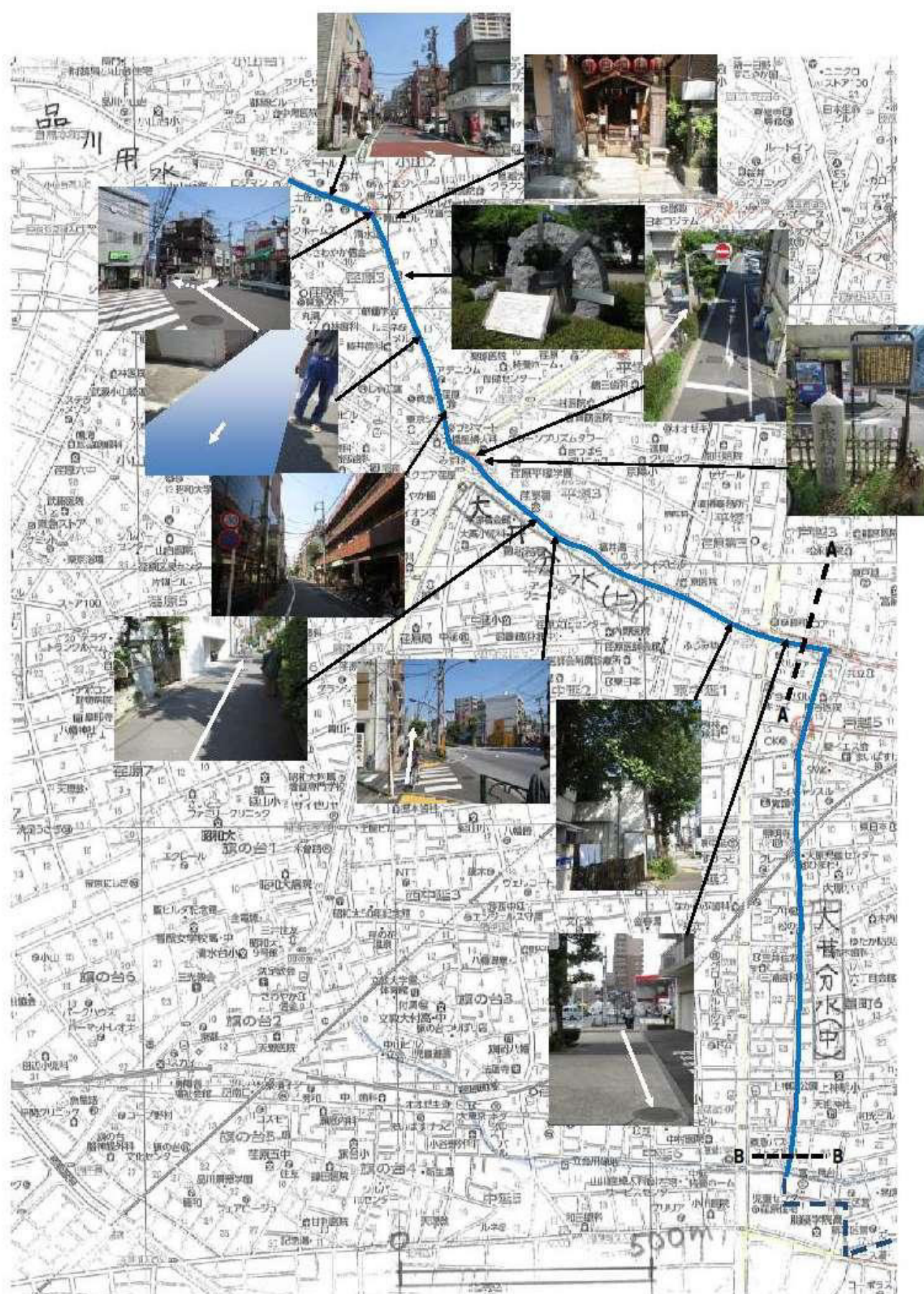
資料 5-2 鹿島神社



図 5-3

大井分水系水利遺構地の調査位置案内図

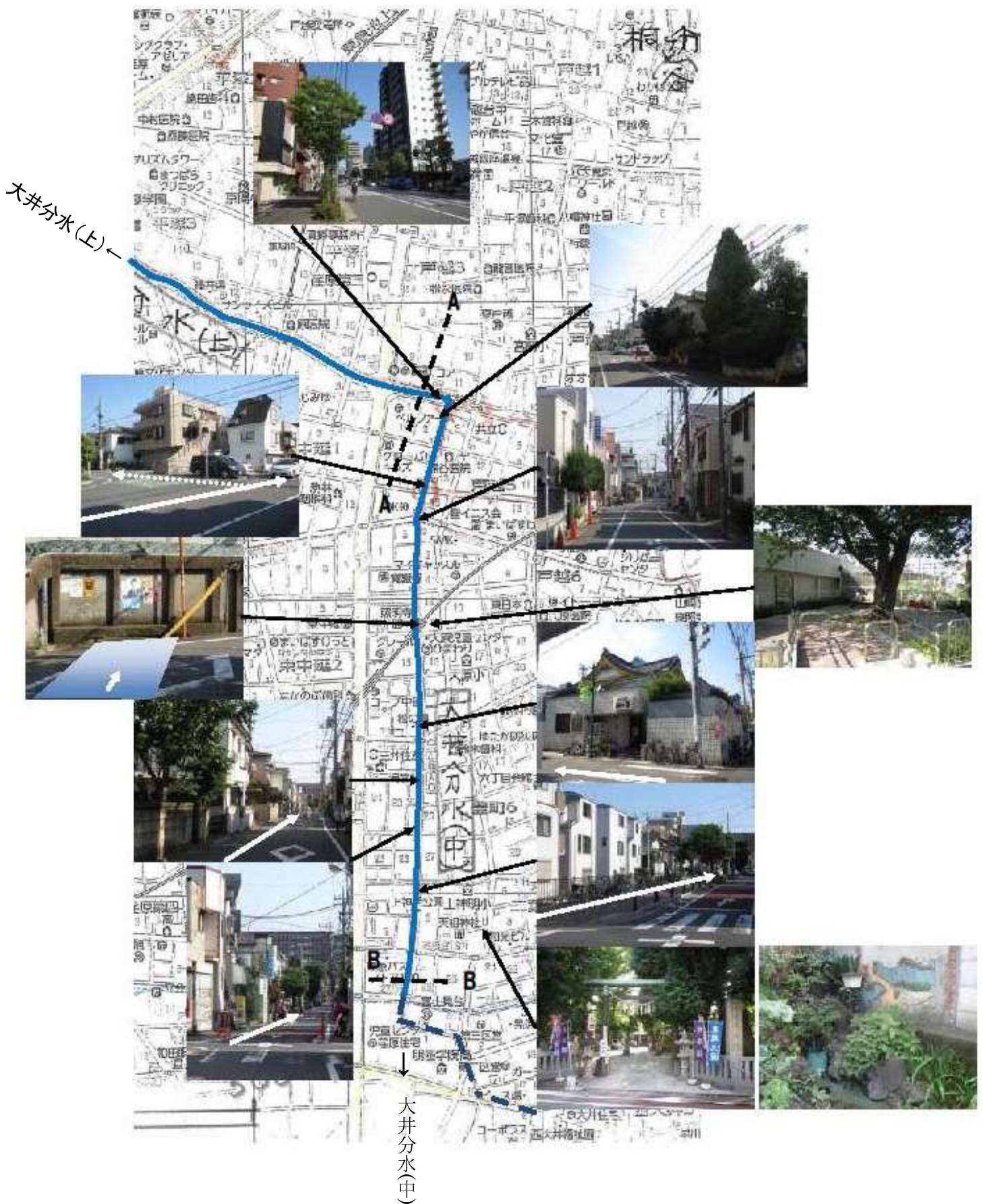
6 ー1 大井分水一面影ポイント案内図(1) (大井分水の面影が残っている所の写真です)



地図 6-1 大井分水(上)

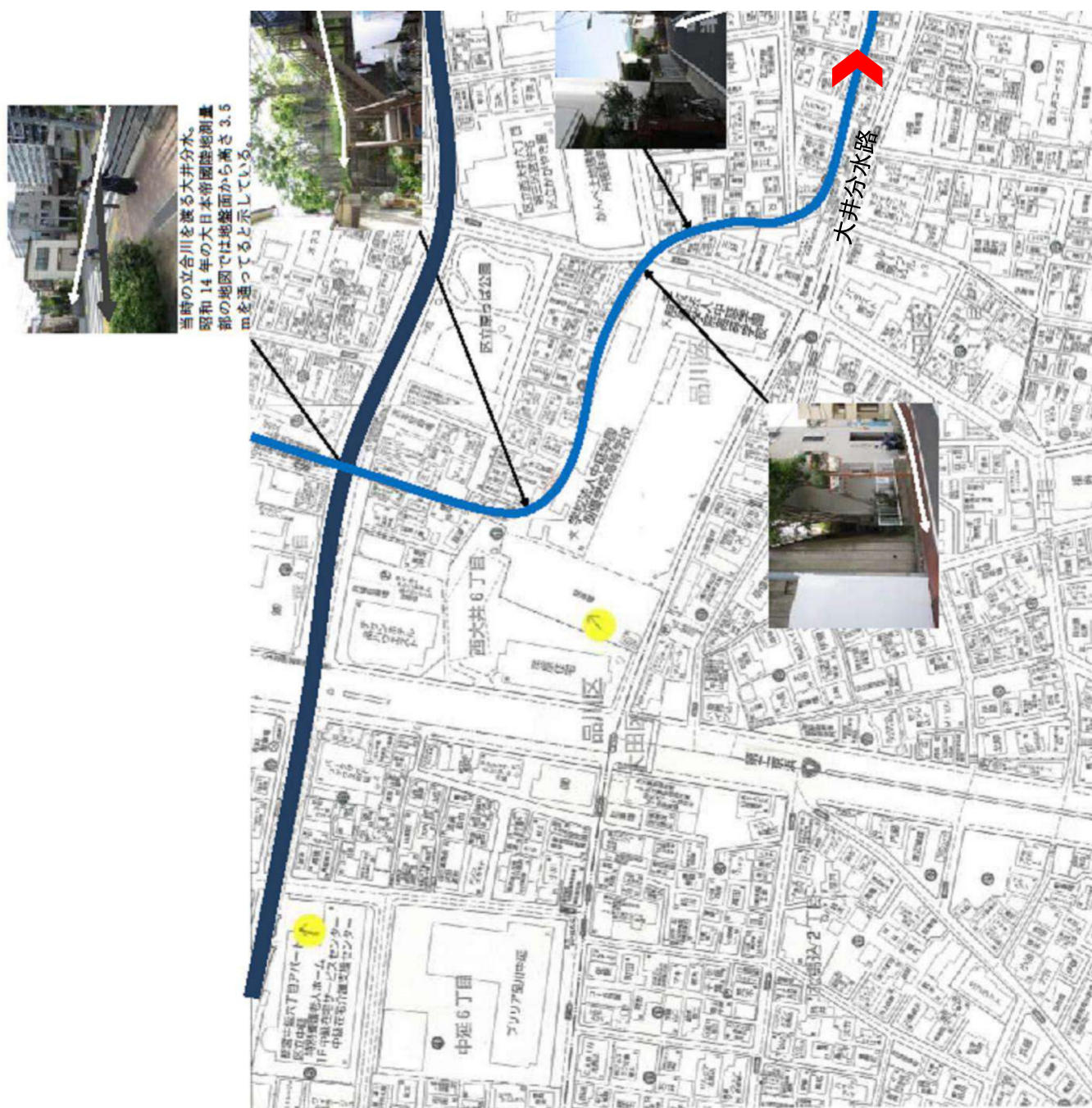
6

ー2 大井分水一面影ポイント案内図(2)

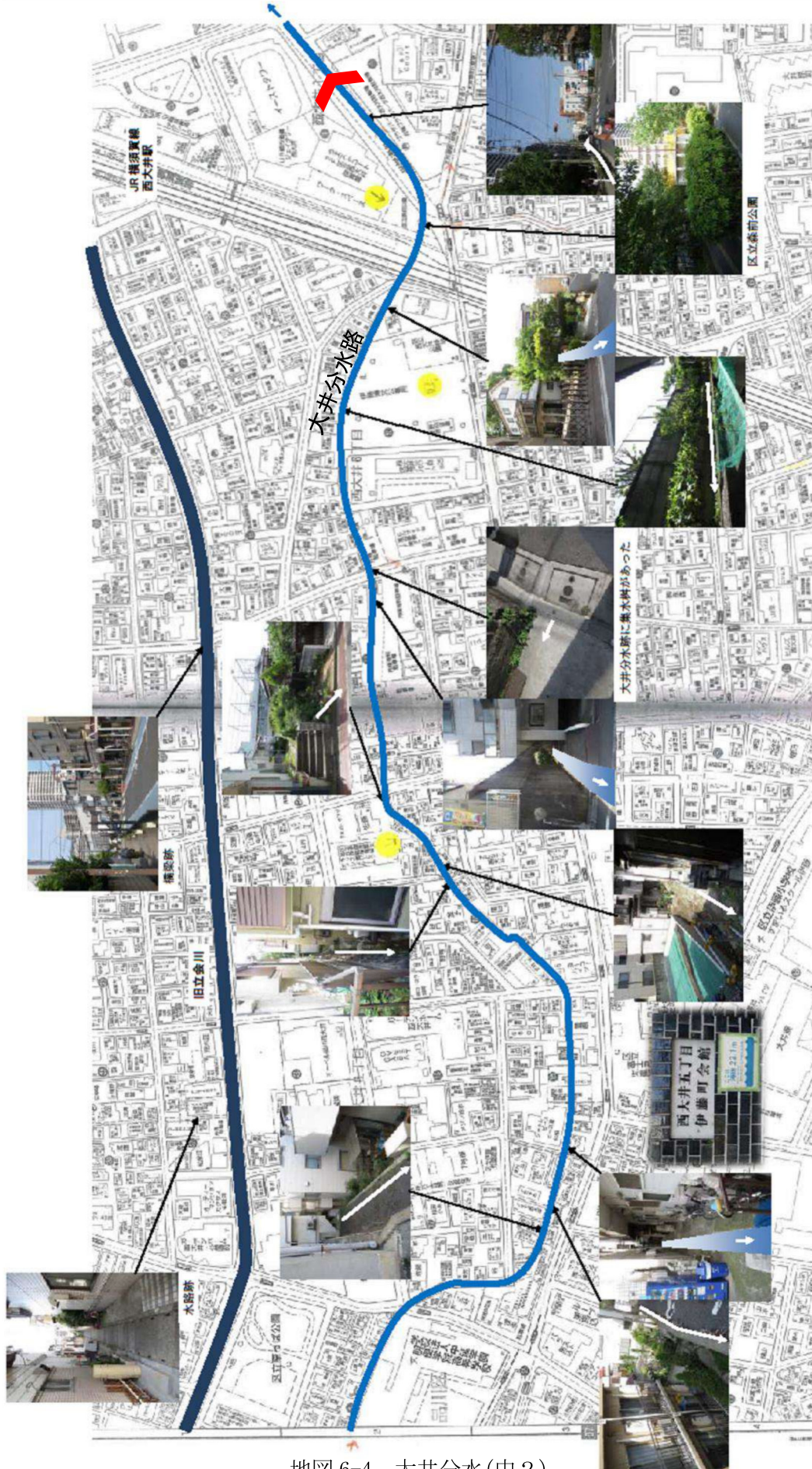


地図 6-2 大井分水(上～中)

—3 大井分水一面影ポイント案内図(3)



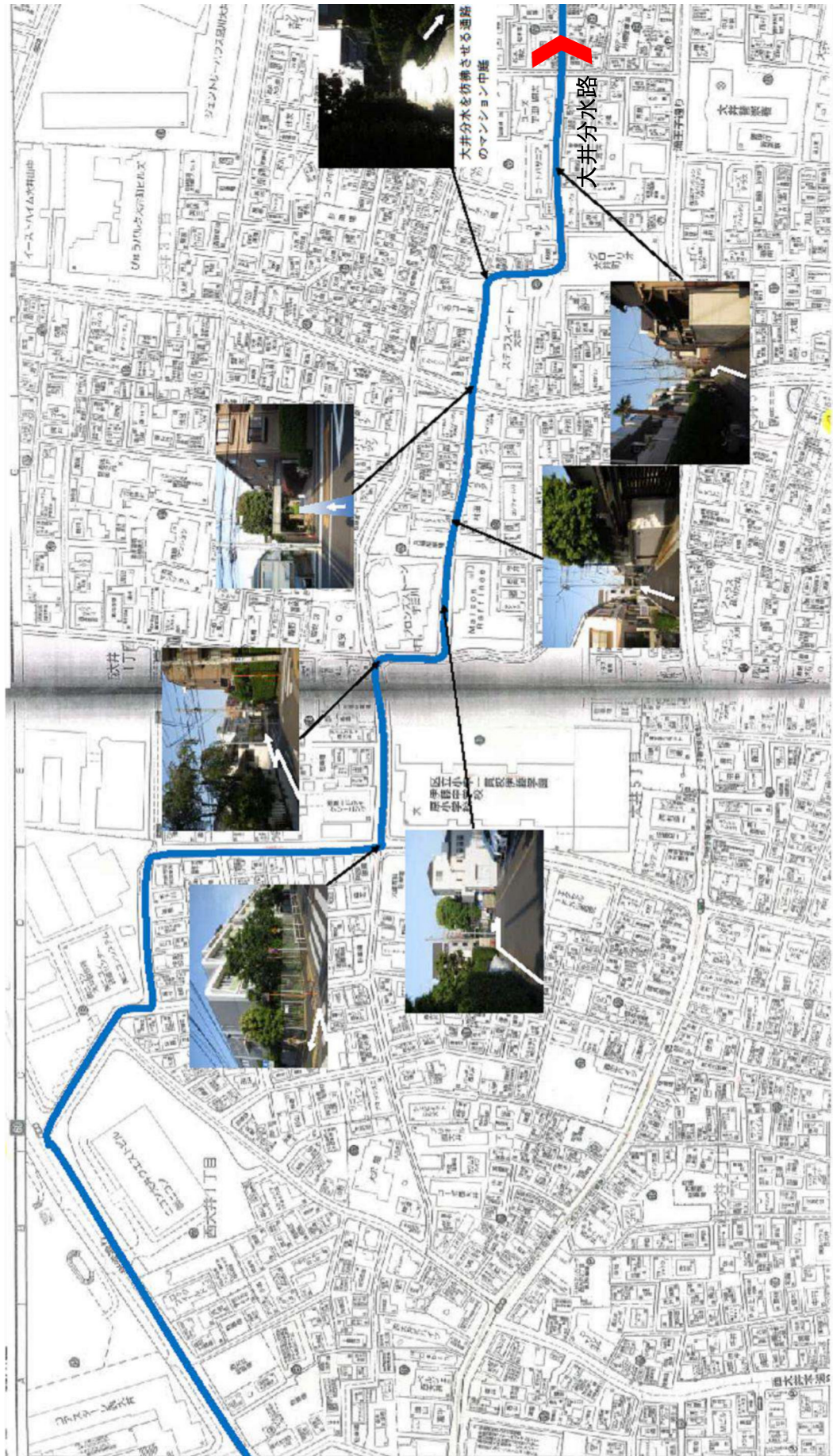
地図 6-3 大井分水(中 1)



地図 6-4 大井分水(中2)

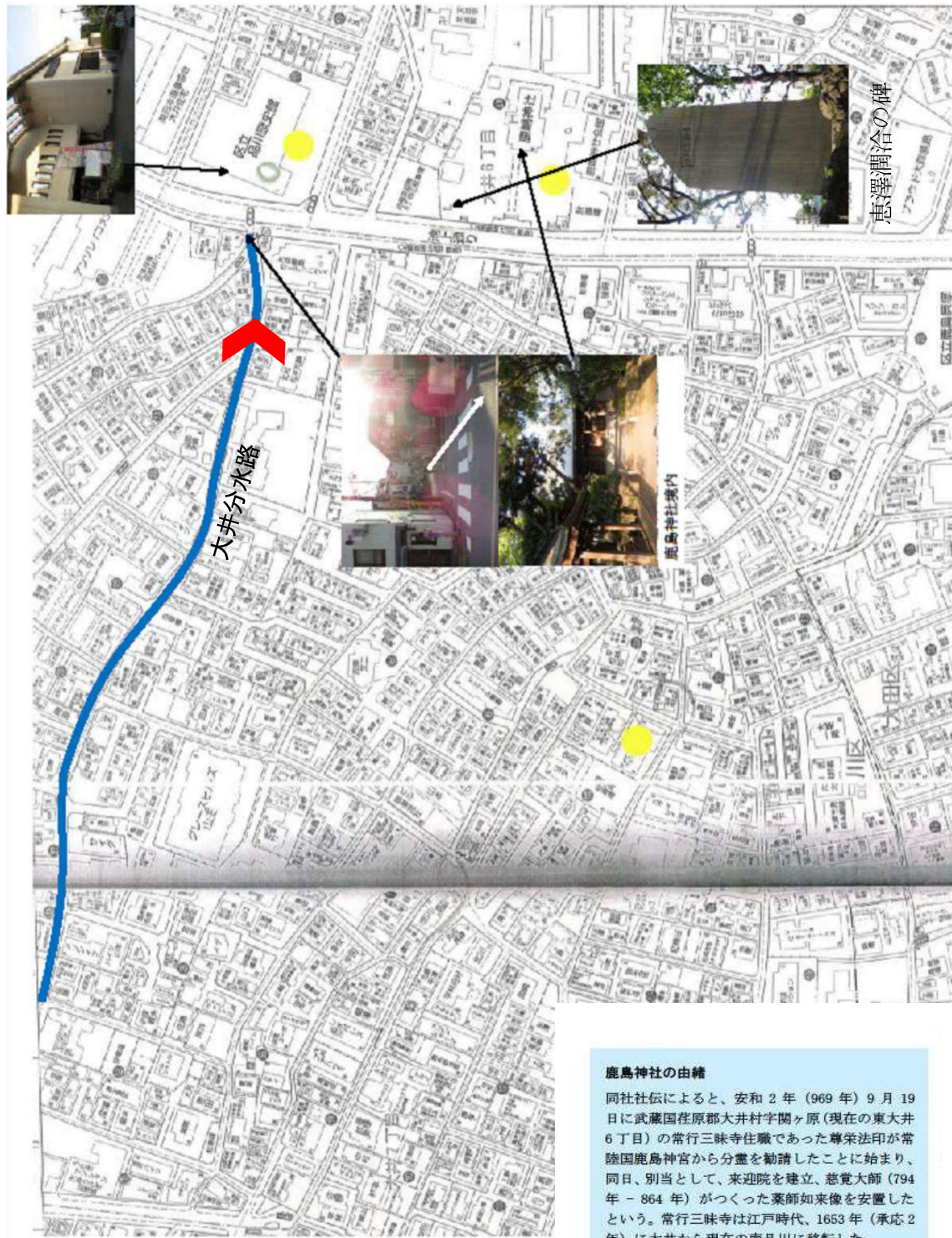
6

ー5 大井分水一面影ポイント案内図(5)



地図 6-5 大井分水(中～下)

6 — 3 大井分水一面影ポイント案内図(6)



地図 6-6 大井分水(下)

鹿島神社の由緒

同社社伝によると、安和 2 年(969 年)9 月 19 日に武蔵国荏原郡大井村字関ヶ原(現在の東大井 6 丁目)の常行三昧寺住職であった尊榮法印が常陸国鹿島神宮から分霊を勧請したことに始まり、同日、別当として、来迎院を建立、慈覚大師(794 年 - 864 年)がつくった薬師如来像を安置したという。常行三昧寺は江戸時代、1653 年(承応 2 年)に大井から現在の南品川に移転した。

1868 年(明治元年)、神仏分離令を受け、来迎院と同一敷地内で分離、同社は大井村の村社、総鎮守と位置づけられた^[2]。来迎院は通称「お茶屋寺」と呼ばれる。1875 年(明治 8 年)5 月 15 日、同敷地内に簡易普通小学校が開校、同校は移転後、品川区立大井第一小学校と改称した。

古来より祭礼として相模が奉納されており、渋谷水川神社、世田谷八幡宮と共に江戸郊外の三大相模として知られていた。現在の社殿は 1931 年(昭和 6 年)に竣工した。旧社殿は 1862 年(文久 2 年)の造営で精巧を極めた鎌倉彫の彫刻が施されており、これを後世に伝えるため境内末社として移設して現存してある。

1988 年(昭和 63 年)、しながわ百景(鹿嶋神社)に認定される。

出典：ウィキペディアより

調査後記

① 品川用水の水利遺構にこだわる

- 武蔵野台地の分水嶺をたどって流れる玉川上水と分水路の造形に関心をいだいたのは、1973年ごろからであった。
- その造形と水の効用を明かしてみたいと考え、分水路網の本格的な調査をはじめ、およそ10年後に「武蔵野の水路」-2004年発行-(東海大学出版会)を刊行した。
- この書中には、18の分水路網を図と写真そして解説文でうめたものとなっている。
- 武蔵野台地上に開削された江戸市中や、農村に通水されていた分水路のなかで大規模な水路のひとつに「品川用水」(全長約28Km)があった。
- この時期、品川用水に関する資料・情報が入手できず、流路のほとんどは、埋められていることが判明したため、上流区間の現地調査とその報告、解説したことでとどまった。
- たとえ埋められていても末端部まで調査し記録しておかなかったことが、歳月がたってもくやみつづけられた。この思いを払う機会が本調査実現の原動力となった。

② 玉川上水と分水路網を「日本遺産」にする活動に参加

- 2001年9月、小平ユネスコ協会から「玉川上水を世界遺産」にするプロジェクトがたちあがり、その講演を依頼された。
- 筆者に与えられたテーマは「玉川上水の価値と展望」であった。この文中の大半は、分水路網の価値と多面利用の効用について解説したものであった。
- このときまとめた小論をねりなおし再調査をおこなってきた。この論文は後年になって学位論文の一角に組み込むことができた。

③ 通水が止められている分水路群の姿を記録しておくことの重要性

- 現在、玉川上水下流部(三鷹市より下流部)の分水路に通水は無くほとんど埋められている状態である。
- このまま放置されておくと300数十年もの長きにわたって利用してきた分水路群は、消滅してしまうだろう。
- 分水路跡地を探査してみると、分水路の水利遺構の一端が各地で見えかくれしていることがわかってきた。
- 残存している水利遺構の残し方や活用方法によっては、「まちづくり事業」の中で取り込み、活用できると考えられる。
- この着想を具体化するため、これまで調査未踏にしておいた「品川用水」を取り上げ、調査・研究に着手した。その成果の一端がこの報告書「品川用水における水利施設の残存状況調査」である。

④ 2015 年～17 年にかけて玉川上水と分水路網の「未来遺産—申請」の活動に参加し認定を受ける

- この活動の一環として 2016 年 10 月「水と緑の回廊・玉川上水と分水路網 - 多摩から江戸・東京をつなぐ水循環の保全・再生」と題したパネル展と講演会が東京都議会議事堂 1F ホールで開催された。
- 展示ホールには、これまで分水路網を調査研究してきた 8 チームが、それぞれ大パネルにまとめて公開した。この中に「品川用水に残る面影に出会うマップ」と題したパネルを展示することができた。
- 品川用水の通水地-品川区域内の水利遺構の永年の念願であった調査ができたのは、「とうきゅう財団」の支援をいただいたことで進展することができた。紙面ながら謝意を記させていただいた。

⑤ 品川用水の水利遺構地を保全・継承・活用するまちづくり

- 品川用水路の跡地(本調査では『水利遺構地』と称する)は、道路、公園、広場、公共施設に接している場合が多くあり、流水ありし頃の「面影」をとどめている。
- これらの中には、緑地として埋められている区間を選出して埋土された土を取り出し流れ空間として再生できる可能性も残っている。
- 分水路網の活用メリットは、多面的利用形態が可能な仕組みが取り込まれていることである。このことに留意して近未来の市民が水の恩恵を受ける空間づくりをするため、現存する水利遺構地の保全に工夫しておきたいところである。

記 — 渡部

⑥ 品川用水の水利遺構調査に参加したメンバー

- ・ 須藤訓平・植田直樹・渡辺正子・新井真理以・久保一郎・須藤香織・新庄靖弘・大極利明
- ・ 牛島真弓・渡部一二

参考文献 及び 参考資料一覧

1. 文献関係

- (1) 「品川歴史館解説シート」 NO. 14 「品川の農業」
同上 NO. 18 「江戸の大名屋敷」
同上 NO. 13 「品川宿」
- (2) 歴史と文化の散歩道 120. 121 東京都
- (3) 第五つうしん 66. 67 号 区編集委員会 平成 12 年 12 月号
- (4) 「品川用水」 溜池から用水へ 区教育委員会 平成 6 年
- (5) 「品川用水沿革史」
- (6) 「江戸・東京の水利探訪」(その 15) 品川用水 大橋欣治 Jour. JSIDRE JUN. 2008
- (7) 「品川区の百年」 30. 31. 92. 93. 112. 113. 172 郷土出版社
- (8) 「品川区・史跡散歩」 平野栄次 学生社
- (9) 「目黒区の歴史」(東京ふる里文庫 4) 目黒区郷土研究会 名著出版
- (10) 「目黒区史」 都立大学学術研究会編集 目黒区
- (11) 「目黒区五十年史」 目黒区史研究会編集 目黒区
- (12) 「武蔵野の水路」 渡部一二 東海大学出版会 2004 年版
- (13) 「水土を拓いた人びと」 渡部一二共著 農文協
- (14) 「玉川上水を世界遺産に-プロジェクト」2007 小平ユネスコ協会 渡部一二共著
- (15) 「東京の水」2009 Fragment 古戸越川(1)-7/9

2. 地図、絵図関係

- (1) 品川区詳細図 日地出版株式会社 昭和 52 年版
- (2) 地形図(東京南部) S=1/25000 国土地理院
- (3) 東京府荏原郡大井町平塚村復刻図 S=1/5000
- (4) 品川領宿村寺社門前町絵図
- (5) しながわ観光マップ S=1/10000 編集：しながわ観光協会/品川区
- (6) 「品川用水」：『品川用水の主な水路』 S=1/10000 品川区教育委員会
- (7) 目黒筋御場絵図(宇田川家蔵)
- (8) 品川区史跡めぐりマップ S=1/10000 品川区教育委員会
- (9) 地形図(大正 12 年) S=1/10000 陸地測量部
- (10) 安政 5 年絵図(スケール不明) 1858 年
- (11) 地形図(明治 13 年) (スケール不明)
- (12) 東京都・復刻版 S=1/5000 (年代不明)
- (13) 江戸・東京の上水、用水位置図(明治 42 年測図) S=1/50000
- (14) 東京府武蔵国荏原郡品川宿迅速図 縮尺不明
- (15) 品川区内の主な品川用水路と史跡場所などの図 S=1/15000(約) 年代不明

- (16) 品川区管内図(河川・公共溝渠位置図) S=1/10000 平成 24 年版
品川区防災まちづくり事業部
- (17) 品川用水絵図
- (18) 東京西南部・荏原 地形図 縮尺不明 昭和 45 年修
- (19) 品川歴史館紀要第 10 巻 P64-65 「武蔵国小高一大井駅」
縮尺 明治 14 年測量 1/20000 迅速図を 50%縮小
- (20) 品川区詳細図 縮尺不明 日地出版 昭和 33 年
- (21) 品川歴史館特別展図録「荏原」 2004(品川用水普通水利組合沿革図) 写し
- (22) 「品川区 CITY SCAPES」 S=1/20000
- (23) 「品川区 指定文化財一覧図(マップ)」 S=1/10000
- (24) 「しながわ観光イラストマップ」 S=1/10000 しながわ観光協会

- 以上 -

品川用水における水利施設(品川区内)遺構の残存状況調査

(研究助成・一般研究VOL. 39—NO. 232)

著 者 渡部 一二

発行日 2017年11月

発行者 公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

<http://www.tokyuenv.or.jp/>